

---

# 魔法少女リリカルなのは ～転生者達の戦い～

ダニエル・山田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～転生者達の戦い～

### 【Nコード】

N2983N

### 【作者名】

ダニエル・山田

### 【あらすじ】

信号無視してトラックに撥ねられ死んでしまった主人公。

そんな彼の自業自得な死にざまが、上位種達の目にとまった。

暇つぶしの為に創った作品世界に彼を転生させる上位種達。

与えられた能力は【金色のガッシュ！】

そして、転生された作品世界はリリカルなのはの世界。しかし彼にはなのは知識が全くない。

そんな右も左もわからない世界に転生された彼に待っていたのは、同じように転生された人間達との戦いだった。

原作介入を目ろむ転生者を『殺す』転生者。原作キャラを『幸せ』にするために介入する転生者。

その他様々な転生者達の思惑が交差する中、彼——有澤健一が望むのは『平凡な生活』。

そんな無害な健一を、登場人物と転生者達は彼のことを無視して巻き込んでいく。

健一はたった一つの大切な『平凡な生活』を護るために、転生者達と戦うこと決意する！

注…この作品はたびたび僕の都合で改稿しますので、読むさいは注意してください。

※10月18日、プロローグから無印編第四話を改稿しました。

## プロローグ（前書き）

最初に、この作品は様々な他の作品の能力がでてきます。その能力は僕の独自の解釈と設定を前提に物語が進みます。

そういうのが嫌いな人は、そのまま戻るを押してください。

そこまでして読む価値はこの作品にはありません。

それでも良いと思う人はどうぞご自由に。

それでは、【魔法少女リリカルなのは〜転生者達の戦い〜】はじまりはじまり。

## プロローグ

いつも通りの一日のはずだった。

朝起きて飯を食って学校に行ってく授業を受けて昼飯食ってまた授業を受けて学校が終わって家に帰って晩飯食って風呂入って寝る。

そんな、今日みたいな明日を過ごすはずだった……。

でも違った。

学校に向かう途中だった。特に急ぐ必要もなかった。ただ青信号が点滅したから、赤になる前にさっさと横断歩道を渡ろうとした。それだけだった。

横断歩道の真ん中まで渡ると信号が赤になった。急いで渡ろうと走りだした。

すると、道路の向こうから大きな音が響いていたことに気付いた。見ると大型トラックが眼前に迫っていた。

オイオイ、少しはスピード緩めろよ……。

そんなことを思い浮かべながら運転席を見ると、運転手が居眠りしていた。

それを確認したと同時に、体に大きな衝撃が襲った。

……え？

体はそのまま数メートル先まで飛ばされ、アスファルトに叩きつけられる。

血がドクドクと体から溢れだすのがわかる。熱かった。

それにしてもおかしい。普通なら激痛で悶え苦しむはずだ。

それなのに痛みが一切ない。

ああ、そうか……。

答えはすぐにわかった。

俺、死ぬのか……。

そうだとわかったらすぐに納得した。そして大発見。死と直面しているはずなのに、以外と自分が冷静だと言うことを初めて知った。

あはは、死ぬってこんなにあっさりしてるんだなー。  
アイツも……こんな気分だったのかな？

ふと脳裏に過ったのは、生涯でたった一人の友達の顔だった。  
まあいいや。どうせつまらん人生なんだ。とっとと死のう。

眼を閉じる。すると意識がどんどんと薄れていく。そしてそのま  
ま俺——白石信博しろいしのぶひろは、二度と目を開けずに死んだ。

「……ここは？」

気が付くと、俺は何もない空間に独りいた。

地面もない、空もない、色もない、無機物もない、有機物もない。  
「俺、死んだはずじゃ？」

次に確認するのは俺自身。しかし見慣れた俺の肉体はどこにもな  
かった。

「どうなってんだ？」

これってもしかして死後の世界？ あの時って言う奴ですか？  
でも三途の川も、閻魔様もなにもない。一体どうなってんだ？

「気が付いたか？」

いきなり声が聞こえた。すると目の前に白い変な球のようなモノ  
が現れた。

「なんだコレ？」

「「なんだコレ」か、ふん。下等種如きが私をコレ扱いとはな。私  
は×××××だ」

「は？」

いきなり現れて随分な物言いだな。つか、なんだ今の？

この変な球が名前みたいなモン言おうとした途端、言葉が聞こえ  
なくなったぞ。

いや、聞えなかったんじゃない。聞きとれなかったんだ。

「ふむ。どうやら下等種如きの言語では、私の名は表現できんよう  
だ」

俺に気にせず、勝手に理解する変な球。

「てか、アンタなに？ つーかココどこ？ どーして死んだはずの俺が、こんなわけ分からんとこに居んだよ？」

とりあえず会話が可能なようだから、今感じてる疑問を一気にぶつけてみた。

「ふん。一度に複数の質問をするとは、所詮は下等種と言うことか……。いいだろう。特別に下等な下衆の質問に答えてやろう」  
今度は下衆呼ばわりかよ……。

「第一の解答。私は貴様ら生命共を創り出した上位種だ」  
自信満々に答える変な球。つーか、それだけじゃなんの説明にもなってねーぞ。

「はぁ……。えーっと、上位種ってなに？」

「ふん。そんなこともわからんとはな。良いだろ特別に詳しく教えてやろう」

あんな単語だけの説明で全て理解できるかボケ。

「上位種とは世界を創り、貴様ら下等種共の魂を創り、才能与え、力を与え、その世界に送り、下等種共を管理と観察をしているのだ」

「えーっと、つまり、神様みたいなモンか？」

詳しく説明されてもよく分からなかったので、とりあえず神様みたいなモンだと思うことにしよう。

ついでに、この正体不明の変な球と平和的な対話で歩み寄ってみよう。

「ふん。私達を貴様ら下等種共が造り出した妄想の産物と置き換えるとはな。ま、下等種の低能な理解力では、私達を理解できないのは当然だろう。よかろう、私達を神と思うことを許可しよう」

「はぁ、どうも……」

とりあえず神様と言うことで決定した。

「第二の回答。ココは第0の世界だ。私達上位種達は、この世界を基盤として数多の世界を創る。いわばお手本のような世界だ」

「へー」

0の世界ねー。

で、その他多数の世界があるってことか。もうなんでもアリだな。

「第三の回答。貴様がこの世界に居るのは、私が望んだからだ」

「へー……って、はぁ？」

なんか今、神様がとんでもないこと言いやがったぞ。

「どう言うことだよ？」

「ふん。少しは自分で考えると言うことをしないのか下衆が。第四の回答。貴様は私達の暇つぶしとして呼んだのだ」

「暇つぶし、だと？」

どう言う意味だ。

「そうだ。貴様ら下衆共の魂をわざわざこの世界に呼んだのはそれが目的なのだ」

「つまりなんだ？ 俺はアンタの玩具になるためにココに居るってわけか？」

「ふん。玩具か……。下衆の分際で言い得て妙なことを……。虫唾が走るがその通りだ」

褒めるか貶すかどっちかにしろ。

「で、俺を玩具にするってことはアレか。俺の苦しむ姿でも見たいってことなのか？」

嫌な趣味してやがるぜ。

「ふん。誰が貴様ら下衆の苦しむ様を見て喜ばんといけない。私にそんな性癖はない」

つまりそれは、俺のようなモンを連れて来て、苦しむ姿を見て喜ぶ同族が居るってことか？

随分スケールのでかい性癖ですこと。つか、神様にもそんな性癖あるんだ。

「ふん。貴様ら下衆を呼んだのは、私達が暇つぶしの為に創った世界に貴様らを行かせるためだ」

「はぁ」

たかが暇つぶし如きに手の込んだことを……。ん？ 待てよ。創っ



た世界に行くってことはもしかして……。

「俺、転生すんの？」

俺は既に死んだ人間。そんな奴が世界に行くってことは、転生か原住民に憑依するかのどっちかだ。

「ふん。下衆の分際で随分察しが良いな。気持ち悪い……」

だから褒めるか貶すかどっちかにしろ！　っーか気持ち悪いってなんだ！　気持ち悪いって！

「……すうー。はあー。で、転生するのは良いけどよ。そこでなにすりゃいいんだよ？」

とりあえず深呼吸して心を落ち着かせてみる。ま、肉体がないから真似するだけけどね。

「ふん。そう慌てるな。今、下等種如きでも分かりやすいように説明してやろう」

「はいはい。手短にお願いしまーす」

神様の上から口調に一々イラついても疲れるだけだ。こんな時こそ、生前鍛え上げてきたスルー技能が役に立つ。

「まず、貴様ら下衆に行ってもらう世界は、暇つぶしをかねて私達が新たに創り出そうとしている世界形式のサンプルだ」

おいおい。そんな新しい挑戦に暇つぶし程度の気持ちで取り込むなよ。

「そのサンプルと言うのは、貴様ら下衆共が妄想した作品世界だ」「作品世界？」

てことは、フィクションがノンフィクションになるってことか？　へー、そりゃ確かに面白そうだな。

「そうだ。時間軸や世界設定、登場人物の背景やストーリー展開などを忠実に再現している。そこで貴様ら下衆にやってもらうことは、その世界に本来存在しない貴様らを投入し、どういった展開になるかの実験をする為だ」

わお。さすが神様。なんでもアリだな。

「ふーん。まあ、大体のことはわかったけどよ。その作品世界って

どんな世界なんだ？」

「【魔法少女リリカルなのは】だ」

「……なにそれ？」

リリカルなんたら？ 魔法少女ってことはアニメか？ てか、なんでよりにもよってアニメなんだよ！ アンタら仮にも上位種なんだろ！ もっと格式の高い作品にしろよ！

「知らないのか？ 愚かだ愚かだと思っていたが、ここまで愚かとは……はんっ」

変な球は、今まで以上に人を見下した言い方をして、鼻で笑いやがった。鼻ないけど。

「まあ、ココで説明してもいいが、それじゃネタバレになるから敢えて概要は教えん」

「あっそ」

もういいや。好きにしてくれ。あ、でもコレだけは知りたいな。

「選考基準はなんなの？」

とりあえず、どういった経緯でこのアニメになったかを知りたい。「ふん。そんなことを知ってどうする。本当、下等種って言うのは無意味なことを知れたがる。良いだろ教えてやる」

コレは一々相手を見下さないと説明できない病氣かなにかですか！？……まあいいや。怒ったところで意味はない。今度からはコレのことは頭がアレな奴だと思っとこう。

俺は神様に憐みの視線を向ける。眼球ないけどね。

「私達が貴様ら下衆の妄想作品を一つ一つ視聴、または読破した結果、何百回にも及ぶ会議を行い、最終的に辿り着いたのがくじ引きでどの作品にするかを決めることだ。で、晴れて選ばれたのが、私が推薦したこの世界と言うことだ」

「お前の趣味じゃねーか！ つーか、最終的にくじ引きってなんだよ！ たかが作品決めるだけでなんで三ヶタ超える会議してんだよ！ そんなことする暇あったら仕事しとけクソ神共がっ！！」

あまりにもくだらない結果だったので、つい神様相手に本気でツ

ツコンでしまった。

反省はしてない。後悔もしてない。俺は何も悪いことはしてない。そうだろう？

「ふん。下等種如きがよく吠える」

しかし俺の渾身のツツコミは「よく吠える」と言うことで一蹴された。

なんかもう疲れたよ……。

「はあ……。もういいや。で、俺がその世界に転生してなにかすりゃいいんだな。具体的になにすんだよ？」

俺はため息を吐いて、半ばやけくそ気味で訊いた。あ、口ねーから息でねーや。

「なにも。私達は貴様らを投入したらどうなるかを観察するだけだ。こちらからは一切の干渉もない。そこで好きなように生きて、第二の人生でも謳歌すればいいだろ」

「はあ……。まあ、好きにしろってんなら好きにするけど……」

少々拍子抜けだ。てっきり、そこに行って登場人物と戦わせたりするんだと思ってたけど、どうやら違うようだ。

「で、今回、作品世界に行くにあたって、下等種共には力を与えることになっている」

「力？」

「そうだ。今から向かう世界は魔法が主流の世界だからな。無能ではどうすることもできない」

「ふーん。で、その力って具体的にどんなの？」

「ふん。下衆共に与える力の下衆共が考える決まりだ。好きに選べうわーお。ここで全部まる投げッすか？」

「ん？ ちょっと待て。好きに選べって、それって俺が知ってる漫画の能力とかでもOKなの？」

「構わん。先刻言った通り、私達は貴様らが造りだした妄想作品を全て視聴、読破し、ソレらを登録、データ化してるから、どんなモノでも与えられるぞ」

うわぁー。マジで凄いですけど……。それってつまり地球の過去に出回った創作物を全て集めたってことだよな。

個人、組織、国でさえそんなことできねーよ。

やっぱ神様って呼ばれるだけあるわ。次元が違うな。

その凄さをもっとマシな方に持ってきてくれねーかな。主に選考とか選考とか選考とか。

未だに選考結果に納得いかない俺が居た。

「あっそう。じゃあその漫画の登場人物が持つ全能力とかもOKなの？」

「規定はない。好きにしろ」

ほう。それはまた……。あ、でも俺、あんまバトル系の漫画とか読まねーからな。なにかあったかな……。えっと……。唯一持ってたのは……。

俺は生前所持していた漫画を思い出す。

「ん。……そうだ！ 【金色のガッシュ！】の全キャラの魔術と能力全部使用可能で良いか？」

「【ガッシュ】か……。下衆共が考えた作品としてはアレは良作だったな。特にファウード編の――」

なんかいきなり語りだしたぞ。どうやらコイツも読んでたみたいだ。それどころか良作だと褒めていやがる。

「――っと、つい話し過ぎた。よし、良いだろ。貴様にはその力を与えよう」

「やりー」

神様がそう言い終わると同時に、なにか変な力みたいなモノが流れ込んできた気がした。たぶん、これでガッシュの力が使えるみたいだ。

おっしや、これで清麿の答えをだす者も使えるぞ。

「では次はデバイスだな」

「デバイス？」

なにそれ？ リリカルなんとかに出て来る専門用語か？ 早速答

ンサートーカー

えをだす者でも使って見るか。

「ふん。無知は罪だぞ下衆。いいか、デバイスとは――」

おいコラ。人が折角手に入れた力を使おうとした途端説明すんなよ！ 変な所で親切ぶりやがって。頼んでねーっの。テメエはKYか？

「――つまり、術者を補助する道具だ。理解したか下衆」

「……はいはい。ご説明どうもありがとーございまーすー」

わざとらしく、嫌味ったらしい口調で礼を言ってみるが、神様からはなんの反応も返って来ない。

もしかしたら、俺が嫌味で言ってるのに気付いてねーのか？

だとしたら筋金入りのKYだな。

「ふん。で、今回貴様らに渡すデバイスは、ユニゾンデバイスだ」  
「ユニゾンデバイス？」

また専門用語が出てきやがった。よし、今度こそ答<sup>アンサートーカー</sup>えをだす者を使うぞ。

「ふん。ユニゾンデバイスとは――」

っておい！ また勝手に説明始めやがって！ 嫌がらせかこの野郎！ もういい。今度からテメエのことはKYと呼んでやる！

「――と言うわけだ。因みにこのデバイスは三つの機能がある。一つは先刻説明したユニゾン機能。二つは使用者の任意で変更可能のアームド機能。つまり武器だ。で最後が人型だ」

「……そう」

「ふん。で、下衆。コレの人格と名はどうする？ 性別、性格、容姿、待機モードの形など要望があれば叶えるぞ？」

「ん……」

正直考えるの面倒だけど、KYに任せたら碌でもないモンになりそうだから真剣に考えよ。

「……とりあえず、性別は女性型。性格は礼儀正しい奴で。容姿はそうだなあ、美人で金髪ロン毛ね。待機モードってアクセサリーでも良いのか？ だったらロザリオのペンダントで頼む」

「ふん。要望の多い下衆だ」

KYが文句を言う。するとなにも無いはずの空間が突然光りだし、消えると目の前には俺の要望通りのロザリオのペンダントが現れた。  
「お、なかなかカッコいいのができたな」

「ふん。私は上位種だぞ。貴様ら下等種とはセンスが違うのだよ。センスが」

なぜ二回も言う？

「あーはいはい。どうもありがとねー」  
棒読みで礼を言う俺。

「ふん。ちなみに、貴様ら下衆の魔力値はS+だ。魔力だけなら登場人物より上だから、滅多なことではやられんはせんだろ」

どうでもいいけどさ。さっきからこのKY、ふんふんふんふんばつか言って正直うぜえんだけど。お前は糞転がしかってツツコミてー。うん？ そいやさっきから俺のことを複数形で呼んでんな。…ま・さ・か。

「なあ。まさかと思うけど、他にも転生する奴が居んのか？」

「ふん。下等種の分際によく気付いたな。その通りだ下衆う」

うわ。今までない以上の嫌味な貶しやがったぞ。コイツ。

「……で、何人居んの？」

「さあな。私が把握している下衆は三人だが、それ以上は居るだろう」

「ふうん。で、もし他の転生者と会ったらどうなるわけ？」

「知らん。それは出会った下衆によるだろう。貴様に興味が無い下衆も居れば、貴様を殺す下衆も居るかもしれん」

おいコラ。それってつまり……。

「一応訊くが、ソイツらも俺と同じような力があんのか？」

「当たり前だろ」

KYは当然だと言わんばかりに俺に言う。

「ってことは、警戒すんのは登場人物じゃなくて同じ転生者じゃねーか！」

それって、登場人物より厄介じゃん。命の危険を感じるよ！

いや待て、そう考えるのは早計だ。相手も俺と同じ人間だ。そんないきなり殺しにかかるような奴じゃないはずだ。うん。

「そう言えば、さっき妙な噂を聞いたな。なんでも他の上位種が、面白半分で殺人者を転生させたとか」

うわー、ダメだこりゃ。まさかプロローグで超重要な伏線がでるとはねー。俺終了のお知らせかな。まだ始まってもないけど。

つかその神様ココに連れて来い！ 俺の右ストレートを食らわせやるから！ 腕ないけど。

「まあ相手が攻撃してきたらやり返せばいいだけの話だろ。簡単じゃないか。貴様ら下衆で低能な下等種共は同族同士、争うことが大好きなんだろう？」

「……………」

顔はないけど、もしKYに顔があったら絶対に笑っている。そう確信できた。だから俺はKYを睨む。眼球ないけど。それでも睨む。「では、そろそろ送るぞ下衆。貴様らがこれから生まれる作品世界の時系列は、物語が開始する九年前の時間だ」

「あっそう」

素っ気なく返事をする。どうでも良いから早くKYとおさらばしたい。そう思っていたら、俺の意識が徐々に薄れていった。

「ま、精々私達を楽しませるため、愉快に素敵に踊ることだな。愚かな下衆共が」

最後にKYがなんか言った気がするが、よく聞こえなかった。そして、俺の意識は完全になくなる。

こ、ここは……。

意識が戻って目を開けたら、さっきのなにもない空間と違い、壁があり、天井があり、色があり、無機物があり、有機物があった。そして、それら全てが逆さまだった。

すると、いきなりケツに激痛が走った。ビククリして俺は思わず、「おぎやああああああああああ！！」

と産声をあげていた。

なんか久しぶりに肉声を聞いた気分だ。

どうやら無事にリリカルな何とかの世界に転生したみたいだな。

こうして、俺の第二の人生が始まる。



## プロローグ（後書き）

ちなみに不定期更新です。

## 無印編 一話目

さて、無事に転生に成功したわけだが、赤ん坊からやり直すのつて、正直辛い……。

体が思うように動けない。一日中ベビーベッドで寝たきりの生活だよ。寝返りも容易じゃないし。更に眠気が尋常じゃないから、気が付いたら寝て起きての日々。

更に言うと飯に飽きた。

毎日粉ミルクを飲んでの繰り返し。最初はコレが粉ミルクの味かと思い新鮮だったが、今はもう哺乳瓶を見るのも嫌だ。

でも一番嫌なのが、下の世話だ。

なにが悲しくて知らない女性に自分の下半身を披露しなきゃならんのだ。いやまあ、一応この世界では俺の母親だから、世話をするのは当たり前なんだけど……。

でもさ、よく考えてくれよ。どう見ても若い女性＋美人さんにさ、自分の毛も生えてない陰茎を見せてしまうこの恥ずかしさ……。酷い羞恥プレイだよ。

あー、早く自分で下の世話ができる歳になりたい……。

そんなことを嘆いていると、壁に飾られているロザリオの宝石が光った。

（『心中お察しします。マスター』）

（おー、マリアか。全く、下手に自意識があるせいでストレスが溜まるぜ）

薔薇のマリア

俺のデバイス、マリアローズが慰めてくれる。普段は待機モードで部屋の壁に飾られているアクセサリーと一緒に飾っている。

どうやらあのKY、俺が産まれる前にこっそりこの家にマリアを紛れ込ませていたようだ。

（『それは仕方ありません。諦めて下さい』）

フフ。なんか冷たいな……。俺の相棒。

礼儀正しいのは良いけどさ、なんか考え方が合理的なんだよな。くそ、こんなことならちゃんと性格考えとけばよかった……。

（そいやさ、俺って転生者で能力持ちだよな？）

（『はい』）

アンサートーカー

（なのにさ、答えをだす者が使えないんだよ。どして？）

この家に来て、俺が寝るベビーベッドの上にある物。それがどう言う名称が気になって使おうとしたら使えないことに気付いたのだ。

（『簡単です。いくらマスターに自意識があつて前世の記憶があつても、マスターは赤ん坊です。赤ん坊の脳で答えをだす者を使ったら、脳がそれに耐えきれません。なので、私の独断ですがリミッターをかけさせてもらいました』）

アンサートーカー

あー、なるほど。そういう清麿も最初は答えをだす者が不安定だったから脳がリミッターをかけたんだよな。

（『申し訳ございません。マスターの許可も得ずに勝手なことをしてしまい』）

（別に良いってことよ。もしお前がリミッターかけられなかったら、今頃俺、脳漿撒き散らして死んでたかも知れねーし）

転生した途端死亡って悲しすぎる……。

KY達にいい笑いの種を提供するところだったよ。

（で、そのリミッター外すのって難しいの？）

（『いえ、マスターが命じれば今でも解除できます』）

アンサートーカー

（ふーん。そんじゃさ、答えをだす者が安全に使用できるのっていつ頃なの？）

（『十五～六歳ですね。その位の肉体年齢でしたら脳も耐えられると思います。でも完璧に使いこなすには、厳しい鍛練が必要になります』）

アンサートーカー

（ふーん、なるほどね。まあなんにしても、それまで答えをだす者を使わなければ良いってことね）

（『そうなります。ですが九歳になりますと回数制限になりますが使用可能になります。勿論、脳も耐えられます』）

（お、そうなのか？　で、何回なんだ？）

（『一日一回です』）

（OK、理解したぜ）

制限付きの力か……ま、こっちの方が俺の性にあってるな。格ゲーとかは、使いやすいキャラより癖のあるキャラの方が好みだし。  
さて、現状の俺の能力は理解出来たし、次は今後をどうするかだな。

（なあ、マリア。お前、ストーリー展開とか登場人物の詳しい情報とかはあるの？）

（『すみません。私のデータベースでは、マスターの望む情報はありません。あるのは、この世界の世界設定と魔法知識、それとマスターを強くする為の方法だけです』）

（そっか……）

（『すみません。お役に立てなくて』）

（気にするな。俺がこの作品を見てなかったのがいけなかったんだから）

俺はマリアに気を使いながら、これからのことを考える。

さて、原作知識皆無の俺が、この世界でどうすればいいのだろうか？  
まあ、最低でも九年後に、物語が始まる情報があるだけマシかな。  
そいや、あのKY。俺以外にも転生者が居ると言ってたな。それも複数。中には殺人者も居ると言ったが、全員が殺人者ってわけでもないだろう……。

同じ転生した間柄なんだ、俺の現状を話せば分かってくれるかもしれない。

いや待て、もしかしたらいきなり襲いかかってくる輩も居る可能性もあるか。だとしたら、最低限の力もつけないとな。

アンサートーカー

答えをだす者が使えないんじゃ、俺自身の頭脳と肉体でどうにかしないとイケないしな。

となると、今後の目的は俺自身の強化と、同じ転生者の搜索ってことでいいか。

ラッキーなことに、マリアが俺自身を強くする方法を知ってるしな。

どうやらコレはあのKYの計らいらしい。

KY曰く、「ふん。下衆共がどんなに強力な力を持つのが、最初からソレを完全に使いこなすことは不可能だ。使いこなしたければ下衆自身の努力が必要だ。努力なしで強くなろうと考えて下衆共に告げる。ざまあ。世の中そんなに甘くはないんだよう。せいぜい血と汗を流しながら苦痛に歪められた表情で努力するのだな。私達はそんな下衆共の面白可笑しい姿を観察しているから、せいぜい楽しませることだ」とのことだ。

マリアに脳内再生させてもらったが、本当、憎たらしいほど腹が立つが、前半はなかなか好感が持てる言葉だったな。悔しいけど。

ま、これは後でマリアと相談でもするか。

それより今はこの眠気をどうにかしないとな。

(悪い、マリア。眠いから寝るわ)

(『はい』)

(起きたら相談したことがあるから。そんじゃおやすみ)

(『お休みなさい。マスター。いい夢を』)

にしても、天井にぶら下がってグルグル回るアレは一体なんなんだろう？

そんな疑問を抱きながら目を閉じると、すぐに意識は夢の世界へ旅立っていた。

俺が産まれて九年の年月が経った。

この九年、色々なことがあった。

初めて自分の足で立てるようになったあの感動は、きっと忘れはしないだろ。下の世話も、自分一人で出来るこの幸せ。あの羞恥プレイの地獄から抜け出た時はどれだけ喜んだことか。

ま、嬉しいことがあれば悲しいこともあり、痛いこともあった。

そんな九年間を過ごした。

そしてそんな俺に待っていたのが地獄。そう、マリアによる鍛練だ。

ありとあらゆる方法で、俺を虐め——もとい鍛えてくれたお陰で、ちよつとやそつとじゃ負けにくいらいの力を手にしたと自負できる。とまあ、そんなこんなで俺は現在、私立聖祥大学付属小学校に通っている。

そこでの俺の学生生活は、まあ下手に目立たないよう、そこそこ楽しく過ごしている。

ちなみに、転生者との出会いはいまだにない。一体何処に隠れているのだろうか。

ま、今じゃそんなもの、どうでもいいことだ。

九年前に掲げた方針も、綺麗に溝に捨てた。

なぜなら俺は今、この平凡な生活に満足しているからだ。

そこそこの家庭環境、そこそこの学校生活、そこそこの対人関係。まさに平凡の言葉にピッタリで素晴らしい。

こんな素晴らしい平凡を捨ててまで、どこかの転生者と出会って壊したくない。

それに、これ以上今の両親に変な心労も与えたくないし。

もし他の転生者に伝える術があれば、俺はこう言いたい。俺を巻き込まないなら勝手にやっつけ。とね。

さてと、そんなじゃ今日も勉強に励むとしますか。

俺は白い制服に着替え、母親が作ってくれた朝飯を食って、弁当を鞆に押し込んで家を出る。

（『マスター、今日の鍛練ですが、例のアレをメインに一度模擬戦を行おうと思いますが、よろしいですか？』）

首にかけていた待機状態のマリアが今日の鍛練のスケジュールを報告する。

（例のアレって、あの力か。いや、確かに練習では発動できるけど、それでもなんとかってレベルだぜ？ 大丈夫なの？）

（『今のマスターでしたら、第一の術なら戦闘でも安定して使えると思います。なので、今後のスケジュールに組み込もうと思います』）

（ま、お前がそう言うなら、大丈夫だろ。任せるよ）

俺がそう言うともリアは了解と答え、会話が終わる。

ちなみにリアは、俺が母親に無理言って譲って貰うことになった。その際に母親は、「こんなの、いつ買ったかしら？」と頭を傾けていた。

バス停に着くと、ちょうどいいタイミングで聖祥行きのバスが到着する。

バスに乗り込み、開いてる座席を探していると、後部座席から声をかけられた。

「あ、健一君。こっちこっち」

声の主を見ると、後部座席には三人の女の子が座っていた。

金髪のアリサ・バニングス。紫髪の月村すずか。そして茶髪の高町なのはだ。

因みに、俺の名前を呼んだのは高町だ。

「おはよう。三娘達」

そう言っ、俺はバニングスの隣に座って朝の挨拶をする。

「いい加減、私達のことを三娘って呼ぶの止めてくれない」

俺の考えたキュートなニックネームに文句を言うバニングス。他の二人もあははと曖昧な笑みを浮かべているが、バニングスの意見に賛同しているようだ。

「善処しよう」

どこかの政治家のような曖昧な答えを言う俺。

俺がそう言っ、バニングスははあと思っきりため息を吐く。

こういっった一連の会話を毎日かわす俺達。

この三娘達とは一年の頃に出会った。中庭で高町とバニングスが取っ組み合いの喧嘩していたのを発見したのが始まりだった。普段だったら無視するが、妙にそれが気になったのだ。

まあ、女のガチ喧嘩に興味が湧いただけなんだけどね。

そしてそんな二人を見ながら月村がオロオロしてたので、つい月村に声をかけてしまったのだ。

喧嘩の原因を聞いた俺は、それを止める手段を月村に教えた。

結果、俺の言う通りに二人の喧嘩を止めた月村。その後、仲直りをして現状に至るわけだ。

昨日の敵は今日の友と言う感じだな。

で、俺とはその時のことがきっかけで、向こうから話しかけて来るようになった。普通に雑談したり、一緒に昼飯を食ったり、今日みたいに同じバスだとかうして呼んでくれたりする。

知り合い以上、友達未満な関係だ。

学校に着くと俺達はバスを降りて、教室に向かう。因みに同じクラスである。

三娘は鞆を置いてHRが始まるまで雑談を始める。もちろん俺も参加しているが、さすがにガールズトークにはついていけず、いそいそと自分の席に着いて、そのままボーっと授業が始まるのを待った。

昼休み、三娘に誘われ屋上でご飯タイムとしゃれこむ俺。

「将来か……」

弁当を食べていると、高町がボソリ呟いた。

「アリサちゃんとすすがちゃんはどう結構決まってるんだよね？」

唐突に二人に尋ねる高町。どうやらさっきの職業についての授業のせいだろう。

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃくらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思ってるけど」

「そうなんだ」



なぜ俺には訊かない？ いや、訊かれても特に考えてないから困るだけけど……。

にしても、この歳で将来について考えるとは……。最近の子供はみんなこうなのかね。

「健一君は？」

あ、やっぱり俺にも訊くんだ……。

「ん？ そうだな……。特にコレと言ってなりたいものもないし……。生活できる最低限の賃金あれば、職場はどこでも良いって感じだな」

「はあ、アンタって夢がないのね」

バニングスが呆れた口調でそう言う。

「夢じゃ腹は膨れないよ。平々凡々。それが俺の人生の目標だ」

「枯れた目標ね」

「ほっとけ」

俺は食事を再開する。

「そっか、三人ともすごいね」

俺の将来のどこがすごいのか聞きたいな。

「でもなのは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん。それも将来のビジョンの一つなんだけど」

「ビジョンって……。なぜに横文字？」

「やりたいことは、なにかあるような気がするんだけど、まだそれがなんなのかはつきりしないんだ。あたし、特技も取り柄も特にななし」

「ばかちん！」

高町の言葉が癪に障ったのか、バニングスが怒鳴ってレモンの切り身を高町に投げつける。こら！ 食べ物で粗末に扱うんじゃないじゃない！

「自分からそう言うことを言うんじゃないのっ」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこと、きつとあるよ」

月村も少し怒った口調で高町にそう言う。いや、月村さん。レモ

ンはノータッチですか？

高町を見ると、突然レモンを投げつけられせいでビックリしている様子だ。そりゃそうだ。俺だってビックリするわ。そんな高町にバニングスはビシッと指を差す。

「大体アンタ、理数の成績はこの私より良いじゃないの。それで取り柄がないとは、どの口で言うわけ！？」

「妬みか？」

「違うっ！」

いや、どう聞いても妬みにしか聞えなかったからつい会話に割り込んだよ。

「でもさ、成績が良い〓取り柄がないと言う考えは、どうかと思うぞ」

「なによ！ 文句でもあるわけ！」

どうやら、怒りの矛先が高町から俺に変わったようだ。

「いえ別に」

面倒ごととは嫌いなので、話題を元に戻す。

「まあ、将来や取り柄なんて今はなくても、この先見つかるかもしれないし、ゆっくり見つけていけば良いと思うよ」

「うん……」

とりあえず納得してくれたようだな。

「そうだよ。健一君の言う通りだよなのはちゃん」

「アンタって、たまにはまともな事も言うのね」

おいコラ金髪。どう言う意味だ。

授業が終わると、俺と三娘は校門で別れる。なんでも三人とも塾があるからだ。

仲良いねえ。

そんなこと思いながら俺は日課である鍛練をするために、人気の無い山に向かい、この世界の魔法でもある結界魔法をマリアの協力

で張り、地獄の鍛練を受けていた。

俺の力は【金色のガッシュ！】に出て来る魔物の術が全部使える。あと、魔物が持つ元々の力や人間の能力も使える。

と言っても、ソレを使いこなせるかと聞かれると答えはNOだ。

元々魔物と人間じゃ、体の構造が全然違うんだ。魔物が使う初級の術を一発使うだけでも、人間の体じゃ負担が大きい。

最初に試しに使って見たら、三日寝込んでしまった。

まさにハイリスクノーリターンだ。

このままじゃ、不測の事態に対応できない。

なので、前にマリアが言っていた俺を強くする方法。つまり、魔物の術を完璧に使いこなす方法を、懇切丁寧に教えてもらう……はずだった。

「がはっ！」

俺が放った術をマリアに紙一重で躲され、素早く俺の懷に移動するマリア。そしてその拳が俺の腹部を突き、そのままふっ飛ばされてしまう。

「まだ上手く調整が出来てないようですね。良いですかマスター。何度も言いますが、人間が魔物の術を完全に使いこなすには、まず体に負担を与えないことが第一です。なので現状マスターに必要なのは、魔物以上に魔力の制御と体の負担がかからない威力の調整が必要です。幸いなことに、マスターの魔力制御は上の下クラスなので問題ないですが、威力調整がまだ甘いですね。術の威力が強すぎますと、先程のようにワテンポ遅れて術が発動し、更に発動した途端、痛みがマスターを襲い、隙が生まれてしまいます。魔力制御に集中することで、威力調整を疎かにするようでは本末転倒です。注意して下さい。では続きを始めます」

長々と俺にダメだしをする麗人の女性。

腰まで届くキラキラと輝く金色の髪を掻き上げながら、少しツリ目がちな蒼い瞳が俺を見つめる。身長は160？は軽く超えるだろう。

コレがマリアの人型だ。外見はモロ俺好みの女性である。

こればかりはあのKYに感謝だ。

因みに俺の現在の身長は、135?だ。

ダメだしが終わると、マリアは俺目がけて拳のラッシュを繰り出す。

俺はソレをどうにか躲し、バックステップでマリアとの距離をあける。

「はぁ……はぁ……」

そして現在、マリアローズの考えてくれた術を完璧に使いこなす為の鍛練を、言葉通り痛い思いで習得しようとしている最中です。

どうやらマリアはスパルタ教育が好きなようだ。

最初に魔物の術の特性、使う為の魔力の制御と威力の調整の座学を行い、次に術が上手く発動できるかを練習。上手いかわからない場合はしつこいくらいに何度も方法を叩き込まれる。

術が安定して発動できるようになると、最後は実践レベルの模擬戦で術を安定して発動させるようにするが、これがまたキツイ。

どうやらマリアの辞書には手加減がないらしい。殺気を垂れ流しながら、俺を殺す意気込みで模擬戦をするマリア。

マリア曰く、「模擬戦は実戦と同等なので、本気でやらないと痛い目を見るのはマスターです」とのことだ。

とまあ、そんなこんなで、マリアによる鍛練を四歳の頃から続けている俺。何度が死にかけた気がするが、その辺りの記憶はあやふやだったりする。

恐ろしいことこの上ない。

でもまあ、マリアの地獄の鍛練のお陰で、戦闘でも安定して術が使えるようになったから結果オーライかな。

現在使える術は、ガッシュとゼオン、ブラゴ、ウォンレイの中級の術、ティオの第一から第五の術とテッドの第一から第三の術だ。

上級の術は使えるには使えるが、戦闘ではまだ安定して使えない。え? シンの術? あんなの無理。使える使えない以前の問題。

次元が違うもん。

使ったら確実に死ぬね。

うん。

で、現在の模擬戦は、今朝マリアとの話題に出た例のアレをメインに行っている。

にしてもこの術。他の術と違ってありえねーほど難しい。練習ではなんとか発動できたかなレベルで、いきなり模擬戦ってどーよ。第一の術でさっきのアレだぜ。他の術もちゃんと安定して使えるのか心配だぜ。

そんな弱音を思っていたらマリアが動いた。そう認識した途端、目の前にマリアの綺麗な顔が見えた。

やばっ！

咄嗟に両腕をクロスして顔をガードする。

ドガッ——と腕に痛みと衝撃が襲う。

「戦闘中に物思いにふけるなんて、ずいぶん余裕があるようですね。マスター」

淡々と注意しながら、マリアは何度も俺に拳を打ちつける。

腕の痛みが尋常じゃねえ！

俺は思考を戦闘モードに切り替え、先程マリア指摘された部分を注意しながら、術を放つ。

午後六時半ギリギリで帰宅。鍛練で疲れた体を風呂で癒し、パジャマに着替えて母親が作ってくれた晩飯を食べる。

食い終わると自室に戻り、今日だされた宿題を片付けようと椅子に座る。

すると、

（聞こえますか？ 僕の声が、聞こえますか？）

見知らぬ声が頭に響いた。

ん？ 念話？

「……誰だ？」

（聞いて下さい。僕の声が聞こえるあなた。お願いです。僕に少しだけ、力を貸して下さい！）

なんか、切羽詰まってる様子だな……。

（お願い、僕の所へ。時間が……危険がもう……！）

そこで正体不明の念話が途切れた。

一体、なんだったんだ？

念話を使ってるってことは、魔導士関係か？ それとも……。

俺は宿題を後回しにして、私服に着替える。

『行くんですか？』

「ああ、念話の相手が誰だったとしても、とりあえずなにが起こっているのか把握する必要があるだろう」

今までこんなことはなかったし、時期的に考えると物語が始まる頃だろう。

物語自体に関わる気はないが、その影響が俺に及ばないとも言いきれない。

つーことで、危険性の有無と、コレからどうなるのかを確かめる

為、様子を見に行くのだ。

「マリア、バリアジャケット防護服の展開よろしく」

『了解』

一瞬、俺の体が発光し、光が消えると胸に赤いブローチが付いてる紺色のマントに右腕には白銀の籠手を装着している俺が居た。

白銀の籠手はアームドモードのマリアだ。

バリアジャケット防護服はガッシュのマントをイメージして作った。

「そんじゃ行くか」

そう言って、俺は窓から外に出る。

「マリア、発信源はどこ分かるか？」

『はい。榎原動物病院です』

「あそこか……って動物病院？ なぜにそんな所から念話が？」

『そこまではわかりません』

「まあいい。行ってみれば分かるだろ」

俺はマリアに教えてもらったこの世界の飛行魔法を使って槇原動物病院に向かう。

五分で到着し、すぐになにが起こっているのか理解出来た。

「なんだアレ？」

そこに居たのは、俺と同じ年くらいの女の子とフェレット、そして正体不明の化物が居た。

俺が上空から現場の状況を見ながら呟いたら、マリアが答えてくれた。

『どうやら、あの正体不明の生物は魔力エネルギーの結晶体が作りだした思念体のようですね』

「結晶体？　なんでそんなもんがココに？」

『そこまではわかりません。ですが、このままじゃあそこに居る少女と小動物が危険です』

「……だな」

俺はジッと女の子を見る。

『どうしますか？』

「決まってるだろ」

正直、あんなのと関わり合いになりたくねーが、ココであの子を見捨てたら、厳しい鍛練を積んできた意味が無くなる。

俺が鍛練を続けてきたのは、不測の事態を対処するため。そして今、この状況は不測の事態だ！

俺は少女を守るため、化物の所へ向かおうと下降しようとする。すると、少女の周りに桃色の光が突然発生した。

「な、なんだ！？」

突然発生した光に驚き、咄嗟に急ブレーキをかけた。

まさか、あの化物の攻撃か？

『マスター、あの少女から膨大な魔力値が計測されました』

「え？」

ちよっと待て。つーことアレか？　あの子はこの物語の登場人物

なのか？

なるほど、巻き込まれ型の主人公ってわけね……。

光が消えると、そこには白い防護服と杖を持った少女の姿があった。  
バリアジャケット

「ん？ あれって、よく見たら聖祥の制服に似てるな……。って、高町っ！？」

俺はそこで、ようやく少女が誰なのか分かった。

『お知り合いですか？』

「ああ、俺のクラスメイトの高町なのはだ。まさかアイツがこの物語の登場人物だったとは……。ん？　なのは？　どこかで聞き覚えのある名前だな……」

『それはそうでしょ。この世界の作品名は【魔法少女リリカルなのは】なんですから』

「え？　それって、高町なのはのなのはか？」

『他になにが？』

うわおー。どうやら俺は知らず知らずの内に主人公と仲良くなってたてことか？

いや待て。まだ大丈夫だ。だって俺と高町との関係は知り合い以上友達未満だ。

こっちから下手に干渉しなけりゃ、どうにもならない筈だ。

うん。

『で、どうしますか？』

「とりあえず様子を見る」

でもまあ、危なくなったら助けるか。友達未満でも、知り合い以上の関係だし。

そんなこんなで危なっかしくはあるが、あの喋るフェレットの助言でどうにかあの化物を退治することに成功した高町。

まあ、退治つか思念体を作りだした結晶体事態を封印したって感じかな。

元の服に戻り一安心する高町。危機が去って安心したのか気絶す



るフェレット。するとパトカーのサイレンが聞こえてきた。  
警察か？

サイレンの音を聞いた途端、自分の置かれている状況——特に周囲の破壊あと——を理解した高町は、「ごめんなさい」と叫んで走って逃げていった。

まあ、妥当な判断だな。

「……取り柄、見つかったじゃん」

俺は走って逃げていく高町の後ろ姿を見ながらボソツと呟いた。  
さて、俺も帰るか。

「っ!？」

動こうとした途端、背後から殺気を感じた。振り返ろうとした瞬間、耳元に俺とマリア以外の声が囁いた。

「動かないで」

気が付くと、俺の首元に光の刃見たいなモノを突きつけながら、凜とした冷たい声が耳に届いた。

## 無印編 一話目（後書き）

好きなように感想などをお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。

## 無印編 二話目

さて、どうしよう？

俺は瞬時にこの状況を理解した。

現在、俺の首元に突きつけられてるモンは、見た感じ魔力刃のようだ。

「……誰だ？」

俺はすぐさま魔力制御と威力調整を行い、いつでも術が発動出来るようにしとく。そして出来るだけ相手の情報を得る為に、話しかけてみた。

「あなたと同じ」

俺と同じ？ となると、転生者か……。

「いきなり襲われる覚えはないんだが……」

「あなたになくともこちらにはあるの」

どうやら話し合いで解決は無理っぽいな。さて、どうする。

「OK、理解したぜ。ならこっちも、お前を襲う理由ができたな」

そう言ったと同時に、俺は紺色のマントを伸ばし、首元に突きつけている物騒なモノに絡ませる。

「えっ!？」

「驚くなよ。たかがマントだぜ？」

伸ばした部分だけ切り、ソイツから離れる。そしてソイツの方をよく見て、

「ザケル！」

口から電撃を出す。

電撃はそのままソイツに向かって行き、着弾した。

「やったか？」

『油断しないでください』

綺麗にヒットしたのでつい油断しそうになる俺をマリアが窘めた。俺は意識をソイツに向ける。すると、ザケルが直撃したにも関わ

らず、無傷のソイツがそこに居た。

「な……」

おい待て、今のザケルはファウード編で強化されたザケルだぞ？  
防いだとしても焦げめくらいできるだろ？

ソイツは腕に絡みついた生地を剥ぎ取り、再び右手に魔力刃を発  
動する。

（おい、マリア。アイツの魔法ってこの世界の魔法か？ それとも  
……）

（『スキャン開始。該当データ無し。おそらく他の作品の能力だと  
思います』）

（OK、理解したぜ）

俺はジッと目の前の転生者を見る。

転生者との戦いはある程度想定していた。勿論その対策も出来て  
る！

と、その前に。

「マリア、周囲に結界を張るぞ」

『了解』

たぶん過激な戦闘になると思うから、周囲に影響が出ないよう封  
時結界を張った。

「結界？」

周囲の状況が変わったことに、ソイツは多少驚きながら呟いた、

「ああ、これで、思いっきりやれるだろ？」

「ふふ、自分から逃げ道を塞ぐなんてあなた馬鹿？ それとも自殺  
志願者なの？」

「んなわけあるかつ。それに、それはお前にも言えることだ」

「それはないよ。だってあなた、弱いもん」

クスッと笑いながら、ソイツはそう言った。

「っ！」

俺を格下扱いするソイツの言い方が、まるで俺のこの五年間の鍛  
練が無意味だと言われた気がした。

それが非常に俺の神経を逆なで、ソイツに対して怒りが燃え上がった。

「ザケルガ！」

俺は口からザケルの直線状の奴をだす。

ザケルよりも速く、何より貫通力も高い。さっきのように防御しても貫いてやるぜ。

そう思った瞬間、ソイツは光の刃を振って、軽々と俺のザケルガを斬り裂いた。

「な……っ」

「さっきは油断したけど、今度はそうはいかないから  
そう言って、ソイツは俺に再び接近する。」

「くっ、だったらこれで！ ガンレイズ・ザケル！」

俺の背後に八個の太鼓の様な物が現れ、そこから小さな電撃の弾がソイツに向かって連続で撃ちだす。

これなら容易に近づくことはできんだろ。

「フン」

しかしソイツは冷静に電撃の弾を光の刃で斬り伏せ、あっという間に俺に近づいた。

「バイバイ」

そう言って、光の刃が俺を斬ろうと振り下ろす。

「っ！ ラシルド！」

盾の術を出し、ソイツの攻撃を防ごうとするが、

「無意味だよ」

防いだ途端、瓦解するラシルド。

「このっ、ザグルゼム！」

強化系の電気球をラシルドにぶつけて強化する。結果、どうにかソイツの攻撃を防ぐことに成功した。

「ちっ、だったら」

光の刃じゃ壊せないことに苛立ったソイツは、光の刃を消してなにやら呟きはじめた。

「プラクテ・ビギ・ナル。来れ虚空の雷、薙ぎ払え——」

『っ！ 膨大な魔力値感知。マスター！ すぐに退避を！』

「え？ ああ」

マリアの叫びに近い指示に、俺は素早く後方に退避する。すると、

「雷の斧！」

突如、斧の形状をした雷が現れた。

ソイツはソレを上下に振ってラシルドを破壊した。

「おいおい、マジかよ……」

ザクルゼムで強化したラシルドが、一撃で……。

強すぎだろオイ！

「どうしたの？ もう手詰まり？」

ソイツは勝利を確信した口調でそう言う。

クソッ、余裕な態度しやがって。

「誰が」

あれくらいの攻撃で、俺の全てを知ったつもりになるな！

「まあいいわ。これで終わりよ」

そう言って、ソイツはまた何やら呟き始めた。

「プラクテ ビギ・ナル。来たれ氷精、闇の精！」

呪文！ さっきと同じかそれ以上の威力なのか？

どっちにしろ、俺の下級、中級の術が通用しないんだ。不安要素

はあるが、一か八か上級術で対抗してやる！

俺は全神経を集中して、魔力制御と威力調整を行う。

「闇を従え吹けよ常世の氷雪——闇の吹雪！」

ソイツの手から強力な吹雪と暗闇が螺旋状に発生し、俺に向かっ

てきた。

「あんまり俺、舐めんな！」

同時に俺も上級術を放つ。

「バオウ・クロウ・デイスグルグ！」

巨大な龍の腕が出現させると、俺はソレを自由自在に操りソイツの攻撃を受け止め、

「なっ！ 闇の吹雪が、止められた……！？」

「おおおおおおおおりやあああああああ！」

そのまま地面に押しつぶした。

周囲に振動と衝撃が走る。

「くっ！」

攻撃を押しつぶした余波に怯むソイツを俺は見逃さず、マントを伸ばしてソイツの体をグルグル巻きにして拘束する。

「ちっ、また……！」

ソイツがマントを振り解こうとする前に、伸ばしたマントを元に戻して、ソイツを俺の前に引き寄せる。

「動くな。動いたら至近距離で電撃を食らわすぞ」

「っ！」

「俺の勝ち。で良いよな？」

「……………」

なにも言わないので、そういうことにしておく。

「さて、聞きたいことがあるけど、答えてくれる？」

ニヤリと口を歪ましながら、ソイツに尋ねる。

「だ、誰が……」

どうやら、自分の置かれている状況が分かっていないようだ。

「……ザケルガ」

俺はなにも言わずに、ソイツの顔スレスレにザケルガをぶち込んでやった。

「ひっ！」

勿論当たりはしない。が、ソイツに恐怖の種子を植え込んだはずだ。

「今のは警告だ。なにも言わないならそれでもいい。そのかわり、お前の体と心に苦痛を与え続ける電撃をぶつけて、最終的には焼死体にしてやるから……」

殺意を込めて目で、俺はソイツにそう言う。

「っ！！ 分かった！ 言うよ！ 正直に話す！ 攻撃もしない！」

だから止めてっ！」

俺の言葉が脅しではなく本気だと感じ取ったソイツは、すぐさま白旗をあげた。さっき植え込んだ恐怖の種子が一気に開花したのだろ。

「本当？」

「本当！」

「OK。その言葉、信じるぜ。（マリア、モードゼオンだ）」

（『了解』）

ブローチの色が赤色から銀色に変色すると、俺はソイツの体からマントを解いて、解放する。

念のために、すぐさま例の術が発動できるように準備をしとく。

コイツが、油断した俺に攻撃してくる可能性もあるからな。

しかし俺の予想は外れ、ソイツは俺に攻撃をしてこなかった。

ふーん。さっきと違って状況が分かっているようだな。にしても、近くで見ると俺より少し背丈が高いな。同い年かそれとも年上か？

フードを被っているせいで顔は確認できないが、たぶんそうだろう。

それに、今まで暗くてよく見えなかったが、コイツの服装——いパリファッションや防護服って、ハリーポッターの学生が着ているようなローブを羽織ってるよね。

で、ローブの下は拳法着姿。

何故に拳法着？

西洋と中華のコラボレーションかなにかですか？

「で、聞きたいことってなに？」

腕組みしながらソイツは不満そうな態度で尋ねる。足を見ると微かにだが震えていた。

とりあえず、ソイツの微妙なセンスは置いてこう。

「訊きたいのは二つだ。一つはお前の名前だ」

「……森永香奈枝もりながかなえ」

「香奈枝？ 女みたいな名前だな」

俺が親だったら絶対こんな名前にはしないぞ。



「私は女よ!」

そう叫ぶと、森永はフードをとって、素顔を俺に見せた。

整った造形に短い髪。身近に居る女の子の中じゃ、こんなに短い髪の子は居ないので少し新鮮だな。

見た感じ可愛い顔立ちだが、どこか中性的な印象も払拭できない。

正直、美少女でも美少年にでもなれるだろ。

今は先入観のせいで男の方に天秤が傾いてるが、これで髪が長けりゃ女だと信じれるんだがな……。

まあ、本人が女だと言うんだ。とりあえず信じとこう。

「OK。分かったぜ」

「……信じてるって目には見えないんだけど」

ちっ、疑り深い奴だ。

「うるさい。二つ目はお前の目的だ。どうして俺を狙った」

その質問に森永は少し言い淀むが、最終的には答えてくれた。

「……私は、原作通りに物語を進ませる為、物語に介入してくるイレギュラー——転生者達を始末するのが目的なの」

原作どおり……ね。

「ほう。で、その理由は?」

そう訊くと、森永の視線がキョロキョロしだしたが、話しを始めたので気にしないことにしとく。

「私は、前世の頃から【なのは】が好きで、最初は【なのは】の世界に來れたのが嬉しくて、物語にも介入しようと思った。でも気付いたんだ。私達イレギュラーが物語に介入したら、物語は原作通り進まないって。そうになったら、それはもう【なのは】はじゃない。それじゃ、別の話になって、私が好きだった【なのは】じゃなくなっちゃう! そう考えたら、物語に介入するのが嫌になったの。でも実際、私がやらなくても、他のイレギュラーが介入するだろうし、物語自体をめっちゃにする奴も居る。だから私は、そう言った目的を持ったイレギュラーを始末しようと決めたの」

森永の理由を聞いてると、納得できる部分はあった。俺も好きな作品を他人が好き勝手にするのは嫌だから。

けどそれが面白ければ、文句はない。

でも森永はソレが嫌みたいだな。正直、人それぞれだと思うけど。ま、森永の理由は理解できる。けど……。

「ふーん」

俺はどうでもいい感じに、森永の理由を受け流した。

確かに理解はできる理由だが、だからと言って人を殺して良い理由にはならない。そんな理由で殺されたら、たまったもんじゃねーよ。

こっちは第二の人生を謳歌してるんだから。

ま、振り返りにしたからどうでもいいけど。

「ついでに訊くけど、どうして俺がココに居るって分かったんだ？」

そう訊くと、森永はキョトンした顔で俺を見た。

ん？ 俺なんか変なことでも言ったのか？

「アンタも聞こえたでしょ。ユーノの念話」

「ユーノ？ 誰だそれ？」

「はっ？……もしかしてアンタ、原作知らないの？」

森永の質問に頷く俺。そうすると信じられない顔をする森永。

俺はない頭を絞って、今の状況を推測してみる。

うーん。どうやらそのユーノとか言う奴は、森永の驚きを見るに登場人物で間違いないだろ。

で、森永の言ったユーノの念話とは、俺が聞いた不審な念話のことだろうな。そしてあの念話を発信してたのが、状況を見る限り、高町が守ろうとしていたフェレット。

となると、フェレットⅡユーノと言うことになるのか。なるほど、理解したぞ。

「因みに、俺は不審な念話が聞こえて、ソレを調べる為にココに来た」

俺の言葉を聞くと、森永は頭を抱えてため息を吐く。

「つてことはなに？ 私はなににも知らない相手に攻撃したってことになるの？」

「だな」

十分、暴行罪——いや殺人未遂で起訴できるレベルだ。

「……一応訊くけど、アンタ物語に介入するつもりは？」

「ねえな。俺の目的は平凡に過ごすことだ。そんなわけ分からんことに関わるつもりはない」

ま、俺になにかしらの被害が被りそうになる場合は、容赦なく介入するけどね。

それを聞いて、更にため息を吐く森永。

どうやら自分が勘違いをしていたことに気付いたようだ。

でもまあ、あの状況じゃ勘違いするなって言う方が無理かもしれないな。

まさか転生者に中に、原作を知らない奴が居るとは思ってないだろうし。

と、心中で森永をフォローする。勿論、口には出さない。

「で、俺に対して言うことは？」

「うう、ごめんなさい」

素直に頭を下げる森永。

「OK。許してやんよ」

そう言うと、森永は少し驚いた顔した。

「え？ これだけで良いの？」

「……別に、自分の非を認めて相手に謝った奴をこれ以上どうこうする趣味は俺にはない。それともなにか？ お前はどうかこうされたのか？」

すると森永の頬が急に赤くなり、ぶんぶんと力強く顔を振る。

一体どんなことをされるんだと思ったんだ？

「そんじゃ、俺は帰るぞ」

その前に結界を解除する。戦闘の被害でボロボロになった周囲も、結界を張っていたお陰で被害はゼロだ。

「あ、そうだ」

俺は帰る前に一言、森永に伝えた。

「お前の目的は正直どうでもいいし、好きにしろって感じだけど、人を殺すなら。それなりの覚悟を持って殺せよ」

「え？ それってどう言う――」

「じゃあな」

それ以上答えるつもりはないので、俺は素早く飛行魔法でその場を去る。

残されたのは、俺の言葉の意味を考える森永一人だけだった。

道中、他の転生者とも出会わず、無事に家に帰った俺は防護服を解除して、宿題の続きにとりかかる。  
バリアジャケット

宿題が終わると、ベッドに倒れて寝た。

で、朝になって目覚めると……、

「あー、体が重い。だるい。痛い。熱い。吐き気がするう」

このありさまだ。

どうやら昨日の戦闘で上級術を使ったせいだろ。術で体に負担がでた証拠だ。ま、この程度なら明日には治るだろ。

しかし、自分じゃ完璧だと思っていたけど、やっぱどこかで失敗したみたいだな。

戦闘じゃまだ上級術は早かったか……。ま、それでもすぐにこうならなかっただけでマシか。

『我慢して下さい。コレはマスターの怠慢のせいでもあるんですから』

すると机の上に置いてあるマリアが、俺のあり様を見て同情したのかそう言った。

いや、どっちかと言うと小言か。

「うう、そう言われるとなにも言えん」

マリアの言う通りだ。上級術の鍛練が予想以上に面倒だったから、他の魔物の下級中級の術を習得して手数を増やそうと思ったのが原因だ。

結局、昨日の戦闘ではガッシュの初級中級の術だけじゃ追いつめられてしまい、あげく、モードチェンジして他の魔物の術を使う余裕もなく、結果あぁなってしまった。

「こりゃ、本格的に上級術の鍛練もしないといけないな」

『当り前です。もう二度と昨日のような無様な姿を見せるわけにはいきません』

そんなに無様だったかな？

まあいいや。それに、昨日の念話で本格的に物語が始まったようだし、森永みたいな転生者ともこれから出会うかもしれない。

そしたら今度は負けて、最悪死ぬかもしれん。

正直、他の転生者の力量を舐めていた。まさかあそこまで強いだなんて……。

となると、昨日戦った森永は少なくとも俺以上の努力をしたってことになるんだろうな……。

「はぁ……」

なにが想定してあり、対策してあるだよ。

全部想定外で対策外だったよ！ 更に努力不足！

あのKYにとっていい笑いの種だよ……クソッ。

戦闘で相手を倒して、マントで拘束。その後情報を吐かせる。簡単そうに見えて超むずい。

まさか転生者との戦いがあるそこまで大変だとは……。

全く。ホント、自分に対して全くだよ。

ザケルガやガンレイズ・ザケルそしてラシルドとザグルゼム。アレらが全て通用しないだなんて……。

ガッシュの作品で考えると、昨日の攻撃は全部ギガノ級以上デイトガ級同等だろう。

そんな相手に、初級中級の術で戦おうなんて無謀にも程がある。

ま、相手が油断してくれたお陰でギリギリ勝てたけど、それも今回限りだろうな。

次はこうはいかないな。

「そんじゃマリア、明日から上級術メインで鍛練するから、メニューを考えといてくれ」

『了解』

さて、今日のところはじっくり寝て、明日からの地獄の鍛練を頑張るとしますか。

……なんか、急に気力が下がっていくな。

朝のちよつと涼しい温度と光が道場全体に広がる中、私は一人いつもの朝稽古をしていた。

「ふっ！ はあ！ てえや！ とお！」

一通りの型が終わると、私は静かに息を吐いて、呼吸を安定させる。

『今日はいつもの以上に拳法の修行に精がでてるな。香奈枝』

左手の人差指に嵌めている指輪から男性の声が聞こえた。

「そう？ いつも通りだと思うけど」

私は待機状態の夕風ゆうなぎにそう言うのと、道場の端に置いていたタオルで汗を拭う。

『いんや、おれの目はごまかせんぞ』

アンタのどこに目があるのよ。

『やっぱ、昨日の負けが原因か？』

タオルで拭いた手が止まり、私はジッと秋雨を睨む。

『おいおい、そんなに睨むなよ。おれは事実を言ったまでだ』

「ふん」

『ったくよ。最初から素直におれの忠告を聞いたときゃ、あんなへましなかったのによ』

「うるさいわね。ええそうよ。昨日、アンタの言う通りにしとけば、少なくとも負けはなかった。昨日の戦いは、単に私の油断と慢心が原因で負けた。それでいいんでしょ。次からは全力でイレギュラーを始末するわ」

私はそう言いながら、汗を拭くのを再開する。

『違う。そうじゃない』

「じゃなによ？」

『お前、人を殺せるのか？』

「っ……！」

当然の質問に、手の力が抜けて床にタオルが落ちた。そんな私の様子に気付いた夕風はいつもより真面目な声音で言った。

『やっぱりな。昨日の戦いは確かに油断と慢心があった。が。それでも、最初に後ろをとった瞬間、お前はアイツを殺せたはずだ。それをしなかったのは、どこかに迷いがあったからだ。そうだろう？』

私の心の中を言い当てる夕風。なんでもお見通ししてわけね。

「……ったく、アンタには敵わないわ」

私は床に座り込み、ため息を吐く。

『ハハッ、オレはお前のことならなんでも知ってんぜ。例えばお前のケツにある黒子の数は――』

「夕風、それ以上喋るなら……潰すわよ」

私は満面の笑みを浮かべ、出来るだけ声を低くして夕風に破壊宣言を伝える。

『へへッ、冗談に決まってるんだろ』

夕風。声が若干引きつってるわよ。

私はそんな夕風に対して、心中でため息を吐いた。

「……あのイレギュラーも言ってた。殺すなら覚悟しろって。アイツ、実力は私より下だけど、人を殺す覚悟は私より上だったわ」  
私を捕えた時のあの目。アレは、本気で私を殺す目だった。

正直恐かった。

今でもあの時、顔に通り過ぎた電撃の音が残っている。

「私、自分が言ってたよりも、覚悟が足らなかったのかも……」  
つい弱音を吐いてしまう。それも信頼できる相棒がいるからできることだ。

『そうだな。で、どうすんだ？ イレギュラー狩りでもやめて、ア

イツと同じように平凡な毎日でも過ごすのか?』

夕凧は優しく、諭すように私に別の道を提示する

確かにその道もあるし、まだ引き返すことも可能だ。私はまだ殺していないんだから。けど……。

私は四年前、偶然出会ってしまったイレギュラーの姿を思い出す。最凶で最恐にして最狂であり、そして最強のイレギュラーの姿を……。

アレは……危険だ。能力云々じゃなくて、考え方が。そして生き方が。

放っておけば、私の大好きな【なのは】は、アレにぐちゃぐちゃにされてしまう。

それを阻止する為にも、私はあの日から辛い修行をしてきた。

上位種曰く、強くなりたければ努力しろと言ってたから。

でも、アレの存在には感謝することもある。アレと出会ったお陰で、私は介入する行為が、【なのは】を汚すことだと知ったのだから。

だから私は、大好きな【なのは】を守るため、物語に介入しようとするイレギュラーを始末するのを決めた……筈だった。

結果はどうだ。昨日の見つけたイレギュラーを、私は始末するこ

とができなかった。  
いや、もう始末なんて曖昧な言葉なんてやめよう。私は殺せなかったんだ。

言葉では簡単に言えるのに、いざ実行しようと思ったら躊躇ってしまう。

私は、憶病者だ……!

なら、殺さずにすませる方法は? 例えばイレギュラーとの話し合いとか?

……いや、無意味だ。

私は浮かんだ提案をすぐに切り捨てた。

なぜなら人は欲望で生きている。アレが欲しい。コレがやりたい。



そう言った欲望があり、それを叶えるだけの力があれば、人は簡単に欲望のままに動いてしまう。

そして、私達イレギュラーには、その欲望を叶えるだけの能力がある。

戦争がいい例だ。

力を持った人間がする決定的な証拠。

なのはの想いを否定したくはないけど、戦争と言う狂った力の前じゃ話し合いと言う平和的解決など不可能だ。

やっぱり、力には力で対抗するしかないのかな？

《人を殺すんなら、それなりの覚悟を持って殺せよ》

昨日のアイツの言葉が心に響く。

それなりの覚悟、か……。

私は天井を見上げながら一人、呟く。

「……どうすればいいのかな？」

私の悩みを聞いている夕風は黙ったままだ。コイツはこう言った大事な決めごとする時は、いつも黙って私自身に決めさせる。

ま、それがコイツの良い所なんだろうけどね。

『……ところで香奈枝』

「ん？」

『そろそろ支度しないと、学校に遅刻するぞ』

「なっ！」

それを聞いて、私は大慌てで支度を始める。その間、コイツはただ笑っていた。

あとで覚えてろ！

いつもの山奥に結界を張って、俺は人型のマリアによる地獄の鍛練を受けていた。

昨日は一日ゆっくり休んだし、今日は休日なので朝から鍛練してる。

体調は万全。先日の負担はゼロ。の筈だが……。

「はぁー、はぁー、ちよっ、マリアは……タンマ。吐き気、が……オエッ」

「ふう、これくらいで粘るとは、まだ鍛え方が甘いようですね」

呆れた口調で言うマリアに、俺は少しキレた。

「これくらい、って……鍛練始めて六時間だぜ!? しかも休憩なし! 疲れるのは……当たり前だろっ!!」

「なにを言いますか。元々はマスターの怠慢のせいであんなったんですよ。八つ当たりするなら自身の怠け癖にして下さい」

「自分に八つ当たりって、どんなMプレイ!？」

「そんなに元気ならまだまだやれますね? それじゃ行きますよっ!」

「ちょ、マジで勘弁してよ! あーもう! クソツたれがっ! こうなったら自棄だ! バオウ・クロウ・ディスクルグ!」

俺は強大な龍の腕を出現させて、近づくマリアを牽制する。

「マスター、その術は確かに強力です。が、大きいあまりに、小さな敵が近付くと見えづらくなり、かつ当たりにくくなりますよ」

そう指摘すると、マリアはするりとバオウ・クロウが届く距離から逃げ、俺に接近して思いっきり蹴り飛ばす。

「ぶっ!」

片腕が使えず、さらに疲労のせいでガードもままならない。結果モロに食らってそのまま吹っ飛んでしまう俺。

「その術を使うなら、相手が見えやすい距離で使うのが賢明ですよ。じゃないと、こうして簡単に接近されます」

「クソツ!」

俺は蹴られた部位を押さえながら、悪態をつける。

「それじゃ次、行きますよ!」

「もう、いや――――!!」

悲鳴をあげるが、結界に閉ざされたこの空間では、誰も俺の悲痛な叫びが届くことはなかった。

合計九時間の鍛練も終えた俺は、疲れた体で山をおりる。  
し、死ぬ。こんなの毎日やったら絶対死ぬよ！

そんなことを思いながら、俺は疲れた足を動かす。

すると、待機モードのマリアがなにかを見つけたらしく、俺に報告してきた。

『マスター。近くに魔力反応感知。この反応。先日の結晶体と同じ魔力です』

「は？ マジで？ どこにあるの」

俺はマリアの誘導にしたがい、茂みを探す。すると蒼い結晶体が見つかり、中にXVと記されていた。

「これって、一つだけじゃないのかよ」

『番号が記されている以上、15個以内かそれ以上ある可能性がありますね』

「ふーん。コレの危険性は？」

『今のところは特に。しかし先日のようなこともありますから封印処理するのが賢明でしょ』

「OK。で、どうすんの？」

俺はマリアの指示に従い、蒼い結晶体を封印し終わると、ふと一つの考えが浮かびあがった。

そいやコレが原因で、高町が力を手に入れたんだよな。つーことは、もしかしてコレって物語のキーアイテム？

このまま持ってたら物語に介入しちゃうのかな？

「すみませんが、それを渡してくれませんか？」

そんなことを考えていると、背後から声をかけられた。  
うっ、わー。

振り向くと、なぜか木の枝に立っている金髪ツインテールの髪型をした、黒衣の少女がそこに居た。

どう見ても、物語の登場人物だよな？ アレ。

俺は心の中で、盛大にため息を吐いた。

## 無印編 二話目（後書き）

感想などお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。。

## 無印編 三話目

「あの、すみませんがソレを渡してくれませんか？」

突然の登場人物との出会いに、俺は脳を急回転させこの状況をどう対処しようか考える。

すると聞えなかったのかと思ったのか、金髪少女はもう一度同じ言葉を俺に告げた。

なにかしらの反応でもしようかと、俺は金髪少女を――ん？

あれ？ よく見たらマントの下って水着……だよね？ スカート

？ のようなモノ履いてるけど間違はなくアレ、水着だよな。

うわー、マントの下に水着って……また微妙なセンスの子が出て来たな。

しかも胸部の上下に、二枚の赤いベルトとか巻いているよ。なんかエロい。

そいや、体にベルトを巻いてる奴はMって聞いたことあるな……。私はMですってアピールしてんのか？

はあ、コレならまだ森永のセンスの方が幾分かマシだな。

にしてもマントと水着か……。さすが作品世界だ。思いきったことをするな……。

恥ずかしくないのか？

「あ、あのう……」

あ、やべ。なんか困った顔で俺を見てる。でもそれが可愛いと思っただのは内緒だ。

「あ、わりいわりい。独創的な服を着てるからつい見入っちゃったよ」

「そ、そうですか……」

安心したようにそう言う金髪少女。独創的な服に対してはスルーですか？

「そんじゃ、俺はもう行くよ。キミも暗くなる前に家に帰るんだね」

片手を上げて、その場から去る俺。

「あ、はい……って、違います！」

ちっ、やっぱそう上手く行かないか……！

俺は足を止めて、再び金髪少女に振り返る。

どうやら、さっきので怒らしてしまったようだ。少しムツとした

顔で金髪少女はもう一度俺に同じことを告げた。

「すみませんが、貴方が拾ったソレを私に渡してくれませんか？」

「コレか？」

俺は先程拾った蒼い結晶体を見せると、金髪少女は頷いた。

「どうして？」

とりあえず理由を訊いてみよう。

「私には、それが要だからです」

おいコラ、理由になってないぞ。

「ふーん」

俺は繁々<sup>しげしげ</sup>とソレを見ながら、ポイッと金髪少女に投げ渡す。

「えっ、わわわ」

投げたソレを金髪少女は慌てて受け取る。その顔には困惑な表情が浮かぶ。

「どした？」

「あっさり渡したから、少し驚いて……」

「ん？　じゃあ渡さない方が良かったのか？」

「いえ、そんなことはありません。ありがとうございます」

頭を下げて俺に礼を言う金髪少女。

「あっそう。んじゃな」

そう言って、俺は金髪少女に手を振ってその場から立ち去る。

「あ……」

金髪少女はなにか言いたそうだったが、俺を呼びとめる程のことじゃないらしく、それ以上俺に声をかけてこなかった。

ふう。どうにかキーアイテムらしい物体を、登場人物に押し付けることに成功したぜ。

俺は心中で安堵のため息を吐く。  
にしても、まさかこんな所で登場人物と出会うとはね……。  
これって介入に入るかな？

私は先程譲ってくれたジュエルシードを早速封印しようとしたら、  
既に封印済みだと分かり、頭に？が浮かんだ。

もしかして、さっきの男の子が？

あの子も魔導士なのかな？

そんなことを思いながら、さっきの男の子のことを思う。

敵……じゃないみたいだけど、力のある魔導士なのは確かだ。

一応、注意しといたほうがいいね。

(フエイト。そっちはどうだい？)

そんなことを考えていると、アルフから念話が届いた。

(うん。さっき一個見つけたよ)

(さすが私のご主人さま♪ こっちもユウヤが一個見つけたって)

(そうなの？ それじゃ、今日の探索はこれで終わりにしようか？)

(了解。ユウヤにそう言っとくよ)

念話が切れると、私はジュエルシードを閃光の戦斧バルディシュに保管して、  
その場から飛んでアルフ達の元に戻った。

あの日から例の登場人物と出会うこともなく。学校でも高町とは  
今まで通りの関係なので、俺が物語に介入する要素はない。

このまま平凡に過ごせたらいいなあ……。

これで転生者の問題がなきゃ、平凡な生活を過ごせるのに……。  
そんなことを思うある日、鍛練で疲れた体で家に戻ったら、母親  
が俺に言った。

「健一、温泉に行くわよ」

「はい？」



理由を聞くと、いつも仕事で忙しい父親が連休中に休みをとったらしい。

どうやら以前からこの連休を使って家族旅行を計画していたようだ。で、決まったのが二泊の温泉ってことだ。場所はと言うと、近場の温泉旅館とのこと。

まあ、あの日から不安定だった家族関係も、これを機に完全修復するのが狙いなのだろう。

本当はその連休を鍛練に当てるつもりだったが、ココで俺が無理だと断れば、家族関係に罅が入ったままになってしまう。

それは流石に嫌すぎるので、俺は分かったと頷く。

俺が頷くと、母親は少しだけ嬉しそうに笑った。

母親のあんな顔を見るのは何年ぶりだろ。いつもは疲れた顔か悲しい顔しかしていなかったので、新鮮な気分になった。

そんなこんなで当日、俺は父親の車で温泉旅館「旅館山の宿」に来了。

今回ばかりは鍛練もお休みだ。

ここんところ鍛練漬けだったし、休息するにはピッタリな場所だ。十分、英気を養おうっと。

帰ったら再び鍛練漬けの日々に戻るんだから……。

ああ、なんか気が重くなってきたな。

とりあえず、温泉にでも行こう。

着替えを持って浴場へと向かう。浴場の前に着くと、背後から誰かが俺に声をかけてきた。

「あれ？　もしかして健一君？」

毎日、ある特定の場所でしか聞くことしかない声。そして俺の名前を君付けで呼ぶ奴は、この世で二人しか居ない。

そう。高町と月村だ。因みに両親は俺のことを呼び捨てで呼ぶ。

出来れば月村でお願いします。

俺はそう天に願いながら振り返ってみると、そこにはいつもの三娘と、高校生か大学生くらいの歳のお姉さんが二人居た。

え？　なにこれ？　なんか増えてる？

さて、私達高町家は、この連休を使ってちよつとした家族旅行にお出かけします。

今回は、アリサちゃんとすずかちゃん。そしてお兄ちゃんの恋人であり、すずかちゃんのお姉さんでもある忍さん。月村家のメイド達も一緒です。

近場で二泊、のんびり温泉に浸かって、日頃の疲れを癒そうと高町家の家族旅行としてはいつものプランです。

みんな旅行を楽しそうにしていますが、私は少しブルーです。

先週、すずかちゃん家で出会った真っ黒な魔法使いの娘とあれから一つも見つられていないジュエルシードのこと。

色々、考えすぎちゃっているから少しゆっくりお休みするように、ユーノ君のお勧めもあって、とりあえずこの二日間はなのとも歳相応お子様らしく、目一杯遊んでしまおうと思います。

温泉旅館に來たのでみんなと一緒に温泉に入ろうと言うアリサちゃん。その提案にのり、私達は浴場に向かいます。すると、浴場近くに見覚えのある後ろ姿を発見しました。

私はつい、その後ろ姿に声をかけてしまいました。

私の声に反応して、恐る恐るとした様子で振り返るその子は、顔を見るとやっぱり健一君でした。偶然です。まさかこんな場所で健一君と会うなんて、夢に思っていなかったから。

健一君は驚きながら私達を見えています。

「あら、健一じゃない。偶然ね。こんな場所で会うなんて」  
「本当、健一君も旅行？」

アリサちゃんとすずかちゃんが、健一君に近づきながらそう言いました。

「ああ、そんな感じだ。……そちらの二人は？」

健一君はお姉ちゃんと忍さんに視線を向けながら尋ねてきました。

視線の意味に気付いた私が健一君に二人を紹介します。

「こっちが私のお姉ちゃんのお姉さん。で、すずかちゃんのお姉さんの忍さんだよ」

私が紹介するとお姉ちゃんと忍さんは、健一君に軽く自己紹介をして、先に浴場に向かいました。

「着替えを持ってるってことは、これから温泉に行くの？」

「まあな。三娘もか？」

「だから、その呼び方やめなさいってっ」

アリサちゃんが言葉だけの注意をしますが、既に健一君の呼び方を半ば諦めている節があり、投げやり気味な気がしました。

「善処します」

そして健一君のいつも通りの返答。まるで学校に居る気がしてきた。

「と・こ・ろ・で、ココで会ったのもなにかの縁だし、どう？ 私達と一緒に温泉でも入る？」

いつまでも呼び方を変えない健一君に、少しだけ困らせようと思ったのか、アリサちゃんが冗談半分で誘い始めます。

「は？ おま、なに言ってるの？」

予想どおりの反応に、アリサちゃんは益々調子に乗って健一君をからかいます。

「あら？ 私達まだ九歳なんだから、一緒に入っても大丈夫でしょ。ほら、その注意書きにだって十歳未満はどっちでも入れるって書いてあるし」

アリサちゃんが指差した注意書きには、確かにそう書かれていました。

それを見た健一君は少し困った顔をします。

「ね？」

ニヤニヤと笑うアリサちゃん。健一君が助けを求める目で、私とすずかちゃんを見ますが、私達は曖昧な笑みでかわします。

健一君には悪いけど、私達もアリサちゃんと同じ気持ちなので、

少しだけ困らせようと思います。

それに、健一君のあんな困った顔を見るのは初めてなので少し新鮮かな。

助けがないと判断した健一君はどうすればいいか頭を抱えます。

最初は困っているのかと思っていたけど、それが違くと次の瞬間気付かされました。

「……OK。バニングスがそこまで言うんなら、一緒に入るか」

「「「え？」」」

健一君の言葉に私達は固まった。

「ん？ どうしたんだ？ 早く行こうぜ」

健一君の態度が一変して積極的になりました。いきなりどうしたんだろ？

「え、あ……本気？」

「あん？ バニングスが誘ってきたんだろ？」

「それは、そうだけど……」

「それともアレか？ 急に羞恥心でも覚えたの？」

「あ……うう……」

攻める側から攻められる側へと立場が変わったアリサちゃん。どんどん顔が真っ赤になっていきます。これはこれで新鮮。

「なーんてな。冗談だよ。冗談。じゃあ俺はもう行くぜ」

そう言って、健一君は男湯の方に向かいました。

残された私達は、真っ赤になったアリサちゃんを連れて女湯に連れていきます。

真っ赤になったアリサちゃんは、普段以上に可愛かったのは内緒だよ。

「ふう……良い湯だった」

温泉で疲れを癒した俺は、浴衣に着替える。

そいや、後から入って来た二人。結構鍛えられていたな。一人は

傷だらけだったけど、災害救助か自衛隊でもしてたのかな？　もう一人は若い男性だったな。鍛えられているけど、傷の人と比べるとまだまだだな。

そんな風に思いながら上気分で部屋に戻ろうとしたら、廊下で三娘が知らない女性となにやら話している場面に遭遇した。

なにやってんだ？

よく見ると絡まれているようにも見えるが、……とりあえず行ってみるか。

「よう、なにしてんの？」

俺が三娘に声をかけてみる。女性はチラリと俺を見て、その場から去って行った。

高町を見ると、驚いた顔でその女性の後ろ姿を見ていた。

「誰？　今の人？」

知り合いかと思いきや高町に尋ねてみると、さあと首を横に振った。やっぱり知らない人のようだ。

「なあにあれ！　昼間から酔っ払ってんじゃないの！　気分悪っ」

「まあまあ、くつろぎ空間なんだし、色んな人が居るよ」

「だからと言って、節度ってもんがあるでしょ！　節度ってもんが！」

興奮したバニングスを宥める高町。俺はそんな光景を見ながら、さっきの人を思い出す。

「にしても今の人……」

すれ違っただけなのに、ずいぶんと印象に残る部分を俺はつい呟いてしまった。

「額の黒子でけえなあ……」

あんなでかい黒子を見たのは初めてだ。

世界って広いな……。

「はあ……。アンタ、それってどうなのよ……」

そんな俺の言葉に呆れたバニングスは、毒気が抜けたのか、少し大人しくなる。

「そいや、さっきから気になってたんだけど、高町のソレ、ペットか？」

そいやフェレットとは初対面なので、挨拶がてら話題をソレに変えてみた。

俺の質問に高町はうんと頷いた。

「ユーノ君だよ」

「ふーん。ちょっといいか？」

手を伸ばしながら高町に許可をとると、俺はフェレットのユーノ君を抱いてみた。

「おお、フサフサだな」

毛に触るとフサフサした毛並みが気持ち良かった。腹をワツワツサと撫でてみると、くすぐったいのか左右に揺れるフェレット。なんか、面白い……。

「きゅ〜」

「ハハハ、見て見て、マフラー」

フェレットの柔らかい体のせいであ、首に巻いてしまう俺。

いやこれ、一回やってみたかったんだよね〜。

「きゅー!!!」

「ユーノ君っ!?!」

「なにしてんのよ!」

パコンとバニングスに後頭部を叩かれる。その隙について、俺の手から逃げていくフェレット。

もう少し撫でていたかった……。

名残惜しい目で俺はフェレットを見つめる。すると俺に恐怖したのか高町の肩に僻み付くフェレット。

まあいいや。

「じゃ、俺は行くぜ」

「ちょっと待ちないさい」

その場から立ち去ろうとすると、バニングスが俺の肩を掴んで引きとめる。

「ん？」

「これから私達、遊技場で卓球するんだけど、健一もやらない？卓球？」

他の二人を見ると、バニングスの意見に同意しているようだが、なぜに俺を誘うんだ？

確かに学校とかではたまに話したり、昼飯も食べたたりするが、一緒に遊んだりしたことはない。と言うか、一緒に遊ぶ仲ではない。何度も言うが、俺と三娘の関係は知り合い以上友達未満だ。

だからどうしてバニングスが俺を誘うのが全く理解できなかった。なので、冗談口調で俺は今の関係を再確認させることにした。

「は？ いやいや、そーゆうのはお友達同士でやればいいんじゃないの？」

すると三娘は目をパチクリとした感じで俺を見た。

あれ？ 俺、なんかおかしいなと言った？

「はぁ……なに言ってるんだか」

バニングスが呆れ口調でため息を吐く。他の二人も同様だ。

「お友達同士って言うんなら、健一もそうでしょ？」

「そうだよ」

「うんうん」

バニングスの言葉に頷く高町と月村。

え？ なにこの状況？

「えーっと、どう言う意味ですか？」

「つ・ま・り、私達とはアンタは友達ってこと！」

「……………ええっ！！」

あまりの衝撃に、一瞬脳がフリーズしちまったぜ。

「てか、いつの間にそんな関係に！？」

「一年の頃からに決まってるでしょ」

「うえええっ！？」

今年一番のショックだ。

どれくらいショックかと言うと、いい感じに成長している会社に

大金を投資したら、次の日に倒産した時のショックと同じだと思う。  
ま、投資なんてしたことないから分かんないけど、たぶんソレと同じくらいだろう。

「もしかして健一君。今まで私達のこと友達とっていいなかったの？」

月村がそう訊くと、俺はうんと頷いた。

「正直、知り合い以上友達未満の関係だと……」

俺が今まで信じていた関係を伝える。

「なに、その変な関係……？ 全く、友達でもないのにバスで同じ座席に座ったり、一緒にお昼とかしないわよ」

呆れながらやれやれと両肩を揺らすバニングス。

「まあいいわ。お互い勘違いしてたみたいだし、この際ハッキリさせましょう」

「そうだね」

「うん」

三娘がお互い頷くと、バニングスが俺に近づき、

「健一、私達と友達になりましたよ」

そう言って、手を伸ばしてくれた。他の二人も同意見のようだ。

「……………っ！」

友達。その言葉を聞くと、昔、たった一人の友達だった奴のことを思い出してしまう。

駄弁ったり、飯を食ったり、遊んだりしてたアイツのことを……。

俺とアイツは間違いなく友達だった。

あの事件が起こるまで……。

アレが切っ掛けで俺達の仲に罅が入り、俺は友達を失った。

悩んでいた。助けを求めている。なのに俺はそれに気付かず、見過ごしてしまった。

それ以来俺は、友達と言う関係を作るのをやめた。もう二度と、あの痛みを味わいたくないから……。

集団から一歩引いて、人を遠ざけた。



常に一人。

それは転生してからもだ。

俺は転生者で、この世界には多数の転生者が居る。

もし俺が友達を作ったら、他の転生者がその人に危害を加えるかも知れない。

だから人と積極的に関わろうとするのを避け、自分を守るためだけに力をつけてきた。

しかし、それはただの言い訳だ。

本当はアイツみたいに、また友達を助けることが出来ないのが……恐かった。

だから俺は友達を作らない。常に一人で居れば、あの痛みを味わうことはないから。

今の両親との仲だってそうだ。アレが原因で家族関係に罅が入ったのは確かだが、それ以前に、俺自身があまり両親と積極的に関わろうとしてこなかった。

両親がなにしようがどうでもいい。そして両親も、俺がなにをしているかは関心がない。正直、冷めた家庭だと思う。

けどコレは仕方がないことだ。大切な者だと思えば思うほど、失った痛みは尋常じゃない。

だから人は恐れる。

もう二度と、あの痛みを味わいたくないから。

それを俺は、アイツの時とアレの時で痛いほど、苦しくなるほど理解した。

そしてその痛みを両親は知っている。

だから昨日まで冷めた家庭になっていたのだ。

けど、今回の旅行で両親はその痛みを乗り越えようとしている。忘れるんじゃないって、乗り越えるために。

いつまでもこのままじゃいけないと思ったから。

俺はジッと三娘を見る。

バニングス。高町。月村。この三人は、今まで俺のことを友達だ

と思っていたくれた。

こんな、俺なんかを……。

もしかしたらこれは、変わるチャンスかもしれない。

昔の自分から、これからの自分へ……。

両親も変わろうとしている。あの冷めた家庭から、少しずつ温かい家庭に戻るために……。

あの両親が変わろうとしてるんだ。いつまでも昔にしがみ付く自分と決別するいい機会なのかもしれない。

俺は意を決して、バニングスの手をとった。

「ああ、こんな俺でよければ……」

自分を変えるために……。

ジュエルシード探索の為、私はアルフとユウヤと一緒に温泉旅館まで足を運んだ。

私はジュエルシードの探知。ユウヤは周囲の搜索。アルフは、この間の白い魔導士の反応があったので、そっちに向かった。

ちょうどいい木の枝があったので、私はそこに座って探知作業を開始する。しばらくするとアルフから念話があった。

（あー、もしもしフェイト。こちらアルフ）

（うん？）

（ちょっと見て来たよ。例の白い娘）

先日会った白い魔導士。私と同じ目的の女の子。

（そう。どうだった？）

（うーん。まあどってことないね。フェイトの敵じゃないよ）

アルフの言う通りだ。魔力値は高いけど、スキルが全然ダメ。素人当然。アレなら何人束になってきてもどうにでも対処ができる。

（そう？ こっちも少し進展。次のジュエルシードの位置が、だいぶ特定できてきた。今夜には捕獲できと思うよ）

（ナイスだよ！ フェイト。さすが私のご主人さま！）

（ありがとうアルフ。夜にまた落ち合おう）

（はい。ところでユウヤはどうした？）

（うん。さっき念話で伝えたけど、やることないから搜索は続けるって。夜には落ち合うと思うよ）

（そうかい。そんじゃね）

そう言っただけから念話が切れた。私は再び探知作業を続ける。

あの後俺達は遊技場に向かい、三娘と卓球をして遊んだ。

久しぶりに楽しい時間を満喫した。気付いたら部屋に戻る時間になっていたので卓球をやめる。

そして今は遊技場を後にして、それぞれの部屋に帰る途中だ。

「にしても、アンタって結構卓球上手いのね。ビックリしたわ」

俺を見ながら、バニングスは先程までの光景が信じられないと言った口調で驚いていた。

「私なんて惨敗だったよ……」

逆に高町は本当に残念な結果だったので落ち込んでいる。

「まさかすずかレベルの運動神経がこんなに身近に居るとはね」

「つーか、軽く詐欺だよアレ。普段、おっとりしている月村がそんなに動けるなんて誰が予想できる？　しかも本気でやって負けたよ俺」

運動神経が良いとは聞いていたが、常人を逸脱した動きだ。

「うん。私も久しぶり本気でやれて楽しかったよ」

まだ興奮しているのか、普段の月村と違って少し語気が強かった。そう、俺と月村の試合は、最初は両者譲らない白熱した戦いだっただが、後半になると俺は一点も点をとれず負けてしまった。

マリアとの鍛練で反射神経と動体視力は一般的な九歳児よりかは鍛えられているはずなのに、月村は元々の性能で俺と渡り合ったのだ。

正直人間かと疑ったよ。

「なあ月村。ほんっとーに、スポーツやってないのか？」

「うん。塾やバイオリンのお稽古が忙しくて、スポーツとかしている時間はないよ」

「おいおいマジかよ……」

本当に居るんだな……。天才って奴は……。

始めて天才の力を目の当たりにした俺は、驚きを隠せなかった。

「ん」

「ん？ どうしたのアリサちゃん？」

バニングスが唸っているのを高町が気付き、理由を尋ねた。すると、バニングスはキツと俺を睨み、

「ねえ健一。さっきから気になったんだけ、アンタどうして苗字で私達を呼ぶの？」

「はい？」

質問の意図がよく分からない。

なにが言いたいんだ？ バニングスは？

「ほら、私達今日で正式に友達になったわけでしょ？ まあ、私は最初から友達って思ってたけどね」

「私もだよっ」

「私も」

いや本当、それはもういいよ。

なんか、今まで俺が友達だと思っていなかったことに腹が立ったのか、あて付けのようになんかというやり口を何度もしてくる三娘。

とりあえずそれを軽く流して、バニングスの意図を確かめる。

「えっと……、つまり、どういうこと？」

「ほら、アレよ……その……んっ。それくらい分かりなさいよ！  
そう言っつて、バニングスは頬を赤らめながらそっぽを向いた。

「ちよっ……」

いや、分からないよって言われても、俺エスパーじゃないから分からないよ。

ちゃんと言葉で伝えて……。

「？」

どうやら、高町もバニングスがなにを言いたいのかわかっていないようだ。

そんなバニングスの意味不明な要求に俺が混乱していると、月村が口を綻ばせながら助け舟をだしてくれた。

「健一君、アリサちゃんは私達のことを名前で呼んでほしいみたい」「え？」

「勿論、私も呼んでほしいな」  
なるほどね。そう言うことか……。

「名前、ね……」

バニングスを見てみると、未だにそっぽを向いてるが、横目でチラチラと俺を見ていた。

全く、素直にそう言えば良いのに……。

「わ、私もっ」

月村の助け船のお陰か、高町も便乗してきた。

ジッと食い入るように俺を見る高町。ニツコリと微笑みながら俺を見る月村。チラチラと俺を見るバニングス。

三者三様、期待が込められた目で俺を見ている。

え？ なにこれ。名前を呼ばないといけない空気？

「……あー、ゴメン。ちょっと無理だわ」

心苦しいが、俺はキッパリと断った。

「つ……なんでよっ。わけわっかんない！」

断ったのが納得いかないのか、俺に突っかかってくるバニングス。当然の反応だが、こういう時だけ素直になるのはどうかと思うぞ？

「アリサちゃん、落ち着いて。なにか理由でもあるの？」

そんなバニングスを宥めながら、月村が俺に理由を訊いてくる。

「うん。良かったら教えて」

高町も同じ気持ちのようだ。

ま、特に秘密にする理由もないので、俺は素直に三娘に教えた。

「いや実は俺、女の子の名前を呼ぶ時は、特別な人って決めてんだ」  
我ながらアホな理由だと思う。

前世の頃、ガキだった時に観たアニメでそんなこと言うキャラが居て、子供ながらカッコいいと思ってしまったのが始まりなのだ。  
以来ずっと真似してきた結果、癖になってしまったのだ。

ま、前世じゃ特に問題はなかったけど、まさかココで名前を呼べと言われるとは思わなかった……。

笑われるかと思っていたが、三娘の反応はそれぞれだった。

高町は驚いていて、月村はそっかと納得しており、バニングスは何故か顔が真っ赤になっていた。

「ふ、ふうん。そうなんだ……。それじゃ、仕方ないわね」

「そうだね」

「う、うん……」

あれ？　なんだろう。この反応？　てっきり馬鹿にされると思っていたのに。

ま、いいや。馬鹿にされるよりかましだし。

俺の理由に納得したのか、これ以上のこの話題を続けることはしなかった。

歩くなり数分。曲がり角で、俺は三娘と別れ両親が待っている部屋に戻った。

部屋で少し寛いでいると、ほどなくして従業員が夕食を運んできてくれた。旅館の料理を食べながら、俺は両親に学校のこと、友達のこと、今日のことなどを話していた。

俺が話すのを楽しそうに聞いてくれる両親。以前はあまりなかった両親とのコミュニケーションが少し楽しかった。

そしてその夜。両親が寝ている中、俺はマリアの報告にどうするか悩んでいた。

この近辺に例の結晶体の反応を感知したマリア。当然、普段ならば高町がなんとかしてくれるだろうと思い放置するが、今回はそうも言ってもらえない。

結晶体以外の反応もマリアは感知がしたのだ。

ソレは先日出会った金髪少女の魔力反応。

金髪少女の目的は結晶体を集めること。当然、高町も同じ目的だ。となると、目的が同じ奴らが出会う場合、そこに待っているのは協力か敵対かの二つだ。

実際どうなるかは出会わなければ分からないが、先日会った金髪少女の雰囲気からすると、間違いなく敵対するだろうな……。

俺が渡すの嫌だって言ってたなら、間違いなく強硬手段にでる気満々だったし……。

しょうがない。高町が心配だし、様子だけでも見に行くか。

俺は枕元に置いてあるマリアを掴む。するとマリアが念話で尋ねてきた。

（『行かれるのですか？』）

（ああ）

それ以上はなにも訊かれなかったので、俺は両親が起きないよう静かに着替えて部屋を出ていき、旅館を後にする。

既に高町も旅館を後にして現場に向かっていているようだ。

『正直驚いています』

現場に向かう途中、マリアが疑問を口にした。

「なにが？」

『マスターが自発的に他人の為に動くことがです』

確かに、産まれて九年間そんなことをしたことないから、驚かれるのも無理はないだろう。

「だろうな。普段の俺だったら自分のこと以外に動こうとは思わないだろ。俺の命や生活と言った生きる上での大事なモノに危害がなければ、基本無関心だからな」

そう。この五年間の鍛練は、不測の事態を対処する力を得るため。つまりそれは、自分の命や平凡な生活を守るための力だ。

決してコレは、他人を助けるための力ではない。

高町の覚醒時は不審な念話は、ソレがなんなのかを調べるため。

ソレが俺に危害を加えそうなモノなら処分するし、無害だったら放置する。

森永との戦闘は単なる自衛。その後は俺に危害がないので放置。そして金髪少女との出会いは、巻き込まれないために早々に手にした結晶体を渡した。面倒ごととは嫌だからな。

そう。全ては自分の為の行動。そこに他人を助けるなどと言ったモノはない。

『ではどうして？ 高町なのはの覚醒時に助けようと思ったのですか？』

俺をよく知ってるマリアなら当然の疑問だ。

「単に知り合い以上の関係だからだよ。それに、あの時の思念体は雑魚レベルだし、助けられる力があるから助けようと思った。それだけだ」

ようはただの気まぐれだ。けどマリアはそんな俺の気まぐれの行動を否定した。

『それだと、マスターの生き方に矛盾が生じます。もしあの時、高町なのはが死んだとしても、マスターの生活にはなんの支障もあります。なにより、高町なのはだと断定する前に、マスターには助ける意思がありました。なんの関係もない赤の他人を。それに森永香奈枝との戦闘終了後の際、マスターは止めを刺しませんでした。今後敵になる可能性のある相手を。ソレはなぜですか？』

俺の行動の矛盾点を突き付けるマリア。

ああ、今なら探偵に追いつめられる犯人の気持ち分かる気がするかも……。

「うっ……、全く、お前の記憶力は大したもんだよ」

『私は機械ですから、記憶ではなく記録が正しいですよ』

少しでも口調が楽しそうに聞こえるのは気のせいかな？ マリアが今人型だったら絶対どや顔をしてるだろうな。

「……………」

人型のマリアがどや顔をしてる姿を思い浮かべるが、無理だった。



そもそもマリアはあまり感情が表に出さない。いつも無表情なのだ。なのでマリアがどや顔する姿など想像できるわけがない。

「……OK、白状するよ。まず最初の質問は、単に目の前で傷ついたり、最悪死なれるのが嫌だったんだ。お前も知ってるだろう。五年前のアレを」

なぜか犯人が動機を語りだす気分になってきた。

『……はい』

「そーゆうのを直接見たくないから、そうなる前に助けようと思った。それが真実だ。実際、俺が見てない所で高町が傷ついたり死んだりしても、そういう運命なんだろうと納得するだけで終わるだろう」

それに、前世の頃もそんなのを見てきた。正直、あんなのは今後一切見たくない。

『そうですか』

納得したのか、マリアはそれ以上なにも言ってこなかった。

「で、森永を殺さなかったのは、単に必要ななかったからだ。アイツが俺の敵になる可能性が皆無だから。お前も知ってたんだろ？ アイツの目的は物語に介入する転生者を殺すこと。けど俺は介入する気はさらさらない。そうになると、アイツは俺を殺す必要性が0になる。となると、俺にとってアイツは無害だ。だから俺がアイツを殺さなかった」

分かったかと訊くと、はいと答えるマリア。

『なるほど……。マスターの考えが理解できました。それでは最後にもう一つ、質問よろしいですか？』

「あん？」

まだあるのか。

『これから向かう現場でもし、高町なのはが危険でしたら助けるつもりですか？』

「ああ」

俺は即答で答える。

『それはどうしてですか?』

なんか、今日はやけに絡んでくるな……。

長年の相棒であるマリアのらしくない質問の数に、俺は微かに疑問を覚えた。

いつもならココまで突っ込んで訊いてくる奴じゃないんだけど……。

そんなことを思いながら、俺はマリアの質問に答える。

「……友達、だからだ」

『友達……ですか?』

俺の答えにマリアは意外そうな声をあげた。

「そうだ」

『理由を訊いてもよろしいですか?』

マリアの疑問に俺は頷く。

「さっきも言った通り、俺にとって大事なモノは自分の命と平凡な生活だ。けど、平凡って言ってもソレには色んな要素が必要なんだ。家庭、学校、地域、会社、そして、人間関係だ」

『人間関係?』

またもや以外そうな声をあげるマリア。

俺が人間関係を大事にするのがそんなに以外か?

俺は気にせず話を続ける。

「例えば今現在、俺が大切だと思っている人間関係は三つ。一つは家族関係だ」

「家族関係ですか……。でもマスターはそこまで家族を大事にしない」と私は思いますが……」

うっ、まあ家の家族関係を見れば、俺が大事にしているとは到底思えないだろ。マリアの疑問はもっともだ。

「ま、お前も知っての通り、家は冷めた家庭だが、それでも大事なには変わらない。世界でたった一つの肉親なんだから……」

仮にも俺をココまで育ててくれたんだ。感謝はしている。俺があまり関わろうとはせず、生意気な態度をとっていたころも、アレが

健在の時は結構俺に気をかけてくれていたんだから。

今思えば、両親には少し悪いことをしたな……。反省しよう。

「で、話は戻すが、次に大切なのは夫婦関係だ。コレは将来、俺が平凡な生活を送るための必要な関係だからな」

そろそろ現場に近づきそうなので、周りに気付かれないよう、俺は念話で続きをマリアに話すことにした。

（そして最後が友人関係だ。他人だけど、家族と同等の価値がある関係だ。他の奴はどう思ってるか知らないが、少なくとも俺はそう思っている。家族が繋がりで夫婦が愛。そして友達は財産だ。この三つの関係が、俺が望む平凡な生活には必要不可欠な要素の一つ。それが、高町を助ける理由だ。アイツが危険な目にあいそうなら、今度こそ俺はそれを守る！　どんな手段を使っても……）

かつて、友達を助けられなかった後悔を晴らすために……。

（『……それが、マスターの答え、ですか？』）

（ああ）

（『分かりました。マスターの真意が聞けて、よかった……』）

頷くと、少し嬉しそうにマリアが呟いた。

本当、一体どうしたんだろ？　なにか理由でもあるのか？

「なあ——っ」

理由を訊こうとしたら三つの人影が見えたので、俺は近くの木の影に隠れながら、様子を窺う。理由は後にも訊こうと思いながら人影を確認する。

目が暗闇に馴れてきたのか、夜目で確認することが可能だ。

一人は白い防護服バリアジャケットを装着している高町。もう一人は先日遭遇した金髪少女。そして最後が……あれ？

あの人って旅館で会ったでかい黒子の人だ……。

なんか、見るからに金髪少女の仲間ですって言う立ち位置だな。と言うこうと登場人物の一人か。

にしても緊迫した状況だな。こりゃ、話し合いは無理っぽいな。

（マリア、防護服だ）

（『了解』）

俺はいつでも助太刀できるようにバリアジャケット防護服を装着し、ジッと三人を見続けた。

ジュエルシードの反応を監視した私達。現場に向かうと、そこには先日会った真っ黒い魔法使いの娘と旅館でさっき会った女の人が居て、二人の近くにジュエルシードがありました。どうやら既に封印されているようです。

「ソレを、ジュエルシードをどうする気だっ？ ソレは、危険な物なんだっ！」

ユーノ君も気付いたようで、二人向かって危険性を訴えます。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにさあ、あたし親切に言ったよね？ ガブツといくよって……！」

しかし二人はユーノ君の質問に答えず、女の人が私達にそう言うのと、急に赤い犬に変わりました。

「やっぱり、アイツ、あの子の使い魔だ！」

「使い魔？」

内心驚きながら、ユーノ君に尋ねます。

「そうさ。あたしはこの娘に作ってもらった魔法生命。制作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てをかけて守ってあげるんだ」

すると赤い犬が代わりに教えてくれました。もしかして良い人？

いや、良い犬、なのかな……？

「さっきに帰ってて。ユウヤはあたしが後で連れて帰るから」

「うん。無茶しないでね」

「オーケー！」

そう言っていきなり私達に襲いかかる赤い犬。鋭い爪が私達に振り降ろそうとしますが、ユーノ君が咄嗟に防御魔法を使い障壁を張ってくれたお陰で、赤い犬の爪は私達には届かなかった。

「なのはっ！ あの子をお願い！」

え？ それって……。

「させるとでも思ってるの！」

爪を障壁に食いこませて破壊しようと試みる赤い犬。

「させてみせるさ！」

障壁で防ぎながら、緑色の術式が広がった。どうやら別の魔法を使うようです。

「移動魔法……まづっ——」

二匹が緑色の光の柱に包まれると、次の瞬間、二匹の姿はどこにもありません。

残ったのは私と真っ黒い魔法使いの娘の二人。

「結界に、強制転移魔法。良い使い魔を持っている」

その言葉にムツとなり、私は自分とユーノ君の関係を教える。

「ユーノ君は、使い魔って奴じゃないよ。私の大切な友達」

私の言葉になにか引つかかったのか、ジッと私を見る。私も負けずにジッと見つめる。

「……で、どうするの？」

「話し合いで、なんとか出来るってこと……ない？」

先日はいきなりだったので、なにも出来なかったけど、今はこうして話すことが出来る。だからちゃんと、お互いの理由を話して、どうするかを決めた方が良くに決まってる。

でもそんな私の提案を真っ黒い魔法使いの娘は却下しました。

「私は、ジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら、私達はジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

「だからっ、そういうことを簡単に決めつけない為に、話し合いって必要なんだと思う！」

そうだ。この世界は昔からそういうことをちゃんとしてこなかったから、争いが増加してきたんだ。でも今は違う。ちゃんとみんな、話し合う大切を知り、たくさんの人が自分の想いをちゃんと他の人に伝える。

そうすることで、少なくともこの国には争いがなくなったのだから。

だから、話し合うことが無駄じゃないことを、目の前の真っ黒い魔法使いの娘に教えないといけない。

「……話し合うだけじゃ、言葉だけじゃきつとなにも変わらない……伝わらない！」

そんな私の想いを、真っ黒い魔法使いの娘は否定して、黒いデバイスを私に向けると同時に、目の前から消えた。

「っ!？」

気付いたら私の後ろに居た。真っ黒い魔法使いの娘はデバイスを横振りで私を狙う。私は咄嗟に避けて、空を飛んで距離を稼ぐ。

当然、真っ黒い魔法使いの娘は追いかけてきます。

「っ、でも、だからって……っ!」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

一方的にそう告げると、瞬時に黒い魔法使いの娘は私の前方に回り込み、

『Thunder Smasher』

雷を撃ってきました。

不屈の心

私はそれを防ぐため、レイジングハートで雷を狙い、

『Divine Buster』

桜色の砲撃を撃って食い止めます。

「レイジングハート、お願い！」

更に魔力を込めて威力が上がった砲撃で、雷を撃ち消すことに成功。

よしっ!

「なのは!」

やったと思ったのもつかの間。安心していたらユーノ君が私の名前を叫びます。

それは、私に危険を伝える声音でした。

すると、いつの間にか黒い魔法使いの娘は私の頭上に居て、デバ

イスから魔力の刃らしきものを発生させて、私に接近した。

私は突然の事態に動けず、これから来る痛みに恐怖して目を瞑ってしまう。

「セウシル！」

突然、ユーノ君以外の男の子の声が後ろから聞こえました。しかも、聞き覚えのある声で。

一瞬後、ガキン——！ とぶつかる音が聞こえた。

その音が気になり、私はゆっくりと目を開けます。すると、自分の周りに球状のバリアが私を囲っていました。

え？ これって……？

私は恐る恐る声が聞こえた方向に振り返る。そこに居たのは、黒いマントを着た子が居ました。

その子の顔を見ると、私の頭は疑問で埋め尽くされました。

どうして……？

「あなた……この前の……」

「よお、また会ったな」

どうやら真っ黒い魔法使いの娘とは知り合いのようだけど、今の私にそんなことを考える余裕はありません。

あるのは疑問だけ。

「怪我はないか？ 高町」

男の子が私を見ながらそう尋ねます。

その声を聞いて、私は驚きと疑問を混ぜた声音でその子の名前を叫びました。

「け、健一君！？ どうして……！」

「悪いが話はあとだ。今は目の前相手に集中しろ」

「え……う、うん！」

俺の言葉に戸惑いながらも頷いて、金髪少女に視線を向ける。よし。その調子なら大丈夫そうだな。

まだ心は折れていない。

にしても、さっきのは危なかったな……。モードをティオにしといて良かった。

内心安堵しながら、俺は高町を囲った球状のバリアを消し、高町の隣に移動して金髪少女に尋ねる。

「で、どうする？ 二対一じゃ、お前の方が不利だぞ？ 頼みの使い魔もフェレットが相手をしてるから、こっちに来れねーぞ」

ジッと俺を見ると、金髪少女はその場から距離をとって俺達にデバイスを向ける。どうやら引く気はないようだ。

「OK、理解したぜ。そっちがそのつもりなら、こっちも……。容赦しねえぞ！」

俺はサイスを使おうと馴れた動作で制御と調整を始める。

すると突然、右方向からこの場には居ない人間の声が聞こえた

「それはこっちのセリフだ」

ドガッ——！

「……っ！？」

その瞬間、俺の横腹にとんでもない衝撃が襲いかかり、そのまま俺はふっ飛ばされた。



## 無印編 三話目（後書き）

感想などありましたらお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。

## 無印編 四話目

とんでもない一撃で吹っ飛ぶ俺。混乱しながらもどうにか姿勢を整えて、新たに現れた敵を見る。ずきんと痛みが走り、攻撃を受けた部位に手を当てる。

バリアジャケット  
防護服のお陰で深刻なダメージじゃないけど、モロに食らったから少し痛かった。

「っ……健一君っ!!」

高町の悲痛な叫びが聞こえた。俺は片手で大丈夫だとサインする。勿論、敵から目を離すことはなかった。いや、離せなかった。

コイツに、俺のアレが効かなかったからだ。

こんなのは初めてだ。アイツの能力なのか？

「マリア、奴の反応はいつ感知した？」

『すみません。マスターが攻撃を受けたと同時に、センサーに敵の魔力反応を感知しました』

「そうか」

攻撃を受けるまで感知できなかったってことは、ギリギリまで近づいて防護服を展開したのか、俺やマリアでも感知されない、なにかしらの方法を使ったのかも知れない。

確信はできないけど、可能性の一つとして頭の隅に残しておこう。そんな風に内心で焦りながらも、俺はジッと新手の敵を見つめる。そして敵の服装、装備などで相手がどう言う戦い方をするのか分析を始める。

敵の姿は一言で言えば騎士だ。しかしガチガチの甲冑ではなく、赤を基調とした騎士服のような物に軽装な鎧を装備しているだけだった。

金髪少女と森永の防護服のセンスと比べると断然良い。

しかし仮にも騎士の格好をしてるなら、持っていなければならぬモノがあるはずだ。

しかし、俺に攻撃した筈のモノをコイツは持っていない。  
素手なのか？

だとしたら、すごいパンチだな。まあ、魔法を使って強化でもしたんだろうけど。

「大丈夫か？」

赤い奴が金髪少女に近づいてそう尋ねる。向こうに隙さえあれば素早くサイスを放つんだが、当然そんな隙はない。

赤い奴も俺と同じように注意しているからだ。

「うん」

「ジュエルシードは？」

「回収済みだよ」

「で、アイツらは？」

赤い奴が俺らを横目で見ながら尋ねる。

「白い服の娘はジュエルシードを持っている。もう一人はその娘の仲間みたい」

「……ふーん。で、どうするんだ？」

「あの娘から、ジュエルシードを手に入れる」

「わかった。ならオレはあのマント野郎の相手をするから、その間に白い奴からジュエルシードを。それでいいか？」

「うん。あの娘の今のレベルなら大丈夫だよ」

金髪少女がそう言うと、赤い奴が俺達の方に振り返る。

コレはやばいな……。

俺はともかく高町は瞬殺されるだろう。さっきの戦いもそうだったし。

守りながら戦えればいいけど、今の俺に高町を守りながら二人を相手できる余裕はない。

この状況でどうにかなる方法は二つ。

一つは逃げること。

だけど、ソレを向こうが許してくれないだろう。金髪少女は高速近接戦闘型のようなだからスピードはあるだろうし、赤い奴の力量は

未知数。

コレが守る戦いじゃなければ、俺一人ならどうにかなるけど。高町には荷が重いな。

だとすると、もう一つの手を使うか……。成功率は極端に低いけど、今の状況ではコレしか方法がない。

(高町。聞こえるか?)

(健一君?)

俺は念話でもう一つの方法を高町に伝える。

(アイツらの会話は聞えたか?)

(うん)

(正直、俺達ではアイツらから逃げることは不可能だ。けど、戦うことならギリギリ可能だ。向こうもそのつもりだろうだし。そうすると、お前はあの金髪と戦うことになるが大丈夫か?)

(……うん。本当は、話し合いでなんとかしたいけど、……頑張ってみる)

大丈夫ではなく、頑張るか……。今の自分の力量がちゃんと分かっているようだ。

(そうか。だったら一つアドバイスだ)

(なに?)

(相手を良く見て、逃げることにだけに集中しろ。無理なら防御。攻撃は牽制だけにしとけ)

(え? でもそれじゃ……)

(勝てないのは分かっている。けど、正攻法でやっても今の高町じゃ勝てないのは、さっきの戦いで身をもって分かっただろ?)

先程の戦いは、まさに金髪少女の独壇場だった。相手の動きについてこれず、高町はいいように翻弄されていた。

アレを見る限り今回が初の対人戦だろう。

(え……さっきの見たの?)

(ああ、近くの木陰でコッソリとな)

(うう……)

恥ずかしそうに呻く高町。そんな高町の様子を無視して俺は話を続ける。

（俺も出来るだけ早く終わらせて、お前の所に行く。だからそれまで持ちこたえてくれ）

向こうが一对一でやる気なら、俺が赤い奴を迅速に倒して高町の方にいけばどうとでもなる。

成功率が極端に低い方法。分の悪い賭けだ。

それでも、やるしかない！

（うん。分かったよ）

高町が俺の方を見ながら小さく頷く。

「作戦タイムは終了か？」

ちっ、お見通しか……。

（高町。俺が動いたと同時に、お前は二人の間に攻撃しろ）

（う、うん）

俺の指示に頷き、杖を敵に向ける。

「おい、その黒マント」

すると赤い奴が俺に声をかけてきた。

「次は、防ぐか躲すかのどっちかはしてみろよ」

言い終わると同時に、赤い奴の姿が消えた。

「っ！ セウシル！」

俺は危険を感じて、咄嗟に球状のバリアを発動させる。これならどこから来ても防げるはずだ。

しかし、赤い奴の力はそこまで甘くはなかった。

「いい判断だ。が、その程度で防ぎきれるかな？」

次に赤い奴の姿が見えたのは俺の目の前だった。赤い奴は両腕をななめ横に振り上げ、それを勢いよく振り下ろした。

ドガッ——！

途端、バリアに先程と俺が食らったのと同じ衝撃がぶつかり、その力に耐えきれず、バリアは破られてしまった。

「っ！？」

「脆いな」

赤い奴は嘲笑うかのように言い放つ。

「健一君！　っ！」

「ハアッ！」

視界の端で高町と金髪少女の戦いが始まったのを確認する。

高町は俺の言う通りに逃げることに集中しているようだが、それもいつまでもつか分からない。

迅速に目の前の敵をどうにかしないといけない。

赤い奴は俺の盾を壊すなり、今度は両腕を真上に振り上げる。

やばいと思ったと同時に、俺は素早く魔力制御と威力調整を行い、第三の術を発動させる。

「っ！　マ・セシルド！」

目の前に円形の巨大な盾を出現させる。作中ではギガノ級クラスの力なら余裕で防げる術だ。

そう簡単には壊せない。

「ふん」

しかし赤い奴は眼前に現れた巨大な盾に驚かず、そのまま勢いよく振り下ろした。

ドガッー！

先程同様、とんでもない衝撃が走るが、マ・セシルドは壊れずに赤い奴の攻撃を防いでいてくれた。

「よしっ」

嬉しさが思わず口から零れる。

「オレの一撃で壊れないか……。なかなかいい盾を持ってるな」

自分の一撃が防がれたことに小さく驚きながらも、俺の盾に賛辞を送る赤い奴。

赤い奴のその態度に、俺は危機感を覚えた。

この程度ならどうとでもなると言った余裕を、俺は感じられずにはいられなかった。

「そりゃ、どうも」

マ・セシルドを展開したまま、皮肉交じりでその言葉を受け取る。すると、赤い奴が確信めいた口調で俺に声をかけてきた。

「……その声、やはりお前、有澤か」ありさわ

「ん？　なんで俺の名前——」

ドガンッ——！！

瞬間、マ・セシルドにさっきとは比べ物にならない衝撃がぶつかり、防ぐことが出来ずに砕けちった。

「なっ……」

マ・セシルドが砕け散る中、俺の眼前には赤い奴が不敵に笑っていた。

「それにさっきの呪文……。【金色のガッシュ！】の能力か……」

俺の能力を知っている！？　となるとコイツ……。

「まさか転生者……！？」

「ご明察。そして、お前のクラスメイトの中里裕也だ。なかさとゆうや話すのはコレが初めてだな」

「クラス……メイト？」

今まで暗くて顔がよく見えなかったが、近くで見ると赤い奴——中里の顔は微かにだが見覚えが……。

「知らない顔だ……」

うん。記憶の片隅にもないな。

こんな人、クラスに居たっけ？

「なっ！　てめえふざけんなよ！　そりやお前と話したことはねえけどさ、三年間同じクラスで席が隣同士だったんだぞ！　それを知らないって……！」

中里は捲し立てる勢いで俺にそう訴えるが、覚えていないモノはしょうがない。

「ちっ！　まあいい。お前はなのはサイド。オレはフェイトサイドで立ち位置が逆。そして目的は同じ。そうになると、どうなるかは分かるよな？」

中里がなにを言いたいのか俺はすぐに理解して小さく頷いた。

「敵対関係なるのが当然。つまり――」

「戦って勝った奴が欲しい物を手に入れる！」

俺の言葉の続きを中里が紡ぎながら、両腕を大きく振り上げた。中里の攻撃を躲すため、俺は咄嗟に急降下して中里の攻撃を回避する。

「っち！」

俺はそのまま降下して地面に着地する。そして空に浮いてる中里を見る。

攻撃対象が移動したので、中里は振り上げた両腕を元に戻す。

つか、なんだよアレ！？

相手の理不尽な攻撃方法に悪態付けながら、俺は対抗策を考える。見た感じ武器らしき物を持って戦ってるようだけど、ソレがなんなのか不明だ。

剣なのか斧なのか鎚なのか棒なのか槍なのか。全く分からない。達人じゃない限り、数ある武具の中の一つを見極めることなど不可能だ。

見えない武器って奴は、ココまで厄介なモノだとは……。

それに中里のあのスピード。ハッキリ言って動きが捉えられない。敵がどこで攻撃してくるのか分からない。そうなると防御も回避もままならない。

見えない武器に、見えない敵。

最悪なコンボだ。

例え防御が出来たとしても、ギガノ級を完璧に防ぐマ・セシルドも破壊された。

それだけの力を、中里は持っている。

今のままじゃアイツに勝てない。

今のままでは……。

「逃がすかよ！」

動いたと思った瞬間、また姿が消える。  
ドガッ――！



「ガッ!？」

数瞬後、背後からさっきと同じ衝撃を食らい、再びふっ飛ばされる。

背中が痛い!

地面に転がるが、すぐに立ち上がる。

「クソッ! マリア! モードテッドだ!」

『了解!』

ブローチの色が朱色からサックスブルーに変色する。

このモードなら!

俺は素早く制御と調整を行い、

「ドラグナー・ナグル!」

始動の呪文を唱える。そして、余裕の顔で立っている中里をジッと見る。

「はっ! なにをしたところで無駄だ!」

そう吐き捨てて、追撃してくる中里。

ああそうだな。お前の言う通りだ。

確かにお前は速いよ。見えないくらいに……。

けどな、それって逆に考えるとき——

俺は右拳をギュッと握り締める。

——見えたらなんとでもなるってことだよなっ!

俺は左足を軸に右足で踏み込みながら上体を回し、右の拳を思いっきり前に殴りつける。

ドガッ——!

鈍い音が鳴る。

「な……っ」

同時に後方にふっ飛ばされる中里。なにが起こったのか分からない顔をしていた。

「カウンターで寝とけ。ボケ」

俺は振るった拳を戻しながら中里にそう吐き捨てる。その言葉で我に戻った中里はすぐに状況を理解し体勢を整える。

「……なるほど。テッドの術か。ソレのお陰で俺のスピードを捕えたと言うわけか」

俺の攻撃をどうやって当てたのかを瞬時に理解した中里は、尋ねるようにそう言った。

当然余計なことは喋らないが、中里の推理を当たっている。

そうだ。見えない敵相手に戦える力があるとすれば俺が今使える術では二つ。テッドの肉体強化とブラゴの重力しかないだろう。

見えないくらい速いなら、相手を動かさなければいいだけの話しだがブラゴの力は下手したら高町を巻き込んでしまうし、周辺に被害が確実にでる。なので、この力を使うとすれば、周辺の被害が少なく更に仲間が居ない場合でしか使わないようにしている。

その点テッドの肉体強化の術は、腕力や脚力、耐久力が上がるのは勿論、視力の強化とそれに反応できる神経の強化などもできてしまう。

その他嗅力、聴力、触力などと言った五感の強化も可能だ。

この力なら前述のようなことにはならない。

そしてテッドの術は肉体強化を主体とした力であり、第一の術でも中里のスピードを見切れる程の効果はあるはずだと思った。

そして俺の考えは見事に的中した。

中里の見えないスピードもちゃんと捉えることに成功した。

ま、それもどうにかってレベルだけだな。

だか、第二の術ならそれがしつかりと見え、第三の術なら完全に未だに未収得の第四の術なら遅いように見えるだろう。

そしてファイナルギアと呼ばれる第五の術なら、どんなスピードだろうと完全に見切れるはずだ。

見えない武器はまだ対処できないが、それでも中里のスピードが見えるようになればどうとでもなる。

俺は中里から視線を外さず、第二の術を使うために魔力を溜めながら制御と調整を行う。

次でケリをつけてやる！

すると中里は殴られた頬を擦りながらニヤリと笑った。

「けど残念だな。この勝負はココまでだ」

「なに？」

突然の終結に、俺は一瞬こちらの隙を作るブラフかと思いい警戒するが、それは無駄に終わった。

「向こうの戦いが終わったようだぞ」

人差し指で空を指す中里。俺は中里に注意しながら人差し指の向こうを見る。

「っ！」

そこには金髪少女の魔力刃が、高町の首元ギリギリに突きつけられていた。

どこからどう見ても、高町の負けは明らかだ。

すると高町のデバイスから蒼い結晶体が現れる。それはつまり、負けを認めたと言うことだ。

「ま、同然の結果だな」

中里が微笑を浮かべながらそう言う。

「てめえの入れ知恵程度じゃ、この戦いでなのはが勝てる可能性は0だ。どうにもならない。原作通りの結果だよ」

中里の言葉に俺はなんにも言い返すことができなかった。負けた。守れなかった。そんな悔しさが爆発しそうになるが、歯を噛みしめることでそれを我慢する。

魔力刃を引き、蒼い結晶体を手に入れる金髪少女。

そのまま両者は地面に着地する。

「帰ろう、アルフ。ユウヤ」

目的は達成した。金髪少女はそう言ってその場を去る。いつの間に戻って来たのか、犬姿から人型に戻った黒子の人が金髪少女の後について行く。

「さっすが、あたしのご主人さま！」

嬉しそうにそう言う。それが俺の悔しさを更に増長させていく。

「んじゃあね。おチビちゃん達」

バイバイと俺達に向かって手を振る。

「またな」

「……………」

中里は俺の耳に囁くようにそう言って、横を通り抜けて行き、そのまま金髪少女の後に続いた。

「待って！」

そのまま去って行こうとする金髪少女に向かって、高町は静止を呼び掛ける。

律儀なのか、それとも勝者の余裕がそうさせるのか分からないが、高町の制止の声に立ち止まる金髪少女。

そしてこちらに振り返ず、金髪少女は高町に警告を伝えた。

「出来るなら、私達の前にもう現れないで。もし次があったら、今度は止められないかも知れない」

つまり、今日のように無傷じゃすまない。そう言いたいらしい。クソツたれが……！

「名前、あなたの名前は！？」

しかし高町はそんな金髪少女の警告を気にせず、名前を尋ねた。

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あの、私は……」

高町も名前を告げようとするが、金髪少女――テストロッサは飛んで去って行った。

残りの二人もテストロッサの後を追う。

残ったのは俺と高町とフェレット。

高町は蒼い結晶体が手に入れられず、自分のも奪われてしまったこと。更にテストロッサとの力量の差を感じ、俺と同じかそれ以上の悔しさと悲しみと不甲斐なさが降り混ざった表情で「ごめん……」と呟いた。

その謝罪は俺なのか、はたまたフェレットなのか、それとも両者に向けてなのか分からなかった。

俺はなにも言えない。いや、言えなかった。

落ち込む高町にかけ言葉が見つからないからだ。

それがとても……辛いつ！

さっきまで憤っていた悔しさは消え、今は友達に対してなにもし  
てあげられない自分の無力さにただ嘆くことしかできなかった。

海鳴温泉でのジュエルシード回収後、オレとフェイトとアルフは、  
この世界の拠点である遠見市の高級マンションの自室に戻ってきた。  
「ふう、疲れた」

オレは帰るなりリビングにあるソファに体を預けながら天井を見  
る。

ジュエルシード搜索と言う口実で、山ん中をぐるぐる歩き回った  
せいで思った以上に疲れが溜まっているようだ。

いくら体を鍛えていると言っても、やはり肉体年齢九歳の体じゃ  
山を歩き回るのはかなりしんどい。

けどそうでもない、オレの存在意義がなくなってしまふ。

ただでさえ、フェイトに無理やり協力させてくれと頼んだのだから、  
文句が言える立場ではない。

「お疲れ、ユウヤ」

フェイトがオレに労いの言葉をかけてくれるなり、冷蔵庫からペ  
ットボトルのお茶を取り出してオレに渡してくれた。

「サンキュ」

受け取るなりオレはキャップを開けて、半分くらい口に流し込ん  
だ。

ほどよい苦味が疲れを癒してくれる。

「私、お風呂に入るからユウヤは寛いでいて」

そう言って浴室に向かうフェイト。アルフも一緒に入るのかフェ  
イトの後に付いて行く。

二人がリビングから消えると、オレはさっき戦った相手の顔を思  
い出す。

ありさわけんいち  
有澤健一。

やっぱ、アイツも転生者だったか……。

以前から気にはしていた。

聖祥に入学してからずっと同じクラスで、そこには当然なのはとアリサとすずかも居た。

最初は気にも止めていなかった。なぜなら有澤自体、まるで空気のような奴だったからだ。

現に今のクラスメイト達は、大概有澤を空気のように扱っている。自分からはなにもしない。喋らない。動かない。ただ自分の席でボーっとしている。

だから誰も気に止めない。

けどオレはその認識をすぐに改めた。切っ掛けはあの事件。

【なのは】の物語でも重要な事件。仲良し三人組が友達同士になる出来事だ。

アリサがすずかにちよっかいをかけて、大事なヘアバンドを奪う。それをなのはが肉体言語で諫め喧嘩になる。

そんな二人の喧嘩を、すずか自身が止める。

本来なら、その三人だけが友達になるはずが、ソレに一人の少年が介入したのだ。

有澤だ。

なのはとアリサが喧嘩しているのを、どうすれば良いのか困っているすずかにアドバイスをしたのが有澤なのだ。

それのお陰ですずかは二人を止めることに成功した。その後、有澤は何事もなかったかのように場から去った。

微々たる介入。

けど、少女達の心に有澤と言う人間が住みつくに十分だ。

何事にも興味を持たない有澤が、あの三人組の喧嘩に興味を持ち、解決の糸口を示したのだから。

気にならないわけがない。

それはオレも同じだ。

あの空気のような奴が三人組の喧嘩に介入した。その時点で、オレは有澤が転生者だろうと疑った。

本来なら、有澤ではなくオレが介入する予定だったからなおさらだ。タイミングが良過ぎるからだ。

でも確証はない。

この世界は確かに作品世界だ。けど、こうしてたくさんの人間が生活している。それぞれの人生を歩んでいる。

歴史も宗教も社会も、どれも前世に居た頃と変わらない。

現実リアルに近い虚構フィクション……。妙に現実っぽいからそれが原因で、決定された物語に予測不能な現象が起こったのかもしれない。

そう思うとオレは有澤を転生者だと確信できなかった。

だから観察することの有澤の正体を探ろうと決めたが、さすがに放課後以降ずっと観察はできない。

上位種から与えられた力を使いこなすための特訓をしなければいけないから。なので、学校にいる間は気付かれないように有澤を観察した。

しかしアイツを観察すればするほど、物語で言うところのモブキヤラのような人間にしか見えなかった。

けど、さっきの戦闘でオレの疑問は解消された。

アイツが力を使ったからだ。この世界の魔法ではなく、全く異質の作品能力。【金色のガッシュ！】の力を……。

これはもう完璧に黒だ。有澤は転生者。しかもなのはサイドに位置する転生者だ。

本来なら俺が両サイドの橋渡しをする予定だったが、向こうに有澤がいるからその予定もパーだ。

ま、フェイトに近づかなかったことだし、文句は言うまい。

さて、無印では敵対関係だがA'sのことを考えると、有澤とこのまま敵対関係のまま居るのは少々面倒だ。

今の内に、今後のことについてアイツと話し合っとくか……。

それに、アイツの目的も知っておく必要がある。

ふと、今何時か気になり携帯の時計を見る。  
もう二時か……。

この世界でのオレの両親は共働きだ。父親は優秀な商社マンで、外国で単身赴任中だ。母親は大きな服飾関係の会社を経営しているせいか、仕事が終わるのが遅く、大体四時には帰ってくる。

そしてこの連休でも仕事を優先する両親。両者共々重度の仕事中毒だ。<sup>ワーカホリ</sup>

たくつ、オレだったらまだ良かったものの、普通の子供なら寂しさで耐えられないぞ。

まあオレが他の子供より精神が早熟しており、聞きわけの良い子供を演じているせいで、こうなったのだけどさ……。少しは自重しようよう……。

ま、そのお陰でオレが夜遅くに家に出られるから結果オーライと思つところ。

でもそろそろ帰らないと。母親は帰ってくる度に、寝ているオレを見にくる。

オレが居ないと分かるときつと大騒ぎになってしまい、今日みたいに夜遅くに家に出られなくなるかも知れない。

オレは携帯をポケットにしまい、ソファから立ち上がって浴室に居るフェイト達に一声かける。

「フェイト……。聞こえる？」

「えっ、ユウヤ？ ど、どうしたの……」

なんか慌てた声が聞こえたが、まあいいや。用件だけ伝えよ。

「もう遅いから今日は帰るな。また明日」

「う、うん。また……」

「じゃあね」

浴室を後にして、オレは部屋から出ていく。

マンションから出て数歩歩くだけで視界は真っ暗になる。帰り道には電燈がポツンと間隔を開けながら点在しているだけだった。

出来るだけ大人に見つからないよう、早く家に帰ろう。



補導されると困るし。

そう思いながら歩幅を早める。

『裕也。左方100mに魔力反応感知』

右手に付けてる腕輪から突然、淡々とした男の声が聞こえてきた。  
オレのデバイスであるトワイライトナイト黄昏の騎士の声だ。

どうやらセンサーに感知した情報をオレに報告したようだ。

魔力反応？　こんな場所ですか？

「ん？　ジュエルシードか？」

まあ、原作では描写されてないだけで、案外そこら辺にジュエルシードが落ちている可能性はあるかも知れない。

しかしそんな俺の推測をナイトは否定した。

『違う。魔力値からして人間だと思う。徐々にこちらに接近してる』  
淡々とした物言いの所為で、緊急時なのにいささか緊張感がかける。まあ、そういう風に設定したのはオレだから、文句を言っても

仕方がない。

「相手の数は？」

『一人。だが気をつけろ。膨大な魔力を持っている』

「膨大？　となるとAAA～Sランクの魔導士か。……管理局か？」  
いや、それはまだないはずだ。管理局がこっちに来る場合、数日後に起こる次元震が必要だ。それが無い限り、管理局がこの世界に来るはずがない。

「となると、オレら側の人間か……」

転生者……。

一体オレになんの用だ？

ふと、有澤の顔を思い出す。

まさか、さっきの戦いの続きに来たのか？

やれやれと肩を竦めながら、オレはナイトにバリアジャケット防護服の展開を命じる。

一瞬だけ体が光ると、オレの体には着なれた赤い騎士服が装着された。

「ナイト、Sモード」

そう命じるとナイトは腕輪からSモードの见えない武器に展開される。オレはそれを握り締め、ミッド式の飛行魔法を使って接近中の奴に近づく。

ほどなくして、オレと奴が対峙する。

……誰だ、コイツ？

ソイツの服装——いや防護服は、一言で言えば西洋と中華のコラボレーションみたいな格好だった。

拳法着の上にハリポタに出て来るローブを羽織っていて、フードを被っていて顔を隠していた。

とりあえず有澤ではないな。

だとしたら新手の転生者か。面倒だな……。

「で、アンタ誰だ？ オレになんか用？」

対峙してから一言も喋らないソイツに、オレは半ば投げやりな口調で尋ねた。

「あなた……イレギュラーか？」

イレギュラー？ 聞きなれない言葉だな。まあ、大方意味は分かるからいいか。

「まあそうだけど。で、なんの用があってオレのどこに来やがったんだ？」

早く終わんねえかな……。

「あなたの目的を尋ねに来たの」

「目的？」

そんなの訊いてどうすんだ？

「ええ。さっき、海鳴温泉の方向からこの世界の魔法とは違う能力を二つ感じたから、事情を訊きに来たの」

どこの管理局の人だよ……。やっていることが大差ねえぞ……。

「ああ？ てめえも転生者なら、海鳴温泉だけで理解出来るだろ？」  
無印第五話でなのはとフェイトの初戦闘。そしてなのはが完敗する話だ。

「……そう。少なくともあなたは原作を知っているようね」

ん？ その言い方だと、転生者の中に原作を知らない奴が居る言い方だな。

「……話を戻すぜ。アンタ、オレの目的を知りたいようだが、それを知ってどうする気だ？」

ま、大方介入したいからそちらの陣営に混ぜて欲しいとか、そんなところだろ。

そう思っていたら、オレの予想とは真逆のことをソイツは言い出した。

「目的の内容次第であなを悪性のイレギュラーと判断し、殺すつもりよ」

「……っ！ 穏やかじゃねえな……。殺すだと？ しかも悪性だとは酷い言われようだ」

「別に、まだあなたを悪性だとは判断してないわ。内容次第で、善性だと判断もできるわ」

なんだ、その上から目線の物言いは……。なんか腹が立ってきたな。

「何様のつもりだ。なんの権利があつて、てめえにそんなこと決めつけられんといけねーんだよ」

「権利なら、私達イレギュラー全員にあるわよ。私達のような異質な存在の生殺与奪権は……」

なんだその理屈。わけ分からん。まだ管理局の正義の方が分かりやすい。

「あなたも知ってるわよね。この世界が【なのは】の世界だってことを」

「当たり前だろ」

前世で死んですぐに上位種とか言う正体不明の奴に、この世界に転生させられたんだから。

「なら話は簡単よ。私達は本来この世界には居ちゃいけない存在。つまりイレギュラーってわけ」

ああ、イレギュラーってそういうことね。くだらん。まんますぎて笑えるわ。もう少しひねろ。

「それがどうした。そもそもこの世界は【なのは】をベースに作られた世界だろ？ だったら世界は原作通り進むはずだ。そこに、オレらみたいなのが居ても居なくても関係ない。そういう風に世界が決めてんだから」

さっきみたいになのはサイドに有澤が居ても、結局なのはが負けると言う力が働いたのが証拠だ。

つまり、この世界が《あの時のなのはは負ける運命》だと決めていることになる。

「ええ、そうね。その通りよ。私達がなにかした所で、原作の強制力がこの世界に働きかけて、過程がどうなろうと結果は同じになる。でもね、それも絶対とは言えないのよ」

「……どう言う意味だ？」

ソイツの意味深な言い方に、オレは興味を覚えた。

「さっき海鳴温泉の方から、二つの能力を感じたって言ったわよね。それってつまり、あなたともう一人のイレギュラーが、なのはとフェイトについていたってことになるわ。そこんとこどうなの？」

「アンタの言う通りだけど、それが今の話とどう繋がんだよ」

「もしも、あなたがなのはサイドに付いていて、フェイトサイドに転生者がいなかったらどうなる？」

「そりゃ、二対一になってフェイトサイドが不利……っ！」

「分かったみたいね」

ソイツの言葉に、オレは頷かずにはいられなかった。

もしソイツの言う通りことが運べば、勝つのは当然オレ達だ。なのは相手なら同じ魔法でも経験の差でどうとでもなるが、オレの場合別作品の能力を持っている。

つまりそれは未知数の力を持つ相手と戦うってことだ。

しかもオレはその力をほぼ使いこなすことができるから、無印のフェイトなら余裕で倒せるはずだ。そして負けたフェイトはなのは

からジュエルシードを手に入れることはできない。

そう言ったifができあがってしまい、原作通りにはいなくなる。

「けど、例えそうだったとしても、オレは一对一には手を出さないぞ！」

「それはあなたの価値観よ。他のイレギュラーは違うわ」

オレの否定を一蹴する。

確かに、コイツの言う通りだ。例え今回のifが成立したとしても、それは微々たる歪み。原作の強制力が働けばどうということはない。

けどそれが、徐々に増え続ければどうなる？　そしてオレの最終目標を実行したらどうなる？

歪みが大きくなって、ソレはもうオレの知っている【なのは】じゃなくなる。

原作知識など全く意味が為さない。そうすると、常に真っ暗な道を永遠と歩かされることになる。

「……………っ！」

オレの苦渋に満たされた顔を見て、ソイツは言った。

「分かったみたいね。私達イレギュラーがどれだけこの世界についての悪性かを……。でもね、中にはそれを知っててそうする輩が居るの……。さて、話を元に戻して、あなたの目的を教えなさい。そして判断するわ。この世界にとってあなたが善性か悪性かを……」

「……オレは」

オレの目的は、ただ一つ。フェイトの幸福だけだ。

前世の頃、リアルタイムで無印の【なのは】を観てオレは思った。どうしてフェイトだけが、こんなにも痛みを背負わなければならぬのか。

クローンとして生まれ、プレシアから道具として扱われ、唯一親身になってくれたリリスは消え、虐待されながらもプレシアの言いつけを守り、最終的には捨てられる。

その事実を九歳児が受け止めるには、あまりにも重い。そして痛いはずだ。

例え、なのはやハラOWN一家がその痛みを癒そうとしても、傷口が塞がるだけで、中身は今もきつと痛みを抱えているに違いない。なのはやはやてにも、痛みを抱えているのは分かっている。けど、フェイトの痛みはそれ以上のはずだ。

救いたい。

始めてオレは二次元に対してそう言う感情が芽生えた。

だが所詮は二次元。創作の世界だ。

どうしたって、オレの想いは届かない。

それが現実なのだから。そう思って諦めていた。

けど、オレは死んでその想いを達成できると知った。

上位種に選ばれ、力を手に入れ、【なのは】の世界に転生できることに喜んだ。

これでフェイトを幸せにできる。

その為に、オレはこの能力を選んだのだから……。

でもオレがそうすれば、この世界は歪み、原作と言う安定が壊れてしまう。

そうだったら……！

どうすればいいんだ！ フェイトの幸せか、【なのは】の安定か。

どっちを選べば……！

《すみません、それを私に渡してくれませんか？》

ふと、脳裏に始めてジュエルシードを拾い、すぐに現れたフェイトの姿を思い出す。

キラキラと輝く金髪、少し悲しみを含んだ紅い目。オレより若干背が高いが、それでも小さな体で一生懸命、プレシアの為に働くフェイトの姿が過る。

《え？ でも、あなたに迷惑が……》

次に過ったのは、オレが協力したいと頼み込んだ時の困惑したフェイトの顔。オレの力を見せてどうにか承諾を得た。

《美味しい……。ありがとうユウヤ》

さらに、始めてオレに笑顔を向けてくれた記憶が過る。

いつも冷凍食品でメシをすませるフェイトに、母親から教わった料理を作って食べさせた時、本当に嬉しそうだった。

出会って短い日々だが、一緒に行動してきたフェイトとの記憶が、脳裏にたくさん過る。

その度に、この娘を絶対に幸せにしてみせると思った。

……。ああ、そうだよな。

オレの目的はただ一つだ。

そのせいで、【なのは】の世界が変わろうとしても……。オレは構わない。

フェイトを幸せにする。それがオレの想いだ！

「オレの目的は、フェイト・テストロッサの幸せただ一つだ！その為なら、世界が原作から離れても構わないっ！」

オレは新たに誓った自分の偽りの無い気持ちを、目の前の転生者にぶつけた。

「……。あなた、分かっているの？ 原作から離れたら、あなたの好きな【なのは】じゃなくなるのよ」

「確かに【なのは】が好きなら、てめえの考えは間違っちゃいねー」

「なら……」と続くソイツの言葉に、オレの言葉を上乗せする。

「けどな、そもそもオレが好きなのは作品じゃなくて、キャラクターなんだよ！」

「っ！ そのキャラクターもっ、原作から離れたら全く別のモノになるのよ！ それがわからないのっ！？」

「知るか！ オレがこの世界に来たのはソレが目的で、願いなんだよ！ てめえがソレを邪魔するってんなら、容赦はしねえ」

オレはナイトを構えて、ソイツを睨みつけながら大声でオレの気持ち放了つた。

「五体満足で帰れると思うなよ……。！」

それを聞いたソイツはブツブツとなにかを呟くと、フードを脱ぎ

捨てる。

暗がりだが、それでも十分分かるほど整った顔つきだ。正直可愛いけど、どこか中性的な顔立ちで、男でも女でも通用する。

一瞬、悲しみを含んだ目が見えた気がした。確かめようにも目を瞑ったせいで、確かめられなかった。

気のせいかな？

そう思うと同時にゆっくりと瞼が開いた。

その目には、先程見えた悲しみはなく、純粋な敵意を含んだ目に変わってオレを見る。

「……わかったわ。あなたをこの世界の悪性と判断。あなたに対して思うあらゆる感情を一切合財捨て、ただ敵意と悪意と殺意を込めて――」

ソイツの左手の人差指が突然発光し、光が消えると左手には鐔のない野太刀を握っていた。

あの刀、どこかで覚えが……。

柄に結ばれている赤い房紐を見たらふいにそう思った。

「――あなたを殺します」

同時にソイツが突きの構えでオレに突撃してきた。

「っ！」

速い！

だが捉えきれない速さではなかった。オレは驚きながらもナイトでソイツの剣先を逸らし、ギリギリで躲す。

コイツ……かなりできる！

オレは躲した反動を利用して、ナイトを片手で振り上げてソイツに叩きつける。

ソイツは素早くオレの攻撃を察知して野太刀で防ぎ、今度はソイツが攻撃を仕掛ける。

ぶつかり合う剣と刀。

オレはソイツとの剣戟を何度か繰り返すことで、近接戦闘では埒が明かないと気づき、一旦距離をとる。



「逃がさない！ 百花繚乱！」

そう叫んで、野太刀からよく分からないモノが直線状でオレに向かって飛んできた。

「っ！」

ソレをナイトで叩いて消滅させる。

「今の攻撃……」

オレが持っていた漫画のどれかにあったはず……。うう、ココまで出て来てるのに思い出せない！

内心、やきもきする気持ちを隠しながらオレはソイツの方を向く。しかし、ソイツの姿はどこにもなかった。

「どこに……！」

さっきの攻撃で一瞬でも目を逸らしたのが失敗だった。

オレは暗闇の中、目を凝らしながらソイツの姿を探す。すると頭上からキラツとなにかが輝き、同時にバチバチつと音が鳴った。

咄嗟に上を見ると、そこには帯電している刀をオレ目掛けて振り下ろすソイツの姿があった。

「雷鳴剣！」

直線状の斬撃だ。アレだけなら防ぐことは可能だが、野太刀に纏っている電撃が厄介だ。

となるとアレを使うか！

「ナイト！ 宝具召喚！ アヴァロン 全て遠き理想郷を頭上に展開！」

ナイトに宝具の召喚を命じると、頭上に蒼を基調とした豪華な装飾を施された鞘が展開される。

刀と鞘が激突する。

「っ！？」

自分の攻撃が防がれ、更にオレにダメージがいつてないと分かる  
と、今度はソイツがオレから距離をとった。

困惑した表情で、自分の攻撃を受け止めた鞘を凝視する。

オレはナイトに命じて全て遠き理想郷を解除する。  
アヴァロン

百花繚乱に雷鳴剣……か。なるほど思い出したよ。

「てめえの力、【ネギま!】だろ？」

「そう言うあなたの力は【Fate】のようね。その見えない武器は、インレジブル・エプ風王結界を使っているみたいね」

見えない武器の正体を言い当てたソイツに、オレは少しばかり驚いた。

「へー、てめえも【Fate】を知ってるとはね」

「当たり前でしょ。有名な作品なんだから」

ふうん。なるほどね……。コイツ、前世はオレと同じオタクに違いないな。

ま、オタクじゃなきゃ【なのは】のことなんて知るわけねえか。

「しかしアンタ、なかなかやるな。良かったら名前教えてくれよ？」

「……森永香奈枝。あなたを殺す女の名前よ」

「香奈枝ね……。オレは中里裕也だ。てめえに殺されない男の名前だ」

「減らず口を……」

吐き捨てるように呟いて、正眼の構えをする香奈枝。

「なんとも。オレはオレの目的を達成するまで死ぬ気はねえからな」

オレはナイトを斜め上に振り上げて、構えになってない構えをする。

「あなたにその気がなくても、私はあなたを殺す。そう、覚悟したから……」

「あつそ。どうでもいいからとつとやって、終わらせようぜ。オレは母親が帰ってくる前に布団で良い子にして寝てないといけねえから」

「……そうね。あなたの言う通り。早くあなたを殺して私も帰って寝たいわ。夕風、他の連中に気付かれないよう結界をお願いね」

『任せろ』

香奈枝の命令に、野太刀から頼りがいのある男の声が返ってくる。すると香奈枝を起点に、周囲に緑色の結界が展開された。

気がきくな。コレなら、本気でやれるぜ。

「そんじゃやるか」

オレはニヤリと口だけ笑う。

「ええ、始めましょう」

香奈枝は剥き出しの敵意を込めた目でオレを見る。

「「殺し合いを！」」

その言葉が火蓋となり、オレと香奈枝の本格的な命を賭けた戦いが始まった。

## 無印編 四話目（後書き）

感想などはお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。。

## 無印編 五話目

高町とテストロッサの戦い。俺と中里の戦いから次の日。俺は一人、旅館の庭にある小さな池を見つめていた。

池には数匹の鯉が泳いでいて、俺が近くに立って居ると鯉が寄ってくる。たぶん餌をくれるのだと思ってるのだろう。

しかし、俺の手には鯉にあげる餌などない。いくら待っても餌が来ないので、鯉は俺から離れて行く。

「はあ……」

小さくため息をこぼす。

思い出すのは昨日の戦い。

昨日は完全に、俺の負けだった。

悔っていた。テストロッサの力。中里の力。

そして慢心していた。自分の力に……。

前回、森永との戦いから、自分は強くなったと思っていた。マリアの鍛練のお陰で上級術も扱えるようになった。

今なら相手が転生者だろうが、勝てなくても引きわけには持ち越せるはず。負けることはないと思っていた。

でも結果はどうだ。

敵の攻撃が見えず、対処も遅れ、ようやく活路を見いだせたと思ったら、守る対象が危険な状況になっていた。

守るために力をつけた筈なのに、それを生かしきれなかった。

もしテストロッサが本気だったら、高町は今頃……。

最悪の結果。それに伴い思い出してしまふ六年前のアレ。

「クソッ……！」

腹立たしい。力の無い自分が……。

あんなことにならない為に、今まで努力してきたのに……！

「健一君……？」

自分に苛立っているこの状況で、誰かに声をかけられた。誰なの

か確かめるため、俺は後ろを振り返る。

そこに居たのは高町と肩に乗っかっているフェレットだった。

「……なにか用か？」

口から出た言葉は酷く冷たい声音で、睨みつけるように高町を見る俺。

ビクッと高町の体が微かに動いた。まるで、得体の知れない奴と出会い、それに恐怖した時と似た反応だった。

明らかに機嫌が悪いと言っているような態度を、高町にしてしまったことに気付いた俺は、自分を殴りたくなった。

馬鹿か俺は！ 高町に八つ当たりなんかしてどうする！

俺は歯をきつく噛み締めながらも、自分を落ち着かせるために小さく深呼吸をした。

少しだけ落ち着くと、俺は高町に恐がらせてしまったことを謝った。

「悪い。さっきから機嫌が悪くて、言葉が選べなかった。ゴメン……」

「ううん。気にしてないよ」

謝って許してもらえたが、さっきので空気が悪くなったのは確かだ。

もし空気に色があったら、きっと濁った黒だろうな……。

そんな意味不明な妄想を浮かべながら、この空気をどうやって払拭しようか悩んでいると、高町が率先してこの空気を破壊してくれた。

「あ、あの。昨日はありがとう」

「え？」

高町の率直な感謝に俺は驚いた。

助けにきたはずが全く助けになれず、それ所か危険な目に合わせ、一歩間違えたら大変なことになったはずだ。

俺の弱さを詰るならまだしも、感謝されぬ言われは無いはずだ。

「どうしてだ？」

「ん？」

俺の問いにキョトンする高町。

「俺は、高町を助けられなかった。守れなかった。期待させるだけさせておいて結局守れず、高町を危険な目に合わせた。感謝される資格なんて、俺にはないよ」

視線を高町から地面に変え、俺は事実を告げた。高町の間違った解釈を正すために。

「それは違うよっ」

俺の言葉を真っ向から否定する高町。その表情には怒りと悲しみの両方が存在していた。

「あの時、健一君が居なかったら私、すぐに負けていた。なんの抵抗もできなくて、ただジュエルシードを持っていかれてた……。けど、健一君が私を守ってくれて、戦い方のアドバイスを教えてくれたから私、少しは戦えたと思うの」

最後に悔しそうに顔を歪めながら「結局負けちゃったけど……」と自嘲的に付けたす高町。

それを見て俺は、こんな顔を友達にさせてしまったことに対して更に落ち込む。

一体、俺の力ってなんなんだろう……。

最初は自衛のためだった。

自分の大事な平凡な生活を守るための。

そして今もそれは変わらない。平凡な生活を守るためならどんなことでもする覚悟だ。

けど現実はどうだ？ 平凡な生活の一つである大事な友達。その友達を助けることができなかった。

力があるうとも、覚悟があるうとも、生かせなかったらソレはただのゴミだ。

なんて無力なんだ……俺は！

森永も中里も俺と同じ転生者で、別作品の能力を所有している。状況は同じ。

なのにアイツらは、俺を圧倒する力を持っている。

俺とアイツら……一体なにが違うんだ……？

「あの……健一君。お願いが、あるの……」

自問自答をしているさなか、高町がなにやら決心した顔つきで俺に頼みごとがあると言いだした。

「え？ なに？」

「私を……健一君みたいに強くしてください！！」

自分の決心の強さを声の大きさとで証明する高町。突然の大声に俺はビクリしながら、先程の高町をお願いを脳内で反芻した。

強く？ 高町を？ 俺がか？

どうして俺に？

「えっと……理由を訊いても良いかな？」

頷く高町。

「健一君が、私よりも戦い方をよく知っていると思ったから。私んち、お父さんとお兄ちゃん。それとお姉ちゃんが剣術やっているから分かるんだ。そういうの……。だから私にもその方法を教えて欲しい。健一君みたいに強くなりたい。そう、思ったの。もう二度と、あんな悔しい思いはしたくないから……」

胸元にぶら下がっている赤い宝石を握り締め、高町は自分の弱さを認めた。そして今よりも強くなりたいと願っていることが痛いほど伝わってきた。

確かに高町が強くなりたい理由は理解できる。昨日のテストロッサとの戦いで負け、集めていた蒼い結晶体の一つを持って行かれたんだ。

それがどれだけ悔しかったのかは、俺には分からない。

高町の気持ちは、高町にしか分からないんだから。

けど、想像はできる。

例えば、俺が今痛感している無力を悔しいと思うのと、高町の悔しさはきつと似たり寄ったりだと思う。

となると、その悔しさが行き着く先には自ずと二つの道に別れる。



仕方がない。自分には力ない。そう自分を慰めながら諦めるか。  
まだ終わりじゃない。力がないなら今以上に努力して、力を付け  
れば良い。そう抗いながら自分を奮い立たせて諦めないかの二つだ。  
そして高町は諦めない道を選んだ。

今より強くなりたい。そう自分の心を奮い立たせながらジッと俺  
を見つめる高町。

なら俺は？

こうしていつまでもうじうじと悩みながら、俺は無力だと嘆き続  
け、徐々に諦めてしまうのか？

答えはNOだ！

友達を守りたい気持ちがあるなら、諦める理由がどこにある？  
強くなるんだ！

高町を……。友達を……。今の生活を守るために……！

俺は新たにそう決心すると、ジッと俺を見ながら答えを待ってい  
る高町に、同じように俺の決意を声の大きさと表した。

「うん！ 無理だー！！」

「え……………」

ポカンとする高町とフェレット。

さっきまでうじうじしてた自分を捨て、俺は活き活きとした気分  
で高町にその理由を話す。

「そもそも、俺の力は高町達が使っている力とは根本的に違うんだ  
よ」

「根本……？」

俺の理由に頭を傾げる高町。

「そう。まあ結界やら飛行なんかはそっちの力を使ってるけどな」  
「……あの、根本的に違うって、それじゃあなたの力は魔法じゃな  
いってことですか？」

高町の肩に乗っているフェレットが戸惑いながら言葉を発した。  
「うわっ、フェレットが喋った！」

さっすが、魔法がある世界だ。そーいや昨日の黒子の人も赤い犬

になってたな……。

俺は繁々<sup>しげしげ</sup>とフェレットを見入る。

しかし、こうして現実で喋る動物を見ると普通に気味が悪いな……。

「あ、すみません。驚かしてしまつて……」

「あ、いや。気にするな。えーっとユーノ、だっけ？」

昨日高町に名前を教えてもらったことを思い出す。

「あ、はい。ユーノ・スクライアです。スクライアは部族名ですからユーノでお願いします」

「OK、理解したぜ。俺は有澤健一。好きなように呼んでくれて良いぞ」

「はい。健一」

お互い自己紹介を交わすと、ユーノが先程の疑問をもう一度尋ねた。

「で、健一のその力って、魔法ではないんですよね？」

「ああ。一応、魔力はあるし、そっちの魔法も使おうと思えば使えるぞ」

「それじゃ、健一が使った力って一体……」

ユーノが俺の力に興味があるようだけど、流石に全部話したら信じられないだろうし……適当に言っとくか。

「うーん。俺もよくわっかんねーんだよな。気付いたら使えてたし、このデバイスも母さんの実家の倉庫で見つけたからな……。悪いな。詳しいこと言えなくて」

一応、マリアは母親から貰ったんだから、全部嘘じゃない。はずだ……。

「そう、ですか……」

ユーノはなにか思案顔で頷き、ブツブツと呟き始めた。

どーでもいいけど、フェレットの思案顔ってこんな風になるんだ。写メ写メ……あ、携帯持ってねーや。

「それで健一君。どうして無理なの？」

俺達の話が一段落つくと、高町が詳しい説明を求めてきた。

「ん？ だから、俺の力と高町の魔法は全く違うモノなの。それは理解出来るか？」

「う、うん……。昨日、私を助けてくれたバリアが、なんとなく私やユーノ君が使う魔法とは違うのは分かるよ」

「そう。俺の戦い方は基本この力を前提にして戦ってたんだ。昨日の高町やテストロッサのような魔法戦は俺にはできない」

対抗はできるがソレを俺が実行するのは無理。せいぜい結界と飛行が限界だ。それもマリアが全部してくれるので、俺一人じゃ使用不能だ。

それは高町にも言えることで、俺の力に対抗できることは可能だ。だが、俺の戦い方を教えろと言うことは、高町が俺の力を使うことが前提となるから不可能だ。

この力は【金色のガッシュ！】の力で、あのクソKYから貰ったモノだから。

「つまり、高町が俺の戦い方をしたいんなら、俺の力を使えるようにならないといけないからな」

「だから無理なの？」

「そういうこと。ま、魔法戦とかはユーノとかに教えてもらえ。向こうの方が詳しいはずだし」

なにせ高町が魔法少女になる切っ掛けを与えたんだ。それで魔法が知らないって言ったら驚くぞ。

「う、うん」

分かりやすくしよげる高町。もしかして、このお願いの為に俺の所に来たのか？

だったら悪いことしちゃったな。

「……ん。魔法関係のことは無理だけど、俺と模擬戦とかすれば対人戦闘自体に馴れるくらいはできると思うから……。それでいいならやるけど？」

頭をポリポリと？きながら俺は高町にそう言う。すると、高町は

パアアと花が咲いたようにしよげていた顔が元気になって大きく頷いた。

「うん。うん！ それでいいよ！ ありがとう、健一君！」

嬉しそうに微笑む高町。それを見ると俺も嬉しくなってきた。

昨日は落ち込んでいた高町に、なにもできない自分の無力さを嘆いた。でも今は俺の言葉で笑顔になってくれた。

それが嬉しくてしょうがなかった。自分はまだ無力じゃないってことは教えてくれたみたいで。

俺はその嬉しさを噛みしめながら、高町の頭に手を置いた。

「ふえ？」

「高町。もう二度と、お前に悔しい思いや悲しい思いなどさせない。俺が……強くして見せるから」

もう二度と、失わない為にも……。

「う、うん……」

突然自分の頭に手を置かれたことに驚き、戸惑いながらも高町は頷いた。

それを見て、俺は微笑を浮かべながら高町の頭から手を離す。

「さて……そんじゃ高町達の今の状況とか教えてくれるか？ 昨日は色々あって詳しい説明とかなかったし」

「う、うん」

頷く高町。そして話す。結晶体の発掘。他世界。魔法との出会い。結晶体を集める理由。昨日の件。高町とユーノが交互に説明してくれた。

「なるほどね……」

一通りの説明を聞いた俺は小さくそう呟いて頷く。

大まかな事情は前から知っていたが、こうして細部を詳しく聞くとそんな経緯があったのかと納得する。

ジュエルシード。願いが叶う宝石。21個集めるとどんな願いでも叶うね……。どこのドラゴンボールですかって言いたいよ。

しかもピンポイントで海鳴市に散らばるってどうよ？ 普通、世

界各国に散らばるもんだろ？

いくらココが【なのは】の世界を元にしたって言ってもできすぎだ。……コレが中里の言っていた原作通りって奴なのか？

「しかし、いくら緊急事態だからって、九歳の子供にそんな危険物の回収を頼むか？ 普通」

そう言うと、ユーノが顔を俯いて俺の言葉に同意した。

「うん。健一の言う通り。僕がもっとしっかりしとけば……」

「ユーノ君。それはもう良いの。私が自分で決めたことなんだから」  
「でも、僕がジュエルシードを発掘さえしなければ、この世界に迷惑をかけることも、なのはを巻き込んでしまうこともなかったのに……」

あらら、なんか負のスパイラルに入り込んでしまったよ。責任感が強いのは良いことだけど、それが仇になって自分を追い込むタイプだな……。

めんどくさい奴だ。

「気にするなどは言わないが、起こったモノをいつまでも引っ張るな。なっちまったもんは仕方がない。問題はそれをどう対処するかだ」

「はい……。そう、ですね」

沈んだ声で肯定するユーノ。まだ完全には吹っ切れないようだな。そこんところは時間が解決すればいいが……ん？ 待てよ。

ユーノの説明を聞いて、俺は一つ引っかかりを覚えた。

「……なあユーノ。お前たちの世界にはさ、こう言った事態の対処をする組織とかねえのか？」

多数の世界があるんならそう言った組織があってもおかしくないはずだ。そう思い、俺はユーノに訊いた。

「はい。あります」

「そいつらには頼んだりしたのか？」

こう言った事態の専門組織があるなら、普通はそこに任せるのが一番だと思う。なにゆえユーノは一人で地球にきたんだ？

「はい。僕がこっちの世界に来る前に連絡はしましたが、なにぶん向こうも組織で動いています。それに、この世界は管理外となっていますから、簡単に捜査もできません。確実のある証拠か、よっぽどの危険性がないかぎりには人員を避けられないんです。出来るとしてもこの世界の近辺を哨戒するくらいでしょう」

なるほどね。組織特有のしがらみってやつか……。ま、仕方ないよな。こっちでも治外法権とかなんとかで、日本で罪を犯した奴が他国を隠れ蓑に使うと、逮捕するのも一苦労するらしいし。

特に他国じゃその犯罪者が有益だった場合、ぜってー逮捕させないように妨害とかするそうさ。聞いた話だから本当かどうかは知らないけどな。

まあなにが言いたいっていうと、蓋を開けてみればどこの世界も似たようなモンだってことだ。

「一応、危険物ですから、その組織に先行調査と魔法使用の許可をもらって、一人でココに来ました」

子供にそんな許可とかやんなよ……。アホの集まりですか？

っーかコイツもコイツで、どうして一人でやろうと思ったんだ？

無謀な馬鹿じゃないか。

「へー、そうだったんだ」

高町がコクコクと感心したように頷く。

おいコラ。知らないで協力してたのかよ。まあ九歳児だからそこまで深く考えないか……。

俺は心中で小さなため息を吐いた。

「まあいい。事情は分かった。そう言った専門の組織が来るには、なにかしらの証拠か危険性を訴えないとダメってことね」

「はい」

けど現にこうして証拠はある。それでもその組織が地球に来ないってことは、危険性も証明しないといけないのか……。

けどソレを証明する為に、わざわざ危険な目に合うのも馬鹿らしい……。

「……となると、俺達で全部回収しないといけないか……」

そんな俺の呟きに、高町が不思議そうに言った。

「え？ 健一君もジュエルシード集め手伝ってくれるの？」

「おいおい、ココまで来て俺は除け者かよ……」

「そ、そんなじゃないよつ。ただ、健一君を危険な目に合わせるのが……」

うーん。なんつーか、高町とユーノって似てるな。他人に迷惑をかけるのが嫌なことか。変な所で責任感が強い所とか……。

両肩を竦めながら俺は高町に言う。

「それは俺にも言えることだ。友達が危険な目に合っているのを黙ってられるわけねーだろ。俺も手伝うよ」

「うーん」

それでもまだ納得しかねる高町。しょうがないだったら……。

「そんなら、戦い方を教える件は白紙ってことで……」

「ええっ、それは困るよ」

「だったら、俺が手伝うのを納得しろよ。そうしたら約束通り教えてやる」

「うう……脅迫だよ」

失礼な。正当なる取引だ。若干強引だけど。

「なのは。健一の協力は僕も賛成だよ」

ココで意外な奴から援護をもらった。ユーノも高町と同じ気持ちだと思ってたから驚きだ。

「うう……ユーノ君まで……」

恨めしそうに唸る高町。

「僕もこれ以上、他の人に迷惑はかけたくないよ。でも、昨日の連中が居る限り、こっちもそれなりの人数は必要だ。なのは一人じゃ大変だし」

ほう、悩むだけの奴かと思えば、意外と冷静な判断もできるじゃないか。こりゃ、ユーノの評価を改めないといけないな。

無謀な馬鹿から冷静な馬鹿に。……あんま変わんねーな。

「うん。そうだね……。悔しいけど、私達だけじゃフェイトちゃん達とお話することもできないし……。健一君、お願いできるかな？」

「勿論。ちゃんと戦い方も教えてやるよ」

「ありがとう」

子供特有の可愛らしい笑顔で俺に礼を言う。

コレで俺も本格的に物語に介入することになっちまったな。

森永に会ったらどうしよう。絶対狩られるぞ……。俺。

まあ、返り討ちにすればいいだけの話だけだね。

「なのはー。やっと見つけた！」

「健一君も一緒だったんだね」

そんなことを思っていると、旅館からバニングスと月村がやってきた。

「アリサちゃん。すずかちゃん」

「もう！ 探したわよ」

急いでるようだけど……。緊急事態でも起きたのか？

「一体どうしたんだ？」

「朝食準備ができてから呼びに来たの」

ああ……。なるほど。そりゃ確かに緊急事態だわ。

「にゃ！ そうだった！ すっかり忘れてたよ」

そいや俺も忘れてたぜ。

「ほら、とっとと部屋に戻って食べましょう」

「健一君も戻らないとご飯食べそこねるよ」

「だな」

「それじゃ、健一君。またあとでね」

そう言って三娘は旅館の方に戻って行った。

残ったのは俺と池の鯉達。

……。俺も飯食いに戻るか。

温泉旅行から帰って翌日。俺は約束通り、高町と模擬戦を行う。



と言っても俺と高町じゃ力の差がありすぎるので、ちょっとしたゲーム形式に変えた。

内容は、テッドの術で強化したスピードを高町が捉えられるかどうかだ。

実際問題、現状でテストロッサに対抗するには、あのスピードを捉えるしか術は無い。

他にも色々が必要だが、とりあえず最重要課題はコレだと思う。と言うことで、最初は第一の術で強化したスピードを高町に見せる。

それを早い段階で捉えることに成功する高町。

続いて第二の術も時間は掛ったが、コレも早い段階で捉えるようになった。

そして第三の術は、完全には無理だがわずかに捉えられるようになる。

ココまで来ると意外を通り越して驚き、それを更に越えて脅威だった。

前に高町が言ってたが、昔から家族の剣術の稽古を見ていたせい、相手の動きを捉えるのが上手いみたいだ。そして少なからず、高町にも戦う才能があるみたいだ。

血筋か？ ……羨ましい限りだ。

にしても、温泉旅行から帰ってからどこか高町の様子がおかしい。やっぱ、テストロッサのことが気になってんのかな？ こればかりは、俺にはどうにもできない。

どうしたものかと高町の様子を見て不安を覚える俺。

そんなこんなで連休明け、学校に来てまず確認するのは隣の席。中里裕也だ。

アイツが本当に俺のクラスメイトなのか確認するためだ。

俺は自分の席の隣に座っている奴を見る。

「っ……………！」

そこには確かに中里が居た。どうやら他の男子と話しているよう

だ。

俺は中里を警戒しながら自分の席に座る。

「……………」

一瞬中里と目が合ったが、それだけで男子と話すのを続ける。  
どうやらココでやり合う気はないようだ。

「ふう」

俺は小さく安堵のため息を吐く。

中里のことは高町には教えていない。

ただでさえテストロッサのことで頭が一杯なのに、ココでクラス  
メイトが敵対していると知ったら心労で倒れてしまうかもしれん。  
だからこのことは、俺の心に留めておくことにしたのだ。

それに中里は転生者だ。同じ転生者である俺がどうにかしないと  
いけない問題だ。

「おい」

「っ！」

突然、耳元で中里が俺に声をかけてきた。

「話がある。昼休み中庭に來い」

それだけ言って、中里は腕を枕にして机にうつ伏せになって眠り  
始めた。

一体なんの話があるって言うんだ……。

あー、ちくしょう！ この間の戦闘でまだ体の調子が治らん！  
歩きづらいたらありやしない！

オレは左足に感じる違和感を我慢しながら中庭に向かう。  
にしても森永香奈枝。思った以上に強かったな。

まさか殺されるとは思わなかった。

そのあともガチでやったけど、肩貫かれたり左足を斬り落とされ  
たときはマジでビックリしたぜ。どんだけ強いんだっつーのアイツ！  
どうにか隙を突いて逃げることに成功したが、あのままだりあつ

てたら本気で殺されるとこだった……。

怪我は全て遠き理想郷で肩と左足は治したが、左足はまだ違和感が残る。それも夕方にはなくなるからもう少しの辛抱だ。

にしても、やっぱ今使える宝具やスキルだけじゃダメだな。他にも増やさないと。

とりあえずエミヤの投影魔術とクー・フリーンの宝具の二つは完全に使えないかな……。

さすがに全て遠き理想郷を常時展開しとくのは無理だからなあ。  
アレかなり魔力食うし……。

まあ、逃げる前に香奈枝にも深手を負わせたんだ。そうすぐには復活できんだろ。

などと、今後の香奈枝との戦いを考えていたら、中庭に辿り着き、数分後に有澤がやってきた。

「よう。連休は楽しめたか？」

「……別に。用件はなんだ？」

あらら。連れない返事なこと。

「まあ、そんなにつんけんすんなよ。お互い原作介入者同士、仲良くしよーぜ」

「知るか」

うわお。嫌われてんなあオレ。

「ふう……やれやれ。まあ話つてのは、今後のことだよ」

「今後？」

「そう。お前も知つての通り、無印ではなのはとフェイトは敵対関係だが最終的には味方になるんだ。確かにこの間はやり合ったけど、それも原作通りにしないといけないって言う措置なんだから悪く思わないでくれ」

「……味方？　どう言う意味だ」

有澤の疑問にオレは違和感を覚えた。

アレ？　話を通じてない。……もしかしてコイツ、原作を知らないのか？

そいや、香奈枝との会話にも原作を知らない奴が居るのを仄めかしてたな。もしかしてソレがコイツなのか？

「お前、原作知らないの？」

「ああ」

肯定する有澤。

おおい。マジかよ……。

ん？ それじゃコイツ、知識皆無でなのは達と友達になったのか？  
どこのエロゲ主人公だよ……。

「えっと……そんなじゃ、これからの展開も知らないってことだよな？」

無言で頷く有澤。

「ああ……。うーん。どうしよっかなあ……」

あー、めんどくせえ。もういいや。普通にオレの目的伝えて邪魔しないように言っとこう。

「いいか。有澤。オレには目的がある」

「目的？」

「そうだ。フェイト・テスタロッサ。オレと一緒に居た女の子だ」

「アイツがどうした？」

「オレはあの子を幸せにするのが目的なんだ。その為に一緒に行動してる」

そう言うのと、有澤は一瞬驚くが、すぐに不機嫌顔に変わった。

「……へえー、そりやずいぶんと身勝手な目的だな」

その一言に、オレはムカついた。

なにも知らない奴が言うじゃねえか。

オレは有澤に近づき胸倉を掴む。

「身勝手で悪りいか。フェイトがどんな痛みを抱えているのか知らねーやつが、分かった口を叩くなっ」

睨みながら語気を強めにして、オレは有澤にそう吐き捨てる。

「はんっ。そんなの知るか。こっちは大事な友達が危険な目に合ってたんだ。そっちの事情なんてどうでもいい。それに……」

ギロリと有澤の殺意を込めた目がオレを射る。

「ソイツだけが特別だと思うな。痛みなんてモンは誰だって抱えてんだよ。問題は、その痛みとどう向き合うかだ。テストロッサの幸せえ？ それは本人が決めることだ。お前が決めていいモノじゃねえ」

それこそ知るかだ。誰かを幸せにしたいと言う気持ちは誰だって持つてる。オレにとってそれがフェイトなんだ。

「……どうやら、お前とは馬が合わねえようだな」

「それはこっちのセリフだ。原作忠実やら、幸せにしたいやらとか言う輩と仲良くする義理はねえ」

「ほう。じゃあてめえはどうしてなのとは一緒に居るんだ？」

「決まってるだろ。友達だからだ。友達が危険な目に合ってるのを黙って見過ごせるか」

オイオイ。なんだよその理由は。

「それって、てめえの言う身勝手じゃねえのかよ？」

「例えそうだとしても、お前の傲慢な目的よりかは数億倍マシだ」  
言うにこと書いて傲慢だと……！

「ざけんな。訂正しろ」

「やだね。テストロッサを幸せにするってことは、ソイツにとっての幸せな人生をお前が勝手に決めるってことだ。傲慢以外のなにがある？」

「てめ——」 「俺はなあ！」

オレが言い返そうとするが、有澤が先にオレの言葉を被せやがった。

「この世界を夢だと思っている奴が大っ嫌いなんだよ。マジでこの世界で生きてる奴に失礼だからな」

その言葉にオレは疑問を覚える。

「夢？ どう言う意味だ？」

「それくらい、自分で考えろ」

有澤はそう吐き捨てると、胸倉を掴んでいるオレの腕を強引に外

し、そのまま背を向けた。話は終わったと言いたげな態度だ。

「……おいっ」

オレの制止に有澤は止まる。

「てめえの目的はなんだよ」

なのはの傍に居るのは友達だからとか言ってるが、それはコイツの理由であって目的じゃないはずだ。

ココまでオレに啖呵が切れるんだ。有澤はこの世界を、どんな目的を持って行動してるのか、それが知りたいと思った。

「……平凡な生活だ」

「……………は？」

オイオイ。なんだよそれ。なんのジョークだ？

「それを、壊そうってんなら……」

首だけ振り返る有澤。その目はさっきとは比べ物にならない殺気を孕んでオレを睨む。

それを見て、ジョークだと思ったオレの考えは一蹴された。

コイツは、本気でそう言っている。

「誰だろうと、容赦はしない……！　それが、お前ら転生者だろうが、登場人物だろうがな……っ！」

そう言って、有澤は今度こそオレの前から去っていた。

平凡な生活。それが有澤の目的。

……そのどこに、オレらと戦う理由やなのはを助ける理由に繋がんだ？

それがアイツの目的なら、普通に考えるとアイツに手を出そうと思う転生者は居ないはずだ。……一人を覗いては。

一体どうして、有澤は原作に介入しようと思ったんだ。

分かんねえ。

唯一分かると言えば、有澤とオレは完全に敵対関係になっちまったってこと。そして、アイツは目的の為なら登場人物だろうが殺すつもりなこと。

下手したら介入どころか破壊になっちまう。

……いや、オレの目的もある意味破壊になるな。

香奈枝みたいに原作忠実とかはどうでもいいが、無印ラストまでは原作通り進んでもらわないと困る。

そうしないと、フェイトを幸せにすることができないから……。

《へー、そりやすいぶんと身勝手な目的だな》

「っ！」

例え身勝手だろうが、ソレがオレの目的だ。香奈枝との戦いでそう誓ったんだ。

いまさら、変える気はねえよ。

変えて、たまるか……！

「いい加減にしなさいよ！」

中里の呼び出しから教室に戻るなり、バニングスの怒声が聞こえた。

なんだ？

「こないだっからなに話しても上の空でボーっとして！」

ドアを開けてみると、高町の周りにバニングスと月村が居た。

「あ……ごめんね。アリサちゃん」

「ごめんじゃない！ 私達と話してんのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！ いくよすずか」

そう言うバニングスはそのまま教室から出て行った。

ドアの前で立っている俺と目が合うが、そのまま通り過ぎて行く。なんだ？

「アリサちゃん……」

「いいよすずかちゃん。今のは、なのはが悪かったから……」

「そんなことないと思うけど、とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね」

そう高町に断って、月村はバニングスを追いかけて行った。またもや俺と目が合うが、そのまま通り過ぎる。

え？ 月村まで俺をスルー？ なんか悲しい……。

そんなことを思いながら、俺はなにがあったのか高町に訊いた。

「どした？ 喧嘩？」

「ううん。違うよ。私が悪いんだ……」

心成しか声のトーンが低いようだが、気のせいではないだろ。

やっぱり、テストロッサのことも考えてんのかねえ？

うーん。こう言う時、なんて言えりゃいいんだろう？

「……ねえ、健一君」

励ましの言葉でかけようかと悩んでいると、高町が先に声をかけてきた。

「ん？」

「……次、フェイトちゃんに会えたら。ちゃんとお話しできるかな？ 自分の気持ち、ちゃんと伝えられるかな？」

「……………」

正直、どうしてそこまでテストロッサのことを考えるのか俺には分からない。

単純に、ジュエルシードを取り合う敵だと思えば楽なのに……。

いや、高町はたぶん、そんな単純に物事を決めることが出来ないんだ。

相手の気持ち。理由。そう言うのをちゃんと知って、話し合って解決したいんだろう。

でも、相手は話すことを放棄して、高町と戦うことを選んだ。

高町は、そう言った戦うことで解決するのが嫌なんだろう。きっと。

「目的がある同士、ぶつかりあうのは仕方ないかもしれない。だけど知りたいんだ……」

だからこうして悩んでいるんだ。

真剣に、テストロッサのことを考えて……。

優しい子だ。

この子はきつと、戦いには向いていない。それでも、目の前の問



題から目を逸らさずにいる。

そんなことを思いながら、俺は高町の頭をポンツと手を置く。

「伝わるさ。きつと……」

真剣に相手のことを考えているんだ。最初は無理でも、いつかきつと高町の想いは伝わるはずだ。

「……うん」

小さく俺の言葉に頷く高町。

中里は言った。この先、高町とテストロッサは味方同士になると。ソレを思い出すと、腹が煮えたぎるほどムカついてきた。

こんなにも真剣になって、どうしたらテストロッサと分かりあえるか考えている高町に、大丈夫だ。分かってくれる。

そう、簡単に言えるアイツの言葉が、高町を馬鹿にしているように聞える。

そりゃ、お前は原作を知っているから、そう言えるかも知れないが。

けどこうして悩んでいる高町にはそれが分からない。

だから不安に思ってる。怖いと思ってる。

自分の気持ちだが、拒絶されるかもしれないと考えてしまうから。

それを、アイツは決定された未来だと言って終わらせる。

それじゃまるで、いま悩んでいる高町が馬鹿みたいじゃないか！

生きている限り、誰だって自分の将来のことやこれからの人間関係。その他のことを悩むのは当たり前だ。

そして悩んだ結果、どういう道を選ぶのは本人次第。

それを決定された未来だと、簡単に決めていいはずがない。

だから俺と中里裕也が仲間になるのはありえない。

アイツが、この世界を夢だと思っている限りは一生……。

授業が終わり、放課後。オレはいつも通りフェイトの住むマンションに向かった。

「やはー、上がるぜ」

「ユウヤー。いらっしやーい」

リビングに行くところアルフが人型で飯を食っていた。

なにを食っているのかと思って見ると、テーブルにはドックフー  
ドの箱が散乱していた。

「……………」

何度か見るけど、やっぱりシュールな光景だよな。人がドックフー  
ドを食っている姿なんて。

まあアルフは元が狼だから仕方ないんだけどな。

「美味しいか？」

「んー。こっちの世界の食事も中々悪くないね」

まあ口に合うなら良いんだけどな。

「…………うちのお姫様は？」

「ベッドで休んでるよ」

フェイトの様子を見に行ってみる。その後にアルフがドックフー  
ドの箱を持って着いて来る。

ベッドで寝ているフェイトは既にバリアジャケット防護服を着ていた。

「よう。調子はどうだ？」

「ユウヤ……。いらっしやい」

チラリと近くに置かれている食器を見る。皿の上にはだいぶ飯が  
残っていた。

「ああ！ また食べてない。ダメだよ。食べなきゃ」

食器を見て心配するように言うアルフ。

「少しだけ食べたよ。大丈夫」

そう言ってみくりと起き上がる。

「そろそろ行こうか。次のジュエルシードのおおまかな位置も特定  
できてるし、あんまり、母さんを待たせたくない」

母さん——プレシア・テストロッサ。フェイトの母親でありなが  
ら、それを放棄した女。

これから一生抱えるであろうフェイトの痛みの元凶。

オレはプレシアを許せない。

アリシアを生き返らせようとする事態は構わない。誰だって大切な人が死んだら、ソレを願うはずだから……。

けど、その派生で生まれたフェイトを、道具のように扱ったことが許せなかった。

アリシアの遺伝子で生まれたフェイト。

当然、プレシアの遺伝子もあるはずだ。

そうになると、アリシアはフェイトの姉で、プレシアは母親だ。

どうしてそんな簡単なことに気付かないんだ？

腹を痛めなかったから自分の子供じゃないと、そう言いたいのか。クソツたれ！

「そりゃあまあ、フェイトは私のご主人様で、私はフェイトの使い魔だから、行こうと言われたら行くけどさ……」

「それ、食べ終わってからでいいから」

そう言って視線の先にはドックフードの箱。

いや、アルフが言いたいのはそうじゃないと思う……。つかなに気にフェイトって天然だよなあ。

慌ててドックフードをどかすアルフ。

「そうじゃなくて、私はフェイトが心配なんだよ。広域探索の魔法はかなりの体力使うのに、フェイトってばろくに食べないし休まないし……」

「平気だよ私、強いから……」

そんなアルフの気遣いを、フェイトは笑って平気だと言った。

平気なわけ、ないはずなのに……。

こうしてフェイトは徐々に傷ついて行く。体も心も……少しずつ。それがどれだけ歯がゆいことか……！

「なあ、せめて飯だけでもちゃんと食ってから行こうぜ。この世界じゃ、腹が減ったら戦はできないって言う諺もあるし、なにより例の白い魔導士とマント野郎が居るんだ。いくらフェイトが強いからって、万全な体調じゃないかぎり上手くいくとは限らない。下手し

たらしくじるかも知れないだろ？」

「そうだよ。ユウヤの言う通りだよ」

オレとアルフの説得に、フェイトは少し困った顔をしながら小さく頷いた。

「……うん。分かった。これ食べたらずぐに行くから、二人とも準備しててね」

そう言って、食器に置かれてる食べ物を口に運ぶフェイト。

ちなみに食事はオレが買い溜めていた食パンと固形スープだ。

もう少し精がでるもんを食わしたいが、ソレは帰ってから作って食べさせよう。

そう思いながら、オレはナイトを起動させてバリアジャケット防護服を着る。

この後、十中八九有澤と戦うだろ。問題は、ジュエルシードの発動。

原作ではフェイトとなのはがお互いにジュエルシードをぶつけることで発動する。

それをさせずに、オレが素早くジュエルシードを回収する。

ただでさえ疲れて傷ついてるフェイトに、これ以上余計な負担をかけさせたくない。

有澤とは速攻でケリをつける！

数分後、食事を終えたフェイトがジュエルシードの確保に向かう。

「さあ行こう。母さんが待ってるんだ」

高町との軽い模擬戦を終え、残った時間で俺達は街中でジュエルシード探しをしていた。

「あうータイムアウトかも。そろそろ帰らないと」

「だな」

しかしあつという間に門限になり、今日の探索はココで終わりのようだ。

俺もそろそろ帰らないと両親が心配するな……。

「大丈夫。僕が残ってもう少し探しとくから」

「うん。ユーノ君一人で平気？」

いや、フェレットが街中でウロウロしてたら、下手すりゃ保健所行きになるからあまり賛成はできないな……。

「うん。平気。だから晩御飯とつといてね」

そう言っただけで高町の肩から降りて、一人夜の町を駆けるフェレット。せめて、晩御飯が保健所の味気ない物にならないことを祈っとくよ。

「それじゃ帰ろう。健一君」

「ああ」

急いで帰る俺達。途中高町が携帯をチェックするが、すぐに閉じた。

たぶん、バニングスか月村からのメールが来てるのかを確かめたのだろう。

一応、月村がバニングスを宥めたのは良いが、放課後のあのバニングスの不機嫌な態度を見るに、まだ蟠<sup>わだかま</sup>りは残っていそうだ。

ふう。全てを話せば簡単なんだけどな……。

そんなことを思いながら帰る途中、首にかけてるマリアが突然声を発した。

『マスター。魔力反応感知』

その報告に俺と高町が立ち止まる。

「っ！ ジュエルシードか？」

『いいえ。この反応は先日戦った使い魔の魔力です』

使い魔？ 例の黒子か。

すると、ココから遠い場所にオレンジ色の柱が現れた。なんだ？

柱が現れたと同時に、周囲が停電する。その数瞬後、広域結界周囲に展開された。たぶんユーノだろ。

「健一君！」

「ああ！」

状況はよく分からないが、テスタロッサの仕業に違いない。となると近くにジュエルシードが？

俺達はその場に向かいながら素早く防護服を展開する。バリアジャケット

「マリア。モードテッドだ」

テスタロッサの仕業と言うことは中里も絶対居る。

今度は前回のようなへまはしない。

『了解』

ブローチの色がサックスブルーに変わると、俺はすぐに制御と調整を始める。

「ドラグナー・ナグル！」

始動の呪文を唱え、肉体が強化される。続けて第二の術の準備も始める。

『マスター。ジュエルシードの反応感知』

マリアの報告と同時に街中に蒼い光の柱が出現する。あそこにジュエルシードが。

同時に、ユーノから念話が届いた。

（なのは、健一。発動したジュエルシードが見える？）

（ああ）

（うん。すぐ近くだよ）

（あの子達もすぐに近くに居るんだ。あの子達より先に封印して！）  
（分かった）

高町はシーリングモードに変形したレイジングハートを構える。

すると、桃色の光がジュエルシードに向かって行く。見ると反対方向からは金色の光が向かってきた。

ほぼ同時にジュエルシードに光が当たる。

「リリカルマジカル！ ジュエルシードシリアル19！ 封印！」

それがトリガーコマンドとなり、封印する為の両者の魔力がジュエルシードに注がれていく。

魔力が注ぎ終わると、封印できたのかジュエルシードは中空を漂う。

「……………」

高町はゆっくりとジュエルシールドに近づき、ソレを見つめる。

「やった。なのは早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

高町の傍にやってきたユーノがそう言うのと、上空から黒子（犬モルド）の声が聞こえ、俺達に襲いかかる。

「っ！」

咄嗟にユーノが防御魔法を発動させて、攻撃を防ぐ。

「はっ！」

防御魔法が消えると、目の前にはテストロッサが居た。

テストロッサはジッと高町を見て、高町はテストロッサをジッと見る。

これで三回目の出会い。一体、高町はなにを思っているんだろう。

「この間は、自己紹介できなかったけど……私なのは。高町なのは。

私立聖祥大付属小学校三年生」

え？　そこまで紹介するの？

『Scythe Form』

と疑問に思っていると、テストロッサのデバイスが変形する。この間、高町に突き付けた金色の魔力刃を展開して、高町に襲いかかる。

「高町っ」

「お前の相手はオレだ！」

高町の援護に回ろうとすると、背後から中里の声が聞こえた。

いつの間に——！

後ろを振り向かず、俺は強化された全神経を使って中里の攻撃をギリギリで回避する。

「セカン・ナグル！」

すぐさま第二の術を発動させ、中里と対峙する。

「へえ。前は攻撃が当てられたのに、今回はダメか……。やっぱ仕掛ける時に声をだすのは止めた方がいいな」

そう言って、例によって見えない武器を構える中里。

「テッドの肉体強化を舐めてもらっちゃ困るぜ」

そう言いながら内心はドギマギしていた。

全然気配が分からなかった。それにやっぱアレも効かなかった。

アポロの力。危険を察知する能力が。

それが効かないってことは、完璧にコイツは気配を消していた。

作品能力のお陰かどうかは知らないが、あの不意打ち見たいなのは本当に厄介だ。

どうすれば……。

「そっちが動かないなら、こっちから行くぞ！」

「っ！」

消えた！ いや微かにだが見える！

俺の後方斜め右から横振り。当たる直前に俺は飛行魔法で空を飛ぶ。

「残念。フェイクだよ」

「なっ！？」

いつの間に俺より先に上空にいた中里が、見えない武器を振り下ろす。

ドガン——！

「っう！！」

咄嗟に両腕をクロスしてどうにか凌ぐが、上から衝撃を受け止めきれず、地面に落下する。

っ！　なんだよアレ！　この間より速くなってやがる！

となると、前回は手加減して今は本気ってことか……！

チラリと高町の様子を見る。向こうは向こうで頑張っているな。

俺のスピードに馴れたお陰か、前回みたいにテストロッサの動きに翻弄されることなくったようだ。テストロッサの後ろをとって攻撃する。悪くない。

「よそ見してる暇がどこにある？」  
後ろ！？



背後から声が聞こえたので、俺はさっきのように回避行動をとるが、

「前だよ」

一瞬にして回り込んだ中里。そのまま横振りで俺に叩きつける。

ドガン——！

「ぐっ……！」

防御が間に合わずモロに食らってしまった。

クソッ！  
バリフジャケット 防護服の上なのにこのダメージ！！

中里のとんでもない衝撃で五メートル吹っ飛ぶ俺。

どうやらアイツ、本気で俺を殺す気のようにだ……。いいぜ。だったらこっちも本気でやってやんよ！

魔力充填……制御……調整……完了！

「フエイトちゃん！」

空戦している高町が、レイジングハートを向けながら叫ぶようにテストロッサの名前を呼ぶ。

その声にこの場に居る全員が高町に注目する。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃなにも変わらないって言うけど。だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ！ ぶつかりあったり、競い合うことになるのは仕方ないかも知れないけど……だけど、なにも分からないままぶつかり合うのは……私、嫌だ！」

一つ一つ。悩んで悩んで悩み抜いて、今の気持ちを、自分の言葉でテストロッサに語りかける高町。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君がそれを元通りに集め直さないといけないから、私はそのお手伝いで……」  
必死に伝える高町の気持ちを、テストロッサは黙って耳を傾けている。

「だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意志でジュエルシードを集めている！ 自分が暮らしている

町や、自分の周りの人達に危険が降りかかるのが嫌だから！　これが、私の理由！！」

今伝えられる精一杯の自分の気持ちを叫ぶように発した高町。

「……私は」

「フェイト！　答えなくていい！」

高町の気持ちを通じたのか、自分の理由を話そうとするテストロッサ。ソレを黒子が止める。

「優しくしてくれる人達のところで、ぬくぬく甘ったれて暮らしているようなガキンチョになんか、なにも教えなくていい！　私達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！」

なんだ……それ？

ぬくぬく甘ったれて暮らしてるから、話す必要がない、だと？

ふざけるな……！！

「ざけんな！　クソ犬！！」

「なっ」

突然の俺の怒声に今度は全員、俺に注目する。

「ああそうだ！　確かに俺らはお前から見りゃ、甘ったれて暮らしてるかも知れねえ。けどな、それでもそんな暮らしにだって、悩んだり苦しいんだり悲しんだり、痛みを抱えることだってあるんだよ！　人が生きてる限り、それは絶対なんだ！　質や量が問題じゃねえ！　問題なのは、その痛みを知ることなんだよ！　現に高町は、この数日間。ずっとお前らのことを考えて、どう言えば自分の気持ち传达るか、悩んで悩んで悩み抜いて今、お前らに伝えただよ！　それをなんだあ？　言うにこと書いて、そんな理由で話す必要がないってのは、どういう了見だっ！？」

ブチ切れた。本気でブチ切れた。下手したら生まれて初のブチ切れじゃねえか？

それくらい、俺はムカついてんだ！　たぶんさっきの言葉だけじゃねえ。昼の中里のことも溜まっていて、それが今破裂したんだ。

ああ、ダメだ。頭が噴火状態になって冷静になれん。

「う、うるさい！ アンタに私らのなにが分かるんだ！」

「分かりたくもねえよ！ 少なくとも、そんなくだらん理由で、話す必要が無いって言う奴のことなんか、俺は知りたくねえ！」

クソッ クソッ！ クソッ！！

なんだよコレッ。なんだよコレ！ なんだよコレ！！

なんのために、高町はあそこまで真剣になって悩んだって言うんだ！

なんのために、自分の大事な友達に心配かけさせてまで苦しんだんだ！

なんのために、伝えたい気持ちを否定されたり、拒絶されたりする恐怖を乗り越えたって言うんだ！

ふざけやがって！

「うるさいっ！」

俺の怒りと同じ声音で叫ぶ中里。

「抱える痛みが全て一緒だと？ 問題はソレを知ることがだと？ ふざけんな！」

中里が俺目掛けて両腕を振り上げながら突進してくる。

振り下ろされた両腕を、俺はタイミング良く両腕でガードする。

ドガン——！

「っ！」

中里の一撃に耐えきれず、片膝が地面につく。

「そのせいで……どれだけの傷を抱えるか。それが分からない奴が、そんな綺麗ごとを言うな！」

「……ああ、そうかもな。お前の言う綺麗ごとかも知れん。けどな！」

俺はゆっくりと立ち上がり、見えない武器を押し下げ、眼前に居る中里を見る。

「それが事実なんだよ！ 痛みは誰だって味わう！ 傷を抱える！ それが当たり前なんだよ！ 痛みを理由に……不幸を理由にして、目の前に居る伝えたい人間の言葉から逃げんなっ！」

ああそうか。どうしてこんなに俺がムカついているのか、ようやく分かった。

コイツらは、つい最近の俺だったんだ。

痛みから逃げて、起きてしまった不幸を見向きもしなかった。

たぶん、前の俺だったらココまでムカつきはしなかっただろう。

けど、俺は変わったんだ。

あの痛みを受け入れ、起きてしまった不幸と向き合った。

だから目の前で、前の俺と同じ理由を盾にしているのが気に食わないんだ。

同族嫌悪ってやつだな……。

「ちっ！ 分けわかんねえよ！ てめえは一体、なにが言いたいんだ！」

言いたいこと？ そんなの一つだけだ。

「……それを理由に、高町の伝えたい気持ちを無視するな……っ！」

俺も高町同様、自分の気持ちを中里に伝え、既に準備完了している術を唱える。

「サーズ・ナグル！」

更に強化した体で、俺を抑えている中里の見えない武器を強引に払い、さっきのお返しに渾身の右ストレートを腹に叩き込む！

「ガッ！」

吹っ飛ぶ中里。俺はそれを確認すると、テストロッサを見て言い放った。

「それが、俺がお前らに言いたいことだ！」

## 無印編 五話目（後書き）

気づいた方も居ると思いますが、今回ユーノが地球に來た理由は映画版の設定を使いました。

感想などはお好きなようにお書きください。

誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。

## 無印編 六話目

白い魔導士の子。

あの子はどうして、私に自分の気持ちを伝えようとするの？  
そんなに必死になって、辛そうに、私に伝えようとするの？  
どうしてあのマントの子は、あんなに怒っているの？

あの子の伝えたい気持ちを拒絶したから？

ううん。違う。そうじゃない。

きっと、拒絶した理由に対して怒っているんだ。

マントの子の言うとおりだ。

私達はその理由を使って、あの子から逃げてるだけ。話す必要がないと決めつけている。

私とあの子は違う。暮らしている環境と家族の関係。私が欲しい  
と思っているソレを、きっとあの子は持っている。

持っていない私にとって、ソレが羨ましくくて、あの子を妬んで  
いるんだ。

だから分かるはずがない。私の気持ちを伝えても、あの子はきつ  
と分らない。

そう、決めつけたから。

だからマントの子は怒ったんだ。この理由で、あの子の気持ちを  
無視したから……。

「フェイト！ そんな奴の言葉なんか気にしちゃダメだ！ 早くジ  
ュエルシードを！」

私が迷っているのに気付いたアルフが、必死になって私にそう言  
う。

そうだ。例えばあの子が必死になって私に気持ちを伝えようと、私  
のやることは変わらない。

母さんの為に、私はジュエルシードを手に入れる！

私はあの子の真っ直ぐな視線を無視して、素早くジュエルシード

の元に向かった。

「あっ！」

それに気付いたあの子はすぐに私の後を追いかけてくる。  
渡さない！

しかし私の想いとは裏腹に、私とあの子のデバイスが同時にジュエルシードにぶつかった。

——ドクン。

「っ！」

なにが起こったのか分からなかった。

突然、ジュエルシードから鼓動のようなモノを感じた瞬間、バルディシュのフレームに罅が入った。それはあの子のデバイスも同じだった。

数瞬後、ジュエルシードからものすごい魔力が溢れ出し、私とあの子を吹き飛ばした。魔力は止まらず、蒼い光が空を貫き、溢れ出した魔力は振動と爆発を起こした。

しまった！ 発動させた！

吹き飛ばされた私はすぐに体勢を立て直し、バルディシュの破損状況を確認する。

フレームは所々罅が入り、コアもボロボロになっていた。

これじゃ、ジュエルシードを抑えるのは無理……。

「大丈夫？ 戻って、バルディシュ」

『Yes sir』

待機状態に戻るバルディシュを確認して、私は単身で発動中のジュエルシードの元に向かった。

「っ！」

突然溢れ出た膨大な魔力に気付いたオレは攻撃する手を止める。

「時間をかけ過ぎた」

予想以上に有澤が手強くなっていたせいで、すぐに倒すことが出

来ず、発動するまで相手をする羽目になった。

クソッ！

すぐに発動したジュエルシードの元に向こうとするが、時すでに遅し。

フェイトがジュエルシードを掴み、原作と同じように直接自分の手でジュエルシードを抑えようとしていた。

「フェイト！」

オレは素早くフェイトの元に向かった。ナイトを地面にぶっ刺し、フェイトの手の上からオレの手を重ねて、同じようにジュエルシードを抑える。

「っ……ダメ！ 離してユウヤ！ ユウヤまで……」

「やだね。フェイトばかり無茶させられるか！」

そう言ってオレは真剣にジュエルシードに願う。

止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ——

——！！

ブチブチ——と掌の皮膚が破れ、血が吹き出る。

「っ……！！」

痛みで手を離しそうになるが、それでも我慢してオレは必死になつて願う。

それが叶ったのか、どうにかジュエルシードの発動を止めることに成功するオレ達。

「あ……」

止まったことを確認すると、そのままフェイトの意識がなくなり、その場から倒れる。

「とっ……」

オレはそれを受け止めながら、フェイトの眠る顔を見る。手には痛々しい傷と血が吹き出てるが、それでもジュエルシードだけはギユウと握って離さなかった。

クソッ！ こんな所まで原作通りにならなかつた方がいいのに……っ！



原作通りの展開に始めて苛立ちを覚えた。

「フェイト！」

人型になったアルフがオレ達に駆け寄ってきた。

「大丈夫。気を失っているだけだ」

「ユウヤは？」

「オレもだ。ちょっと手が痛い問題ない」

実際かなり痛いのが平気な顔をする。人前で痛みを我慢するのは男の子の義務だと思うから。

「そんなことより、目的の物は手に入れたんだ。早くフェイトの手当てをしないと」

「ああ。そうだね！」

そう言って抱えているフェイトをアルフに預け、オレは地面に刺していたナイトを引き抜く。

そのままナイトを待機状態に戻し、オレは有澤を見る。

「有澤。これだけは言っとく。てめえの言い分は理解できるが、納得はできない！」

痛みを知るのが重要？ ソレはつまり、傷つくのが当然だと言っているようなモノじゃねえか。

そんなモンを知るために、フェイトは将来、一生残る傷を背負わないといけないのか？

ふざけるな……！

そんなの……納得できるかよ！

「……それだけだ」

有澤にそう言って、オレ達はその場から立ち去った。

隣接しているビル群を跳躍で飛び越え、急いで遠見市のマンションに向かった。

「……………」

チラリとアルフに抱かれてるフェイトの姿を見る。手を見ると、必死で掴んだジュエルシードを絶対に離さない意志が見えるくらい、ギューと握り締めていた。

これでジュエルシードは六個。原作より多いが、まあ許容範囲だろ。

問題は、明日現れる管理局だ。

クロノ一人なら逃げることは可能だが、有澤と共闘でもされたら厄介だ。

だったら現れた途端、アサシンの気配遮断を使って背後から攻撃して、その隙にフェイトを連れて素早く逃げる。出来ればジュエルシードの回収も出来れば良いが、それは状況次第だな。

うん。明日は今日のようにへまはしない。

そう心に誓った。

マンションに戻り、部屋に入るとフェイトの意識が戻った。

「ん……う……アルフ？ ユウヤ？」

「フェイト！」

「目が覚めたか？」

「……ジュエル……シードは？」

「大丈夫。ちゃんと手に入れてるぞ」

「……よかった」

安堵した顔を浮かべるフェイト。

自分の怪我よりもジュエルシードを入手したかどうかの確認をしたフェイトの姿を見て、オレは一瞬だけフェイトのことを歪だと思っってしまった。

異常なまでの母親に対するフェイトの献身さを。

戦闘も行動も想いも、全てはフェイトの――アリシアの記憶の中にある優しい母親の姿。

ソレをもう一度見るためだけに、こんな小さな体を酷使してプレシアの望みを叶えようとしている。

自分の中にある記憶を信じて、優しい母親だったプレシアの虚像を求めて。

それなのに！

あの女はフェイトに労いの一つもせず、優しい抱擁を一つもせず、

与えたのは理不尽な虐待。

なんでそんなことが出来るのか、理解できない！

「……ユウヤ」

フェイトがオレの名前を呼ぶ。ソレを聞いて、オレは今さっきまで考えていたことが吹き飛んだ。

「ん？ どうした？」

オレは何事もなかったように訊き返す。

「手……酷い怪我だよ。早く、手当てしないと」

自分はずっと酷いはずだ。なのに、オレの心配をするフェイト。

本当は優しい子で、戦いが嫌いな女の子なのに、どうしてこんな辛い戦いをしなくちゃいけないんだ。

守りたい。

辛いことや悲しいこと、痛いことなど。

そう言った全てから、フェイトを守りたい。

「それは、フェイトにも言えることだろ」

オレは優しい声音でフェイトの身を案じることにした。

「アルフ。フェイトをソファに座らせてくれ」

「わかったよ」

言われた通り、アルフは抱えているフェイトをゆっくりとソファに座らせる。

ソファに座らせると、アルフは必死の思いで手に入れたジュエルシードをフェイトから受け取り、ソレをテーブルに置いて、そのまま治療道具を持ってこようとするが、それをオレが止めた。

「オレが治すから大丈夫だ」

「え？ ユウヤって回復魔法使えるの？」

少し驚いたように言うフェイト。

フェイトが驚くのも無理はない。誰が見たってオレは近接戦闘型で、殆ど【なのは】の魔法を使っていない。

使っているとすれば、せいぜい飛行魔法ぐらいだろう。

「いや、使えないよ」

「だったらどうすんだい」

「コレを使うんだ。ナイト、宝具召喚。全て遠き理想郷」  
アヴァロン

ナイトに宝具召喚を命じると、蒼を基調とした豪華な装飾を施された鞘が現れる。

「傷を癒せ」

そう命じると鞘から光が溢れだす。するとフェイトの両手は勿論、オレの両手の傷が見る見るうちに治っていった。

「す、すごい……」

傷がすぐに治っていくことに小さく驚くフェイト。

「ナイト。召喚解除」

傷がなくなると、オレはナイトに命じて全て遠き理想郷を消す。  
アヴァロン

「これでもう大丈夫だ」

両手をグーパーしながらそう言うと、フェイトとアルフがなにか言いたそうな目をオレに向ける。

「どうした？」

「いや、こうしてユウヤの魔法を見ると、やっぱり私らのとはなんか違うんだよなー。さっきの鞘なんて、まるでロストログアみたいなデタラメな力だったし」

「う……」

捲し立てるように言うアルフ。

確かにそうだよな……。

フェイトと出会ってからオレは魔法——この場合は【Fate】の魔術は使っていない。いや、使えない。

一応、エミヤの投影。凜の宝石魔術。クー・フリーンのルーン魔術。メディアの魔法染みた魔術は使えるが、全く特訓してないので戦闘では役に立たない。

そもそも【Fate】の魔術理論が理解できなかった結果、近接重視でいこうと趣旨を変えたのが切っ掛けだ。

で、アルトリアの剣技や他の英霊のスキルを習得しつつ、英霊達が持つ宝具も扱えるようにと時間を割いた結果、魔術を習得する前

に無印が始まったと言うわけだ。

……無印が終わったら魔術の習得も視野に入れようかな。

そう思いながら、現状の状況をどう乗り越えようか頭を回す。

とりあえず適当な嘘で誤魔化そう。

まさか本当のことを喋るわけにもいかないし。

「んー、一応ソレがオレの魔法なんだよ。投影って言って、簡単に言えば想像した武具を具現化ができる魔法なんだ。さっきの鞘は、この世界の英雄譚に登場する武具を具現化しただけ。勿論、その武具の効力も再現可能だ。アルフがロストログアみたいだって言ったのもあながち間違いじゃないな」

実際は魔法ではなく、能力の一部なんだけどね。

ま、やってることは投影みたいなモンだし、宝具なんて【なのは】から見たらロストログアそのモノだからそう思うのも無理ないだろ。

「……そんな魔法聞いたことないけどね」

「もしかしたら希少技能かも」

「ああ。それなら納得だよ」

と、御二方がなにやら勝手にオレの力を納得したようだ。

とりあえず、ソレに乗っかつとこう。

「ま、そんなモンだ」

因みに、どうして地球生まれのオレが魔法を使ったり、デバイスを持っているのかと聞かれた時は、咄嗟に祖父が次元世界の出身で、色々教えてもらったと言う嘘で誤魔化した。

「それより、怪我が治って良かった」

「うん。ありがとうウヤ。明日は母さんに報告に戻らないといけないから、治って良かったよ」

それを聞いてオレは、フェイトがプレシアに虐待される場面を思い出す。

「……………」

「傷だらけで帰ったら、きっと心配させちゃうから」

「心配、するか？ あの人が」

プレシアの所業を知っているアルフはフェイトの言葉に難色を示す。

「母さんは、少し不器用なだけだよ。私には、ちゃんと分かっている」

どう見たらあの虐待ババアをそんな風に見えるのか、オレには分からない。けど、フェイトにとってはたった一人の母親なんだ。そんな風には思えないのだろう。

とりあえず、事情を知らないことになっているので、オレはさり気なくフェイトからプレシアのことを訊いた。

「ん？ フェイトの母親ってそんなに気難しい人なの？」

「うん。今は研究とかで少しピリピリしてるけど、私が小さかった頃はとても優しくかったの」

嬉しそうにプレシアとの過ごした優しい記憶を語るフェイト。

「今の研究が成功すれば、きつと前みたいに優しい母さんに戻ってくれる。だから私は、母さんの為にジュエルシードを全部集めないといけないんだ」

そう言ってギュッと拳を握り締めるフェイト。

「……そうか」

叶わない未来を信じるフェイト。

しかしそれは原作の話し。この世界では必ず叶う未来だ。

オレがソレを叶えさせるのだから。

「報告だけなら、私が行って来ればいいけど」

「母さん、アルフの言うことあんまり聞いてくれないもんね」

それを聞いて少し落ち込むアルフ。

「アルフはこんなに優しくて良い子なのに」

そんなアルフを慰めるように頭を撫でるフェイト。

「まあ、明日は大丈夫さ。こんな短期間でジュエルシードを六つもゲットしたんだし、褒められならまだしも、叱られることなんてま  
ずないもんね」

「……うん」

そう。普通の母娘ならそうだろう。けど、プレシアは違う。フェイトをただの道具として見てないプレシアが、フェイトを褒めることなんてあるわけがない。

まあ、原作は四つだけどこコでは六つも手に入れてるんだ。虐待はないだろう。

……するとしたらせいぜい叱咤ぐらいだろうが、それでもフェイトには堪える筈だ。

だったら。

「……なあ、良かったらオレも行ってもいいかな？ フェイトの母親に挨拶もしたいし」

「「えっ？」」

驚く二人。そりゃそうだ。いきなり親に合わせろと言われたらオレだって驚く。

けど今回は単に挨拶だけじゃなくて、報告した後のフェイトのメンタルケアが目的だ。

「ダメ、かな？」

「ううん。ユウヤが良いなら私は構わないよ。母さんにもユウヤのこと報告するつもりだったし、ユウヤが居てくれば、どんな人か母さんも分かりやすいと思う」

あっさり承諾してくれたフェイトに、オレは拍子抜けした。

てっきり、知らない人を家にあげたら怒られると言われると思ったが、案外そんなことはないようだ。

「そっか。そんじや明日は早く合流しないとな」

「でもユウヤ。明日も学校があるんじゃない？」

「ああ、明日は休日だから大丈夫だよ」  
もちろん嘘だ。

「なら良かった。それじゃ明日八時ぐらいに来て」

「分かった」

そんなこんなで明日はプレシアに会いに時の庭園に行くことになった。

あ、プレシアに会ったなんて言おう。

テスタロッサ達にジュエルシードを持って行かれた俺達。またしてもジュエルシードが手にれられなかったこと、そして自分の気持ちをちゃんと聞いてくれなかったこと、レイジングハートが損傷したなど、前回以上に落ち込む高町。

そんな高町をユーノが慰めるが、上手く行かなかった。

いつまでもココに居ても仕方ないので、今日は解散と言うことで俺達は家に帰ることにした。

別れ間際に俺はレイジングハートの状態を訊く。

フレームとか結構酷い罅があったから、もしかしたら専門の人じゃないと修復出来ないのかもしれない。

そうになると、高町のジュエルシードを集めはこれ以上不可能になる。

そう危惧したが、ユーノ説明だと破損は大きいが自動修復機能をフル稼働させれば明日には治ると言ったので、俺と高町は安堵した。そう言うことなら、明日の模擬戦と探索も大丈夫だな。

そんなことを思いながら、俺は高町とユーノと別れ、一人帰路を歩く。

……にしても、さっきのあのジュエルシードの発動。アレは、素人目でもやばいと思った。

テスタロッサ達が止めてくれたは良いが、放っておけばどうなっていたことか……。

「なあマリア。今日のジュエルシードの発動。アレってやっぱやばかったのか？」

首にかけているロザリオが、俺の疑問に答えてくれる。

『はい。マスターの言う通り、先刻のジュエルシードの発動で、小規模ですが次元震が発生しました』

「次元震？ それってやばいのか？」



『はい。今回は小規模だったので大きな被害はありませんでしたが、これが大規模でしたら次元断層が起きて、幾つかの世界が消滅するでしょう』

「そうか」

世界の消滅……。一個の発動で小規模の次元震とやらが発生したんだ。コレが21個揃って発動したら……。

例の組織に危険性を訴えるには十分だな。

ユーノはこの近辺を哨戒してると言ってたから、たぶん近日には地球に来るだろう。

その時に、全てをそっちに任せられたらいいけど。

「無理だろうな……」

高町やユーノの責任感の強さを考えると、きっと手伝いたいって言うんだろな。

それに、テスタロッサの件もある。

あれ程執着している人間を、高町が他人に任せるとは思えない。

十中八九、手伝うだろうな。

その時、俺はどうするべきか……。

高町と一緒に例の組織の手伝いをお願いするか？ それとも例の組織に高町を任せるか。

俺的には最後まで高町の手伝いをしたいが、専門的な組織が介入するなら下手に素人が手を出して失敗でもしたら最悪な結末になるかも知れない。

どうするべきか。

とりあえず、この問題は保留にしよう。例の組織が今日明日来るとは限らないし、最悪来たとしても向こうの話を聞いてから答えを出すのは遅くないはずだ。

うん。そうしよう。

そう自分の中で決めると、気付いたら自宅の前に立っていたことに気付いた。

いつの間に……。まあいい。腹も減ったし飯食って寝よう。

そう思い、ドアを開ける。

「あ……」

そこには優しい笑みを浮かべた母親が立っていた。

「……えっと、ただいま」

次の瞬間、母親の怒声が俺の耳を突き抜けた。

翌日の昼休憩、飯も食べ終えた俺は、いつもなら机でボーっとするが、今日は良い天気なので窓際に近づいてボーッと雲を眺めていた。

今日は心中穏やかに過ごせそうだ。

何故なら中里が居ないからだ。担任の説明では風邪で休んだようだが、どうせずる休みだろう。

「……………」

《てめえの言い分は理解できるが、納得はできない!》

昨日、中里は俺にそう言った。

納得できない……か。

そりゃそうだ。

受けた痛みはどうでもいいって言ってるようなモンだからな。

尋常じゃない痛みを受けた人間が聞きゃあ、怒るのも無理はない。けど……。

《ぬくぬく甘ったれて暮らしているようなガキンチョになんか、なにも教えなくていい!》

それでも……俺はあの言葉を認めることはできない。

あんな理由で、高町の気持ちを無視することが許せない。

生きてる限り、痛みから逃れることは出来ない。痛みは誰にだって平等に与えられるから。

そんなのに、強弱をつけて差別化したってしょうがないだろ。

痛みは、痛みでしかないんだから……。

「ちよっと健一。私の話し聞いてる?」

物思いに耽っていると、隣に居るバニングスがきつい口調で問い詰めてきた。

「ああ。ちゃんと聞いてるぞ。で、その犬がどうしたんだ？」

そう訊くと、バニングスは嬉しそうに飼っている犬の話を続けた。今日は珍しいことにバニングスが休憩の度に俺に話かけてくる。

そりゃ、友達なんだから話すのは当たり前だが、普段と比べるその頻度が多い。

やっぱ昨日の件が尾を引いてんのかね。

そう思ったが、チラチラと高町の方を見るバニングス。

で、その高町はと言うと、月村とお喋りしていた。

それを見て俺はやれやれと両肩を竦める。

「そんなに高町が気になるのか？」

「べ、別にそんなことないわよっ」

「そうか？ その割にはよく高町の方を見ているけど」

「気のせいよっ」

「最初の小休憩から通算34回も見ているけど、それでも気のせいと？」

「なんで数えてんのよっ！」

「いや、なんとなく」

それを聞いてはあとため息を吐くバニングス。

「まあ、確かに高町がなにか悩んでいるのは分かるし、バニングスがそれを心配する気持ちも分かるけど、それで喧嘩するのは本末転倒だと思うぞ」

「健一は気にならないの？ あんな、悩んでますオーラ出しておいて、こっちがどうしたのって訊いたら、なんでもないの一点張り。そりゃ私らに話した所で解決できないかも知れないけど、それでも悩みを共有したいのは親友として当然じゃない」

そうだな。確かにそう思うのは至極当然だ。

「けど逆に、高町の性格を考えれば、解決の糸口も見つからないような悩みを友達に話せば、自分と同じかそれ以上に悩むかもしれないな

い。そう考えたら遠慮して、話したくても話せない。そう考えてるんじゃないか？」

「……確かにあの子、昔からそう言うところあったし」

俺の言葉に頷くバニングス。別に高町が水臭いと言うわけじゃなくて、単にそう言った性格なんだ。頭で分かっているけど、心じゃ上手く納得できない。

そんなのは誰にだってある。

「結局。現状、俺達が出来るのは、高町が話したいと思うまで待つことだけだ」

「うん……。それは昨日、すずかとも話して決めた」

ああ、あの時ね……。

昨日教室を出て行った後で、そんなことを話してたのか。

「だったら、ココで俺と話す暇があるなら、高町のところに行ってお喋りでもして来いよ」

「うーん。そうなんだけど、昨日の今日で普通に話し掛けるのは、なんか負けた気分だし……。それに、なのはには私が怒っているってことをちゃんと伝えたいから、今はまだダメ」

さいですか。

全く、なんて言うか、素直になれない奴だな。

そう思いながら、俺は隣に立っているバニングスの頭をポンポンと軽く叩く。

「それも程々にしとけよ。下手にこじれたら後々面倒なことになるからな」

「う、うん……」

バニングスが小さく頷くのを見ると、頭を叩くのを止めた。何故かバニングスの頬が赤かったが、子供特有の体温の高さのせいだろうと思う、特に気にせずボーッと雲を眺めるのを再開する。

まあ、バニングスにはああ言ったが、それは俺が高町の悩みを知っているから言える言葉だ。

実際、俺がバニングスの立場だったら、どんな手段を使っても

高町の悩みを知ろうとするだろう。

強引だと思うが、それが最善手だと俺は思う。

昔、悩みを抱えた友達が居た。俺はそれに気付かず、放っておい  
た結果、最悪な事態を迎え、最低な結末で終わった。

あんな想いをまたするくらいなら嫌われても良い。関係が破綻し  
てもいい。その悩みを強引な手段を使って知り、俺に出来ること  
があるなら全力で解決する。

それが俺の考えだ。

「失うくらいなら、それくらいした方がきつといい」

誰にも聞こえないくらいの小声でそう呟く。

「ん？ なにか言った？」

しかし隣に居たバニングスには聞えたようだ。

「いや、ただ独り言だ」

そう言って、俺は雲を眺めながらさっき呟いたことをバニングス  
に忘れさせる為に、とりとめのない会話をすることにした。

放課後、俺と高町の二人はいつもの場所で模擬戦をするために向  
かった。

バニングスと月村は例によって、なにかの稽古があるようで、一  
緒に帰れなかった。

月村はいつも通り。バニングスはつんけんした態度で高町と別れ  
た。

早く仲直りすればいいのと思うが、こればかりは本人次第だ  
から仕方ない。

そんなこと思いながら横目で高町を見る。

思った通りだ。バニングスの言う通り、悩んでいますオーラが溢  
れ出てる。ように見える。

ほんと、何事に対しても悩みやすい奴だ。

こればかりは、俺じゃどうしようにもできない。

「ねえ、健一君」

隣に歩いてる高町が徐に俺の名前を呼んだ。

「なんだ？」

「昨日、フェイトちゃんの使い魔さんが言ったこと、覚えてる？」

「ああ」

ふざけたことを言ったことね。

「フェイトちゃんが私と話さないのって、やっぱりアレが理由なのかな？ 私じゃ、フェイトちゃんと話すことが出来ないのかな……」

高町の小さな口からポツリポツリと零れる不安。

自分の気持ちを言葉を伝えたのに、帰って来たのは無視。

それはつまり、テストロッサにとって高町は、なんの価値もない、取るに足らない存在。

今、高町の中にある感情はきつと、拒絶される恐怖だ。

それでもコイツは、テストロッサと話すことを止めないのだろう。だったら、今俺が出来ることはそれを取り除くことだ。

うん。

「そんなことはない」

「え？」

「アレは、あの犬が勝手に言ったただけだ。テストロッサの口から一言もそんなことは言っていないだろ。現に、あの犬が口出ししなかったら、テストロッサはちゃんと高町と話をしようとしてた」

迷っていたけど、それでも高町の気持ちはテストロッサには伝わっていたはずだ。

もし伝わらなかったら、あの犬が言う前に、既に行動していたはずだ。

それをしなかったってことは、テストロッサ自身、高町に対してどうすれいいか迷った証拠だ。

「だから、伝わるはずだ。高町の気持ちは」

俺の励ましの言葉に、高町は「うん」と頷き、

「私、やっぱりあの子のこと、フェイトちゃんのことになるの」

新たな決意を俺に聞かせた。

「すごく強くて、冷たい感じもするのに、だけど綺麗で優しい目をしてて、なのに……なんだかすごく、悲しそうな」

それを聞いて、俺は始めて出会ったテストロッサの顔を思い出す。確かに、ぱっと見は綺麗で優しい目をしていて。でも高町は、その奥にある気持ちを感じ取った。

「きっと理由があると思うんだ。ジュエルシードを集めている理由。だから私、あの子と話がしたい」

そう、新たに決意する高町。

そこにはもう、さっきまで悩んでいた高町なのは居なかった。

「なのはっ」

すると、ユーノが赤い玉——レイジングハートを持ってやって来た。

「レイジングハート、治ったから届けに来たよ」

高町はユーノからレイジングハートを受け取ると、安堵の表情を浮かべた。

「よかったあ」

『Condition green』

「……また、一緒にがんばってくれる？」

『All right, my master』

これで、高町も万全になったようだな。

すると首にかけているマリアが声を発した。

『マスター。微量ですが、海鳴臨海公園からジュエルシードの魔力を感知しました』

タイミングが良いなあオイ。

「っ！……分かった。行くぞ高町」

「うん」

急いで現場に向かう俺達。

公園に着くと俺達は二手に別れてジュエルシードを探すことにした。

どこにある。

道の隅っこ、ベンチの下、茂みの中など探しに探した。けど見つからない。

そりゃそうだ。

公園って言っても、ココは無駄に面積が広いし、探し物は小さな宝石だ。

気分はまるで砂漠の中から一つのビーズを探しているようだ。

ああ、だるい。こうなったら、発動するまでそのベンチでのんびりしとこうかな。

と、そんなことを思っていたら、突如蒼い光の柱が出現した。

「……なあ、マリア」

『はい』

「もしかして、ジュエルシード発動した？」

『そのようですね』

マリアに現状の確認をすると、俺は小さくため息を吐いて、その場に向かう。

どうやら、のんびりするのコレが終わってからのようだな。

「ようやく治った、か」

ベッドで横になりながら、私は最後の傷が塞がっていくのを見てそう呟いた。

先日のイレギュラーとの戦いで負傷した傷がようやく完治したことを確かめると、私は安堵の息を吐いた。

長かった……。

細かい傷はすぐに治ったが、上半身に受けた致命傷はすぐには治らず、一日かけて治した。

他にも失った大量の血を取り戻すにも一日。斬り落とされた左腕が完全に再生するのに二日もかかった。

計、四日の時間をかけてようやく、森永香奈枝完全復活だ。



「……我ながらよく死ななかったな」

冷静に前回の戦いで負った怪我を考えると、随分人間離れしたなと小さく笑う。

「ま、吸血鬼化で不死になったのに、あっさり死んだらそれはそれで詐欺だな」

にしても、今回初めて使った吸血鬼化だけど、正直遅いと思った。イメージだと傷は瞬時に再生するかと思っていた。

それこそ、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードみたいに、瞬間再生を期待したが、さすがに他作品の設定を期待するのは間違いだったみたい。

どうやら【ネギま！】の設定では、吸血鬼になったばかりだと、最初は再生するのが遅く、徐々に馴れないと再生速度が上がらないようだ。

初耳だよ。

ああ、こんなことなら木乃香のアーティファクト。コチノヒオウギ東風ノ檜扇を使った方が早く治ったのに。

まあ、あの戦いでソレを使う余裕がなかったから、吸血鬼化でどうにか死ぬのだけは回避できたんだけどね。

それでも痛みはある。お陰で四日間、痛みと付き合ったせいで、どれだけのうち回ったことか。

今なら大抵の怪我ならなんてことないって言って笑えるだろう。

「……………」

やっぱ無理。

痛いのやだ。

「よっと」

ベッドから降り、四日ぶりに自分の足で立つ。

とりあえず、吸血鬼化を解除しよう。このままずっと暗い部屋に居ると正直辛い。

まあ吸血鬼の体じゃ実際そんな風に辛くはならないけど、なり立てだとどこか辛く感じてしまう。

コレも、人間だった頃の名残のようなモノかな？

「うわ、なにも見えない」

人間に戻ると、さっきまではっきり見えていた部屋がなにも見えなくなった。

よくこんな場所で四日も閉じ籠っていられたものだ。

「ま、再生速度が遅くなるよりかはマシか」

吸血鬼の弱点の一つ。太陽。それから守るために、私はこうして暗い部屋に閉じ籠っていた。

別に太陽の光を浴びて灰になるってことはないけど、再生力が落ちるのは確かだ。

だからずっと暗い部屋に居たが、そろそろ陽の光が恋しい。

そう思い、手探りでドアノブを掴み、光を閉ざした部屋から出て行き、四日ぶりの外に出る。

「あれ？ もう夕方？」

空を見るとすでに夕暮れに変わろうとしていた。

「そっか。ずっとあの部屋に閉じ籠っていたから、時間の感覚がずれてるのね」

こりゃ、明日の学校がきついな。

うーんと体を伸ばすと、背後から声が聞こえた。

「香奈枝。傷はもう大丈夫なのか？」

「夕凧……」

振り返ると、そこには人型モードの夕凧が立っていた。

黒髪黒眼。スラリとした長身。整った顔。着なれた感じのポロシヤツとジーンズ。

誰が見たってイケメンだと思うだろ。私だって、最初見た時は顔が赤くなったのだから。

「平気。完全復活よ」

完治したのをアピールするように軽く左腕を回す。

「そうか。コレでようやく、香奈枝の看病から解放されると言うわけか」

嬉しそうに言う夕風。

「なによそれ？」

「気にするな」

「……ところで、買ってきたの？」

「ああ、言われた通り、弁当を買ってきたぞ」

「ありがとう」

夕風は右手に持っていたビニール袋を私に渡す。

「もう、元に戻ってもいいわよ」

「了解」

そう言って、夕風は人型から指輪に戻り、左手の人差し指に嵌る。

「御苦労さま」

『本当だぜ。出来れば今回のようなことはこれっきりしてもらいたいな』

「当然。もう二度と、前回みたいな戦いはしないわ」

『だといいがな』

「少しは自分のマスターを信じなさいよ」

『それでも全幅の信頼を寄せているつもりだぜ？』

「そうには聞こえない。少しは素直の言葉を聞かせてよ」

『へいへい。分かったよ』

そう言って黙り込む夕風。

やれやれ。

軽く両肩を竦めながら、私は家の中に戻り、リビングで夕風が買ってきた三つのコンビニ弁当を食べ始めた。

久しぶりのご飯だ。

この四日間には吸血鬼化していたせいか、ありま空腹感を感じず、ただ傷の再生に専念していたからね。

そのせいか、不味いコンビニ弁当も今日だけはご馳走に思え、箸のスピードが落ちない。

『食い意地の張った女だ』

夕風がボソツとなにか呟いたが、気にせず食事続ける。

ほどなくして三つ全部を食べ終わると、空になった容器を洗ってゴミ袋に捨てる。

「ふう」

さてと、食後の運動をかねて軽く剣でも振るか。そう思い、そのまま道場に向かう。すると。

「っ！ 夕風、この反応」

『ジュエルシールドだな』

昨日に続いて今日もジュエルシールドの反応を感じたってことは。

「……管理局が、来る」

もうそこまで物語が進んでいるのか。

私は悔しさについ下唇を噛んでしまう。

このままじゃやばい。下手したら今日で原作の物語が破壊されてしまうかもしれない。

早く、あのイレギュラーを殺さないで。

前回戦ったイレギュラー——中里裕也を。

「夕風、バリアジャケット防護服の展開をお願い」

『いいのか？ まだ病みあがりだろ？』

「そんなこと言ってる暇なんてない。早くイレギュラーを殺さないで、私の好きな【なのは】が後戻りできないくらい破壊されちゃう！」

無印が終わるのも時間の問題。

一刻も早く、イレギュラーを殺さないで！

そんな私と違って、夕風は落ち着いた口調で言った。

『落ち着け。よく考えてみる。相手は前回戦った奴の他に、もう一人居るんだろ？ 下手したらソイツらが共闘してお前を殺しに掛るかも知れん。なんの情報も無しにこのこ出て行っても、返り討ちに合うだけだ。いや、今度こそ殺されるぞ』

「……………」

確かに夕風の言う通りだ。

もう一人のイレギュラーはまだ顔も見えてない。どんな能力かも分からない。

ただでさえ、中里一人に勝てなかった私が、二人も。それも未知の相手と戦って勝てる保証なんてどこにもない。

吸血鬼化になって戦っても、死なないだけで、戦闘不能にされることは可能だ。前回の戦いがそうだったように。

それに今回はまだ太陽が出てる。そんな時に吸血鬼化になった逆に弱体化しちゃう。

……どうする？ どうやったら、イレギュラーを確実に殺せる？  
『とりあえず、今回は敵の戦力を分析しようぜ。その後で、ソイツらを一人ずつ確実に殺せばいいだろ？』

「……そうね。そうしましょう」

夕凧の提案に頷き、今日の所はイレギュラー達に手を出さないことを決めた。

「それじゃとっと現場に行きましょう。夕凧、お願い」

『了解』

バリアジャケット

防護服を装着すると、私はすぐに家を出て、空を飛んで現場に向かった。

向かうは海鳴臨海公園。

八時十七分か……。

昨日、フェイトに言われた通り八時くらいにココに着き、そのまま屋上まで昇る。

今日のフェイトの格好は、いつもの防護服ではなく、可愛らしいワンピースを着ていた。

「でもやっぱり黒なんだ」

「？」

オレの眩きが聞こえたのか、首を傾げるフェイト。

「いや、気にしないでくれ」

因みにオレは家からそのままココに来たから、服は聖祥の制服だ。  
「お土産はこれでよしと」

手には小さな洋菓子屋の箱を持っていた。ロゴを見ると翠屋と書かれていたが、見なかったことにしよう。

「それじゃそろそろいくよ。ユウヤ。準備は大丈夫？」

「ああ、問題ない」

「うん。……次元転移、次元座標876C 4419 3312  
D699 3585 A1460 779F3125」

座標を言い終わると、金色の魔法陣がオレ達の下に展開された。

「開け、誘いの扉。時の庭園、テストロッサの主の元へ」

魔法陣から発生した光がオレ達を包み、数分後オレ達は時の庭園に無事転移した。

「先に母さんに話しとくから、私が呼ぶまで待ってて」

「あ、だったらこの辺ちよつと見て回っていいか？」

待ってる間退屈だし、なによりフェイトが育った場所だ。アニメでは描かれていない場所もきっとあるに違いない。

ようは探検みたいなモノだ。

「え、別に良いけど、大丈夫？ ココ広いから迷ったりしない？」  
まるで子供を心配する言い方で、しきりにそう言うフェイト。

「大丈夫だって。ほら、早く行かないとお母さん待ちくたびれちゃうぞ」

「あ、うん……。ユウヤ、迷ったと思ったらすぐに来た道を引き返すんだよ」

そう言って、フェイトとアルフはプレシアの居る部屋に向かって行った。

さて、と。探検探検。

まずはどこから行こうな。

そう思いながら目的を決めずに歩きだすオレ。

長い廊下を渡っていると、奥の曲がり角に人影のようなモノが見えた。

「？」

なんだ？ 今の？

プレシアか？ いや、違う。プレシアは確かアルフと同じ身長だったはず。さっきの人影は少なくともアルフより大きかった。

一体なんだ？

オレは人影が誰か確かめるために後を追ひ、曲がり角を渡るが、そこに誰もいなかった。

……気のせい、だったか。

もしかして、リニスの幽霊？

いや、それはないか。

たぶん気のせいだろ。

そう思い直して、オレは探検を再開した。

たぶんコレが、オレがアイツの存在を知る最初の切っ掛けに違いない。

生涯忘れることの無い、最低最悪の代名詞が似合うアイツ。

最凶で最恐にして最狂であり、そして最強のクソ野郎。

まだソレを、オレは知らない。

ずっと歩き続けていると、見覚えのある場所に辿り着いた。転移して出てきた場所だ。

どうやら一周りしたようだな。

「にしても、まだかな」

歩いて結構時間が経ったと思うが、一向にフェイトから連絡が来ない。

「……まさかな」

嫌な予感がしたが、それはないと思い直す。

（ユウヤっ！）

すると、アルフから悲痛の叫びに近い念話が届いた。

アルフは酷く焦っているようで、要領を得ない言葉で捲し立てら

れたが、オレはすぐにそれが分かり、アルフの元に走って向かった。  
ようは原作通り進んでいるってことだ。

「……………っ！」

考えが甘かった。いくら原作より多めに持っていようが、プレシアの目的は21個のジュエルシードだ。4個が6個に変わった所で、プレシアにとっては少ない数に違いない。だとすれば、フェイトを虐待しないはずがない！

クソツたれが！

深くも考えず、甘えた考えのままフェイトを送りだした自分を殴りたくなったが、今は一刻も早くフェイトの元に向かうのが先決だ。  
「アルフ！」

時の庭園の大広間。通称玉座の間に続く長い廊下を走り渡ると、扉の隅っこでアルフを見つけた。

膝を抱え、ふさふさしている狼耳を手で押さえながら、怯えるように震えるアルフの姿がそこにあった。

「ユウヤ！」

オレの声が届いたのか、パツと顔を上げてオレに駆け寄った。

「お願いだ！ フェイトを助けて！」

アルフの必死の形相にオレは目の前の扉を見る。そこから小さいが、悲鳴のような声が聞こえてきた。

「……………下がってろ。アルフ」

「あ、ああ」

オレの言葉に従い、数歩を後ろに下がるアルフ。オレはそれを確認すると、待機状態になっているナイトに命じた。

「ナイト。Sモード」

インビシブル・エア

腕輪から風王結界を纏った剣に形態変化する。それを確認すると、ナイトを振り上げ、

「……………はあ！」

と裂帛の気合を込めてナイトを振り下ろす。

すると、ナイトに纏わせていた風が一つの塊となり、オレはソレ



を打ち出す。

ストライク・エア  
風王鉄槌。

アルトリアの使う攻撃方法の一つだ。

一つの塊として打ち出された風が扉にぶつかり、

——ドガアアアン！

盛大な音を撒き散らしながら、目の前にあった扉を吹き飛ばした。  
もうもう

濛々と埃が巻き上がる中、オレの目には一つの光景が飛び込んだ。

両手をチェーレンバインドで縛られているフェイト。機能性を失っ

たボロボロの防護服。バリフジャケットその所々に裂傷の痕。

「フェイト！」

背後から主の名前を叫びながらアルフが駆けだす。オレもその後を追う。

「大丈夫かい。フェイト」

フェイトを縛っているバインドを壊し、壊れ物を扱うように抱き抱えるアルフ。

「アルフ……？」

どうしてここに？　と意味を込めながら、アルフの名前を呼ぶフェイト。プレシアに痛めつけられたせいで、フェイトの声は普段以上に弱々しかった。

「フェイト、立ちなさい。まだ終わってないわよ」

奥から女性の声が聞こえてきた。オレはソイツを睨むように見る。そこにはフェイト同様、露出の高い服装を着た40後半のやつれた顔をした女が居て、手には鞭が握られていた。

プレシア・テストロッサ。

フェイトの母親であり、将来癒せない傷を与える元凶。それが今、オレの目の前に立っていた。

「……はい」

プレシアの言う通り、ボロボロになった体に鞭を打って、アルフの手から降り、立ち上がるとするフェイト。

「あ」

しかし、プレシアの虐待により自分の意志では立ち上がることも出来ず、床に崩れ落ちるフェイト。

「アルフ。フェイトを休める所に運んでくれ」

「ああ」

アルフは崩れ落ちたフェイトを抱え、素早く玉座の間から出て行った。

「……で、あなた誰なの？ 随分勝手なことをしてくるようだけど」

ギロリとオレを睨みつけるプレシア。扉を壊し、フェイトの虐待を邪魔したオレにさどご立腹のようだ。

親に最悪な印象を与えてしまったようだが、そんなのはどうでもいい。

「アンタの娘の協力者だ」

とりわけ娘の部分を強調してそう言った。案の定プレシアは娘の単語に反応し、ピクリと眉が動いた。

「そう。あなたが……。どうせならもう少し常識のある協力者を選べばいいのに。本当、使えない子」

蔑むようにそう零すプレシア。

その言葉を聞いて、オレのこめかみに青筋が立った。

「おいコラ。使えないってのはどう言いた見だ。フェイトはちゃんとしてめえの言いつけ通り、ジュエルシードを持ってきただろ」

「口の聞き方を知らない子供ね。まあいいわ。そうね。確かにあなたの言う通り、アレはちゃんとジュエルシードを持って来たわ。でもね、足りないの。私は21個のジュエルシードがどうしても必要なの。それなのに、アレは6個しか回収してこなかった。最低でも12個は回収して来ると思ったけど、やっぱり駄目ね。アレに期待した私が馬鹿だったわ。所詮は出来そこないのガラクタね……」

淡々と酷い言葉を零し続けるプレシア。

オレはそれを黙って聞いた。

原作を知っているから、プレシアの目的や想い。そして、そのせ

いで狂気に堕ちてしまった理由を知っているし、理解もできる。

オレだって、プレシアの立場になったらそうしてしまうかも知れない。

「だから罰を与えの。私の期待を裏切り、のうのうとこんな菓子で、私の機嫌をとろうと浅ましい知恵を働くガラクタに」

それでも……。

「黙れ……」

小さく、吐き捨てるように言葉をプレシアにぶつける。

「てめえが、ジュエルシードを必要なのはよく分かった。けどなあ！」

オレはギラリと目の前のプレシアに、確固たる殺意を込めて言い放つ。

「それで、フェイトを傷つけていい理由にはならねえんだよ！」

たった一人の優しかった母親を求めるフェイト。

そのために、フェイトは心身共にボロボロな体に鞭を打って、母親の願いを叶えようとする。

そんなフェイトを、自分勝手な都合で傷つけていいわけがない！

「約束しろ。てめえの望み通り、ジュエルシードは全部回収してきてやる。だから、もう二度と、フェイトを傷つけることだけは、しないでくれ……」

懇願するように、オレはこの世でもっとも許せない女に頭を下げる。

「……あなた、どうしてそこまでアレに固執するの？ アレとは偶然出会っただけでしょ。そこまであなたが擁護する義理はないはずよ」

フェイトに対するオレの態度に、プレシアは不思議そうに訊いた。そんなのは決まっている。答えはもうでているから。

「オレはただ、フェイトに幸せになってもらいたいだけだ」

「……………」

オレの答えにプレシアは何も答えない。

もしかしたら、この行為は無駄なことかも知れない。プレシアの心には失ったアリシアで一杯だから。

それでも、プレシアの狂った心に、ほんの少しの親心があると信じて、オレは頭を下げたんだ。

オレは頭を上げ、眼前に居るプレシアをジッと見る。

伝えたいことは伝えた。

オレは踵を返して玉座の間から出て行った。

少年が玉座の間から出て行くのを確認すると、私は先程アレが言っていた少年の名前を思い出す。

アレが、現地で見つけた協力者——確か、ユウヤと言ったかしら。あの子の理由がいまいちが分からなかった。

アレから話を聞いた時は、単にジュエルシードを横取りするのが目的だと思っていたけど、こうして話をしてみれば、私の思い描いた理由とかけ離れていた。

アレの幸せ……ね。

はっ、馬鹿馬鹿しい。アレの正体がなんのなのかを知らないから、そんなことが言えるのよ。

クスッと笑みを零れた。

アレの正体を知った時、あの子、一体どんな顔をするかしら。それを想像すると、にやけた顔が元に戻らなくなった。

そう。アレはただのまがい物。アリシアに似たただのガラクタ。

そんなアレに感情移入するあの子に、私は同情さえ覚えた。

どうせ、アレの正体を知ったら、あの子はきっと絶望するでしょう。

……私のように。

自分が信じた現実が、ただの幻想だということに、きつと絶望するはず。

そんなことを思いながら玉座に座ると、アレが私のご機嫌とりの

為に買って来た菓子が視界に入った。

自分の失態をこんな形で誤魔化そうとするアレの考えの浅さに、私は苛立ちを覚えた。

「……………」

私はそれを掴み、放り投げる。

「っ！」

すると、箱がその場から跡形もなく消えた。

「こらこら、食べ物で粗末にしちゃいけないよ」

唐突に、一人の男が壊れた扉の近くに現れ、私にそう言った。

長身で細身な体格。金の瞳に長い白髪。そして、病的なまでの肌の白さ。

服は伸びきった白いＴシャツに、黒い長ズボンと言った簡素な服装。

そんな男の手には、先程消えたはず箱を持ち、ニヤニヤと不愉快な笑みを浮かべながら私を見ていた。

「……居たの」

私は冷ややかな視線を男に向けるが、男はどこ吹く風と言った体でいた。

「うん。あの子がアレの協力者かぁ。随分としつけのなっていない子供だったね」

「……そうね」

この男と意見が合うのは癪だが、それでも同意しざるにはおれなかった。

「にしてもあの子。中々面白いことを言ってたね。オレはただ、フエイトに幸せになってもらいたいただけだ。だって。臭い台詞聞かされたお陰で、危うく笑い殺されるとこだったよ」

勝手に似てない物真似を披露して、勝手にゲラゲラと爆笑しだす男。

不愉快な哄笑だ。

それが終わると、男は手に持った箱を開けて中の菓子を貪り始め

た。

「……悪くない味だね。食べる？」

「いないわ」

「そう」

男はものの数分で箱の中にあった菓子を盥上げた。空になった箱はそのまま消えた。

「……で、ジュエルシードは何個集まったの？」

「6個よ」

そう言っ、私はアレから受け取ったジュエルシードを男に見せる。

「へえ、この短期間で6個も集めるなんて大したものだね」

「どこが。あれだけ時間があって尚且つ、協力者を手に入れたと言うのに、たったの6個しか回収できないなんて、使えないにも程があるわ」

そう吐き捨てるように言うと、男がニヤニヤと口を歪めた。

「いいねいいね。貴女のアレに対するその態度。見ていて心が躍るよ。さっきのアレをいたぶる様なんで、笑い過ぎて危うく爆笑死するところだよ」

思い出し笑いをするように、ケラケラと小さく笑う男。

どうやらアレに罰を与えている姿を見られていたようだ。

「……悪趣味な男」

そう呟いた瞬間、さっきまで壊れた扉の近くに居た男が突然私の目の前に現れた。

「あはは。悪趣味とは心外だなあ。これはれっきとしたただの趣味だよ。植物の成長を観察する趣味があれば、動物の成長を観察する趣味もあるし、はたまた人間を観察するのが趣味だってのもあるよ。それと同じで、ぼくは他人の不幸や不運。不憫や不出来。不浄や不実をただ単純に、楽しみながら笑いながら喜びながら味わいながら舐めまわすように見て観て診て視て見て、一部の隙も逃さないように観察して、ぼくの脳髓に快楽を満たすんだ」

そう言つて男はニヤアと歪んだ笑いを浮かべる。

「それがぼくの、唯一無二の趣味。それ以外は極々平凡な、どこにでもいる普通の人間だよ」

いきなり現れる人間のどこか普通なのよ。

と思ひながら、男の趣味にふと疑問が過る。

他人の不幸を観察するのが趣味なら、私に協力してる時点で男の趣味から離れている。

「……ならば訊くけど、貴方はどうして私に協力してくれるの？」

そう。私は今の今までこの男の目的を知らないし、なんの興味もなかった。

ただ突然、この男は私の前に現れたのだ。

約一ヶ月前。

男はなんの前触れもなく、26年前に失った私の一人娘——アリシアの肉体を安置している部屋に侵入して居た。

私はその光景に最初は驚き、次に怒りで頭が埋めつくされた。

アリシアの居る場所に土足で踏み込んだことに。私以外の人間が居ることに、想像を絶する拒絶反応が体を駆け巡ったからだ。

私はその男を追い出す——もとい殺そうと殺傷設定にした魔法を放った。

しかし私の魔法はその男に通用せず、開閉一番に私にこう言った。

「おいおい。少しは冷静になりなよ。さっきの魔法、ぼくが避けてたらこの子に当たってたよ」

ま、それはそれで楽しいけどね。

と男はそう言つてケラケラと笑った。

勿論、男が言ったようなことは起きない。アリシアの眠るポットの強度は、あの程度の魔法ではビクともしないのだから。

「……貴方、誰？」

それよりも問題は、私の魔法を苦もなく防いだ事実だ。

仮にも大魔導士と呼ばれてた私の魔法を——必殺の魔法を、目の





長い呪文らしきモノを唱え終わると、アリシアの体が突然光りだした。

「っ！？ 貴方！ 一体アリシアになにを！」

「まあ落ち着いて。ほら、光が消えたよ」

男の言う通り光は消え、そこには私のアリシアが変わらず眠っているだけだった。

「これで大丈夫。この子の生体反応を確認してみてよ」

「……………」

私は言われた通り、アリシアのバイタルを確認する。  
すると、

「なっ……………」

モニターの数値を見て、私は開いた口から閉じなかった。  
アリシアの脈拍、呼吸、血圧、体温等々が徐々にだが反応し始めた。

「あ…………ああ！」

私は歓喜の叫びを上げ、アリシアのポットに駆け寄る。  
生きてる。アリシアが生きてる！

この26年間、様々な方法を使ってアリシアを取り戻そうとし、  
ことごとく失敗した。

だがしかし、それも今日で終わった。

アリシアは生き返ったのだから！

今はまだ徐々にだが、バイタルが安定したらアリシアは目を覚ます。  
す。

そして私が長年望んだ親子の関係を取り戻すことができる！

「喜んでいるところ悪いけど、そのままじゃこの子は一生目覚めないよ」

そんな私の喜び、男は躊躇いも言い辛さもなく、ただ楽しそうに  
笑いながら、崖から突き落とすように私の期待を地に墮とした。

「さっきのは器に魂を定着させただけで、この子が目を覚ますには  
別の方法が必要なんだよ」

「それは一体、なんなの!？」

男に対する警戒心は彼方に消え、掴みかかる勢いで男に訊いた。

男はそんな私の必死さにニヤニヤと口を歪めながら答えた。

「安心してよ。この子が目を覚ます方法はちゃんと用意してあるよ。問題は、それを実行する魔力が必要なんだ。けど生憎、ぼく達人間の魔力量じゃ器に魂を定着させるのが限界。目を覚ますには膨大な魔力が必要なんだ」

「それじゃ、どうすれば!」

私が問い詰めると、男は答えを言った。

「ロストログア。ジュエルシード。ソレに内蔵する魔力を利用すれば、貴女の娘は目を覚ますよ」

「……………っ!」

ジュエルシード。願いを叶える宝石。確か、前に文献でその名前を見た覚えがある。確かにソレを使えば。

「ぼくが掴んだ情報だと、最近スクライアの子供がソレを発掘したようだよ。ま、三日後には管理局に輸送する手筈になっているけどね」

男はそれだけ言って、私に視線を向ける。

その視線にはどうすると問いかけられてる気がした。

「ジュエルシード。ソレを手に入れば、アリシアは目が覚めるのね?」

この男は信用できない。でも、この男が使う魔法は信頼できる。

私がどれだけ手を尽くしても、アリシアを生き返らせることは出来なかった。

けどこの男は、ものの数分でアリシアを生き返らせる一歩手前で進んだのだ。

悔しい気持ちはあるが、それでアリシアが生きるなら、こんな気持ちなんて捨ててやる。

「勿論だよ。ソレがあれば、貴女の娘は完全に生き返る。失った絆を、こんなはずじゃない未来を、貴女は取り戻せるよ」

ニヤリと顔全体を歪めて笑う男は、最後にこう言った。  
「この、アルハザードの魔法でね」

それが、私と男が協力関係になった過程だ。

しかし私は今の今までこの男の目的を聞いていない。

ただ、なんとなく。気まぐれに訊いてみただけだ。

「ん？ そんなの決まってるじゃないか？」

男はニツと笑い、ずいと自分の顔を私の顔に近づける。

「ぼくみたいな最低最悪な人間に、貴女が成し遂げる筈だった願いを、こんなクズ野郎に頼むしかない貴女の哀れさや悔しさをこの目で観察するのが楽しみだからだよ」

「……………っ！」

「そんなぼくに、貴女は救われる。娘を失った貴女の空虚な心をぼくが。ねえ、どんな気持ち？ こんな最低最悪な人間に、自分を救ってくれと頼まざる得ない貴女の気持ち。ぼくに教えてよ」

ゲラゲラゲラゲラ。

そう言っ、男は笑い上げる。

恐気染みたように顔を歪め、狂喜染みたように笑い、凶器染みた声量で私の鼓膜を突き刺す。

そのキョウキに、私は心底後悔し、人生で二度目の不幸を嘆いた。一度目はアリシアの死。そして二度目は、この男と出会ってしまったことだ。

このままこの男と行動を共にしたら、間違いなく私の人生は破綻し、心は消失するかもしれない。

私と言う存在が、この男好みに変わるかもしれない。

それはもう、私じゃない。別の私に変貌してしまう。

そう直感できた。

縁を切るなら今だと、本能が警鐘を鳴らす。

そうだ。逃げよう。この男が現れない場所までどこまでも遠くへ逃げてしまえ。

こんな、気持ち悪い人間から。

「……………」

だけど、

「いいわ。教えてあげる」

それでも私は、

「私の今の気持ちを」

アリシアが生き返るなら、

「私は貴女に」

私の全てを捨ててやる。

どうせ終わりを迎える体だ。そんな私に恐れるモノはなにもない。  
アリシアが生き返るなら、どんなことでも全部受け止めてやる。

だから言ってやれ。私の今の気持ちをこの男に……。

「×××××」

「……………」

私の気持ちを聞いて、男はピタリと電池が切れた人形のように止まる。顔は歪んだ笑みから無表情に変わり、私を見る。

観る診る視る看る。一部の隙も逃さず、観察するように見る。

そして一言零す。

「そう」

私に対する興味が失せたのか、顔を遠ざける。

「それじゃ、ジュエルシードはぼくが預かっておくよ」

そう言ってジュエルシードと一緒に男は玉座の間から消えた。

「……………」

玉座の間で独りきりなる私。

ただ一息吐いて、私は呟く。

「アリシア。もう少し……待っていて」

玉座の間から出てオレはすぐにフェイトの元に向かった。  
アルフに念話で場所を訊いて、すぐさまそこに向かう。

辿り着くとオレはすぐに全て遠き理想郷を召喚して、フェイトの裂傷を癒した。

しかし癒したのはあくまで傷だけ。体力を元に戻すことはできない。

だからオレはしばらく休めとフェイトに言う。

しかしフェイトは、

「休んでる暇はないよ。早くジュエルシードを集めないと。母さんが待ってる」

オレ達の頼みを静かに拒絶した。

「大丈夫だよ。傷、治してくれてありがとう」

それ以上、なにも言えなかった。

フェイトの固い意志の前じゃ、オレ達の想いは通じない。

結局、今のフェイトの頭にはプレシアのことしか考えていないのだと、オレは改めて思い直した。

「……………」

だとしたらしょうがない。

オレが出来ることは、これ以上フェイトが傷つかないように、全力でサポートするしかない。

アルフもオレと同じ考えなのか、それ以上はなにも言わなかった。その後、オレ達は時の庭園を後にして、マンシヨンの屋上に帰って来た。

フェイトは帰って来て早々ジュエルシードの探索を始める気だったが、くうとフェイトのお腹から小さな音が鳴った。

「あ……」

お腹の音が鳴ったことが恥ずかしいのか、顔を赤らめるフェイト。「……とりあえず、まずは腹ごしらえだな」

オレがそう言うのと、フェイトは少し悩むがすぐに恥ずかしそうにコクンと頷いた。

オレは携帯を開き、GPSで近くの飲食店を検索する。結果、ここから歩いて10分の距離にあるファミレスで昼飯を済ませた。

ファミレスを出る頃には空は夕焼け色に変わろうとしていた。オレ達はそのまま海鳴市に向かい、市街で適当に選んだビルの屋上からジュエルシードの搜索を始めることにした。

オレとフェイトは防護服バリフジャケットに着替え、アルフは狼形態になる。

「バルディシュ。どう？」

『Recovery complete』

「そう。頑張ったね。えらいよ」

昨日の戦いで傷ついたバルディシュだが、修復が終わったようだ。

「感じるね。私にも分かる」

狼形態になったアルフがそう言った。

「うん。もうすぐ発動する子が、近くに居る」

フェイトも同意する。しかし、オレには全然ジュエルシードの反応を感じられない。

どうやらオレには、精度の高い魔力感知が出来ないようだ。確か原作だと、一、二時間後ぐらいに発動したな。

「……あ」

いや、待て。なにもココまで忠実に原作通りに進めなくてもいいんじゃない？

既に無印も後半。管理局も近くに居る筈だし、今日介入できなくてもまた別の日に介入して来るだろう。

そうすればフェイトの負担もかからないし、今日一日はゆっくり休ませることが出来るはずだ。ついでにジュエルシードも確実に一個手に入る。

うん。それがいい。

「フェイト、アルフ。二手に別れてジュエルシードを探そう」

オレがそう提案すると、二人はうんと頷いた。

「よし。それじゃ、オレは——っ!？」

突然、さっきまで感じる事ができなかったジュエルシードの反応を感じた。しかも、膨大な魔力反応だ。

オレが感じたってことは、既にもう。

「行こうユウヤ」

そう言ってフェイトは素早く空を飛んで、ジュエルシードは発動した場所に向かった。

次いでアルフも空を飛ぶ。オレも慌ててその後を追う。

「……………っ！」

一体どうなってんだ？

発動にまだ時間があるはずだったのに、こんなに早く。

もしかして、コレが原作の強制力か？

ちくしょう！ コレじゃ結局フェイトに無理させちまう。

しょうがない。昨日考えた通り、ジュエルシードはフェイト達に任せて、オレはクロノをどうにか抑えよう。

気付かれないうちに、なにが起こったのか分からないうちに一撃で沈め、気絶させてやる。

ギユウと拳を握り締めながら、オレはこれから会うことになるクロノに対し、容赦を捨て、非情になれるように自分に言い聞かせる。例え、【なのは】じゃ結構好きなキャラだとしても。

そんなことをしながら現場に辿り着き、ユーノが張ったであろう封時結界に侵入すると、そこにはなのはと有澤が居て、原作通りジュエルシードが取り込んだ木の化物と対峙していた。

それを見てフェイトはバルディシュをデバイスフォームにして、木の化物に向ける。

「……バルディシュ」

『Photon Lancer』

フェイトの周囲に数個のフォトンスファイアが生成され、そこから槍のような弾が数弾撃ちだした。

「……………」

しかし、直撃する寸前の木の化物がバリアを張って、フェイトの攻撃を防いだ。

「生意気に、バリアまで張るのかい」

「うん。今までのより強いね。それに」

フェイトは数メートル前方に居るなのは視線を向けた。

「あの子も居る」

フェイトの攻撃に反応したのか、木の化物が根を使って攻撃を仕掛けてきた。

それを見て、なのはと有澤は咄嗟に飛び上がり、根の攻撃を躲した。

「あの根っこ、邪魔だな。フェイト。アレはオレがどうにするから、その隙にあのバリアを破れるか？」

「うん。大丈夫」

「よし、そんじや行くか。ナイト、Sモード」

腕輪から風王結界を纏った剣に形態変化すると同時に、オレは根を目掛けて突っ走った。

すると有澤がオレと同じように根に向かって突っ走るのが見えた。どうやらお互い役目が一緒のようだ。

有澤もそれに気づき、見るからに嫌そうな顔でオレを見る。

その顔を見て軽く殺意が湧くが、今は目の前の化物に集中しよう。

「おい、あの根っこには気をつけろよ」

オレに向かって伸びてきた三本の根をそれぞれ叩き斬りながら有澤にそう言う。

「それはこっちの台詞だ。せいぜい根っこに足を絡まれないように気をつけるんだな。ザゲル！」

有澤が嫌味な口調で言い返すと、目の前に襲ってきた五本の根を電撃で焼き焦がす。

「てめえ、人が親切に忠告してやってんのに、なんでその言いぐさ！」

「はっ、そんなのお前に言われるまでもなく分かってるっの。つか、人の心配をしてる暇があったら、根っこ斬るのに集中でもしとけ。その剣は飾りか？」

「ああん。だったらてめえの体で試してやろうか？」

「はっ、そんななまくら剣で俺を斬れると思ってんの？ 無理無理」





すると上空に飛んでいたのはがレイジングハートで木の化物を狙い、

「打ち抜いて！ デイバイン！」

『Buster』

——ドガンッ！ と轟音が響きながら桜色の砲撃が発射されるが、木の化物が張るバリアに防がれる。

さすがにあのバカみたいな威力の砲撃でも、ジュエルシードの魔力で張ったバリアは壊せないか。

ロストログアの名は伊達じゃないな。

それを見てフェイトが右手を木の化物に突き出すと、金色の魔法陣が展開され、

「貫け轟雷！」

『Thunder Smasher』

——ドガンッ！ となのはの砲撃と同じ轟音が響きながら、雷撃の砲撃を発射する。

それも当然木の化物がバリアを張って防ぐが、二方向からの強力な砲撃を防げるほどの強度も制御もあの木の化物では無理なのですぐに破壊される。

はすだった。

『裕也。ジュエルシードの魔力が急増してる。アレではバリアは壊せない』

ナイトの予想外の報告にオレは？ になり、

「なっ!？」

次の瞬間にはナイトの言う通り、木の化物は二方向から迫る砲撃を防いだ。

どういうことだ？

確か原作だとあの攻撃で、木の化物を倒れるはずだ。

一体この世界になにが起こってんだ？

フェイトもなのはも、自慢の砲撃を防がれたことに動揺を隠しきれないようだ。

「……………」

どうする。このままじゃジュエルシードを回収できない。

どうすれば、あのバリアを破壊できる？

宝具を使うか？ いや、オレが今使える宝具じゃ、ジュエルシードごと壊してしまう。

けどそれ以外に、あのバリアを破る方法はオレには無い。さすがにアルトリアの剣技じゃあのバリアを壊すことはできないし。

どうする？ このまま放っておいたら周辺に被害が出てしまう。こうなったら、ジュエルシードごと破壊するか？

いいや駄目だ。ありえない。

そんなことしたらプレシアとの約束が破綻する。

しかし他に方法が。

いや、諦めるな。思考止めるな。考えろ。あのバリアを破る術を考えるんだ！

「どけ」

そう言っって、有澤が後ろからオレを蹴った。

「……………っ！」

突然のことになんの反応も出来ずに、そのまま転がるオレ。

「てめえ！ なにしやがる！」

すかさず起き上がり、有澤に詰め寄る。

「なにつて、そこに居られると邪魔だからどかしたただけだ」

「だったら言えよ！ てめえの口はなんの為にあるんだ！」

「あー、うるさいうるさい。文句言うだけなら大人しく下がってろ」  
一歩足を進めて、オレの前に立つ有澤。

「あのバリアは俺が壊す」

そう言っって有澤は右腕を上げ、

「バオウ・クロウ・ディスグルグ！」

そこから巨大な龍の腕が出現した。

「……………っ！」

オレと有澤以外の全員が、驚いた顔で巨大な龍の腕を凝視する。

そりゃそうだ。こんな魔法、存在しないんだから。

「コレなら……どうだあ！」

そう言って、有澤は巨大な龍の腕を思いっきり木の化物に向かって振り下ろした。

——ドゴオオオン！

有澤の攻撃に反応してバリアを張る木の化物だが、あまりの威力にすぐに瓦解し、そのまま木の化物に直撃した。

そのまま木の化物は消滅し、残ったのはジュエルシードだけだった。

「いまだ高町」

有澤の言葉にハッと我に戻るなのは。フェイトも同じように我に戻り、すぐさま封印魔法を発動させた。

「ジュエルシード。シリアル7！」

「封印！」

するとジュエルシードが発光し、辺りを照らす。光はすぐに治まり、封印し終わったジュエルシードが宙に浮いたままの状態になった。

それを確認すると、二人はお互いを見る。

なのはそのまま宙に浮いまま、フェイトはなのはと同じ高度まで飛ぶ。

協力はここまで。今から奪い合いの時間だ。

二人の間にはなんとも言えない緊張感があった。

「ジュエルシードには、衝撃を与えてはいけないみたいだ」

「うん。夕べみたいなことになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀そうだもんね」

敵である自分のデバイスまで心配するなのはの言葉を聞いて、少しだけ驚くフェイト。

「……だけど、譲れないから」

バルディッシュを構え、言い放つフェイト。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど」

『Device mode』

シューティングモードから基本形態に戻すと、なのはレイジングハートを構えてフェイトに言った。

「私が勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないって分かってももらえたら……お話、聞いてくれる？」

「……………」

フェイトは何も言わず、ただジツとなのはを見るだけだった。

二人ともデバイスを構えたまま、お互いを見ていると、計ったかのように同時に動き始めた。

「……………っ！」

お互い距離を詰めながら自分のデバイスを振り、お互いを狙った。すると、バルディシュとレイジングハートがぶつかり合う寸前、二人の間から突然、第三者の人間が現れた。

クロノだ。

バルディシュはクロノのデバイスで防がれ、レイジングハートは右手で掴まれる。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！」

突然の登場に、今度は俺以外の全員が驚いた顔でクロノを見る。

「時空管理局執務官。クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

そう言って、なのはとフェイトを交互に見ながら訊いた。

クロノは今二人に注意がいつて、オレを見ていない。

チャンスは今だ！

オレはアサシンの技能、気配遮断を使い、すぐさまクロノの背後をとる。

当然クロノは気付いてない。

悪いが、少しだけ眠っといてくれ。

そのままナイトを振り上げ、オレはクロノの背中を狙って振りお――。

「後方不注意だぞ。ハラオウン執務官」

始めて聞く男の声が、オレの耳に届いたと同時に、オレの体はそれ以上を動かなくなった。

「……………っ!？」

見ると、オレの体はいつの間にか多数のリングバインドとチェー  
ンバインドで雁字搦めにされていた。

「なっ…………」

男の声で、クロノが後ろに居るオレに気付き、咄嗟にその場から  
離れてオレと距離をとった。その顔にはいつの間にと、焦りが見て  
分かった。

「…………ハラOWN執務官。いくら驚いたからと言って、敵の前でそ  
んな顔をするな。舐められるぞ」

すると男がやれやれと言った口調で、クロノにそう言った。

「っ! すみません」

クロノがすぐに謝った? それほどの実力なのか?

男を見ようにも、首まで多重のバインドをかけられているせいで、  
動かすことができない。

「……………」

いや待て。そんなことよりなんだこの状況? 原作にクロノ以外  
の管理局が地球に現れるなんてありえないはずだ。

どうということだ?

「てめえ……………なにもんだ?」

オレは、背後に居るであろう男に尋ねると、男はオレの前に移動  
してオレに姿を見せた。

バリアジャケット

クロノ同様、黒い防護服を着た赤髪青目の長身の男だ。180は  
超える身長で、見た目からして20代後半くらいだろう。

「執務官のアロウン・カーティネスだ。そこに居る小さいの仲間  
だよ」

## 無印編 六話目（後書き）

感想などはお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。。

## 無印編 七話目

本局にある私専用の執務室で捜査資料の整理をしていると、秘匿回線から通信がきた。

「……………」

この回線から通信が来る人物は限られているので、誰なのかは容易に想像できた。

「はい。カーティネスです」

「俺だ」

モニターに映ったのは管理局の伝説と呼ばれた男。ラルゴ・キール元帥だ。

「お久しぶりです。お元気そうでなによりです」

「おめえもな。で、急で悪いがお前さんに頼みごとがあるんだ」

「頼みごと、ですか？ 生憎ですが、今は例の特務の捜査で手一杯です。なので他を当たってくれませんか？」

そう言いながら視線を先程の捜査資料の整理を続ける。。

「それがそうもいかねえんだ。その頼みごとが、特務の手掛かりになるかもしれないだ」

元帥のその言葉に、整理している手が止まり、私はモニターに視線を戻した。

「……それはどう言う意味ですか？」

「三週間前に起きた輸送船の事故を知っているか？」

「ええ。話だけなら。確かロストログアを輸送している時に起こった事故でしたっけ。それが原因で、ロストログアは管理外世界に落ちたんでしたよね」

それを聞いた時は厄介な事件になるなあと思ったし、日にちもそんなに立っていないから、記憶に新しい。

「ああそうだ。そしてそれが事故じゃなくて、人為的に仕組まれたとしたらどうする？ しかもそのロストログアが、高い魔力を内蔵



してたとするなら」

「まさか……」

なるほど。それは確かに私にはとっては重要だな。

「そうだ。調べたところ、巧妙に隠しているがアレは人為的な事件だと発覚した。そして、現段階でロストログアを最も欲する輩と言え、もしかしたらアレが関わっているかも知れん」

「そうですか。……分かりました。情報ありがとうございます。早速現地に向かい、アレの搜索を開始します」

「まあ待て。話しはそれだけじゃない」

元帥の制止に、通信を切る手が止まる。

「と言うと？」

「既にそのロストログアの回収任務がくだっている。表向きはその周辺地区の哨戒任務だが、相手はロストログア。例えば管理外世界でも、事件が起きれば回収するようにと命じておる」

確かに、基本管理局は管理外世界との接触を禁止されているから、下手に動くことはできない。

「そうですね。そうになると、下手したら私とそのチームが現地で遭遇するかも知れませんからね」

そうになると、大変面倒なことが起きるだろ。

「そうだ。まだアレの存在を表に知られるわけにはいかん。と言うことで、お前さんにはそのチームの一員になって現地に向かって欲しい」

妥当な結果だな。そう思い、私は頷く。

「分かりました。でも任務中にアレに関することが起きましたら、私のやりたいようにしますので、そのようにチームの長にはお伝えして下さい」

「分かつとる。アレに対抗できるのは局の中でもお前さんしかおらんからの。向こうには俺がうまいこと言っとくから安心しろ」

「ありがとうございます。それで、その回収任務の責任者の名前は？」

「リンディ・ハラオウンだ」

ああ、あの人が……。

その後、元帥から必要な情報を教えてもらうと、今度こそ通信が切れた。

「さて、久しぶりに進展がありそうだ」

局の上層部から例の特務を言い渡されて早一年。表の仕事と並列して捜査しているが、未だにアレの尻尾すら掴めない。

唯一の手掛かりが、アレはロストログアを収集することが目的のようだ。しかも高い魔力を内蔵している物を集中的にだ。

最初是一个のロストログアが消失したのが切っ掛けだった。

高密度の魔力が内蔵されたロストログアで、発動すれば都市一つは余裕で崩壊するだけの力を持つ、危険きまわりの代物だ。

そして、局員がその消失したロストログアを捜索中にアレと遭遇してしまい、捜索に関わった局員は全員全滅した。

一人の生存者を除いて、皆殺しだったようだ。

圧倒的な力。一对多数でありながら、傷一つも付けられずに全滅されたのだ。

上層部はその事実に関心感を覚え、情報を外部に漏らさないよう、この事件を機密扱いにして、秘密裏にアレの関する捜査を特務として決定したのだ。

下手に人員を割いてもアレの前では余計な犠牲が出るだけだからな。

そしてその特務を命じられたのが私だ。

唯一、あの圧倒的な力に対抗できる力を持つ者が、局では私しか居なかったからだ。

上層部から特務を請け負うことで、アレの捜査を進めるごと一年。あの局員全滅以降、アレを補足する事はできなかった。

いや、アレが関与していると思われる事件なら幾つがあったが、それも途中で手掛かりが消えていた。

お陰でこの一年、捜査は迷宮で、常に後手に回されている。

だが、

「ようやく見えた尻尾だ。絶対に掴んでみせる」

私はデスクから立ち上がり、資料の整理と現在抱えている表の事件などを他に回す様に、補佐のレジナ・マースクに通信で頼み、管理外世界に行く準備を始めた。

その後、私は巡航Ⅰ級8番艦アースラに乗り込み、第97管理外世界、惑星名「地球」の周辺地区を哨戒しながら現地観測をしていた。

観測から三日後、地球から小規模だが次元震の発生を感知した。アースラは直ちに原因を解明した。結果、次元震の発生原因は、先日の輸送事故で地球に落ちた次元干渉型ロストログアー―ジュエルシードの暴走だと判明。

アースラは哨戒任務から、本来の回収任務に内容を変更し、現地向かった。

ただ一つ、気がかりなこともあった。

小規模次元震には六名の魔導士の存在を確認したのだ。

局が動く前に民間人が先行調査の許可を求めていたので、一名はその民間人だと思われるが、残りが私にとってネックだ。

その残りのどれかがアレか、もしくはその息にかかった者か。もしくはそうではないか。とにかく、事情を聞いてみないと分からないいな。

「小規模とは言え、次元震の発生はちょっと厄介だもんね。危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないと。ね、クロノ」

オペレータからの報告を聞きながら、ハラオウン艦長はお茶を飲みながら、息子のクロノ・ハラオウン執務官にそう言った。

「大丈夫。分かっていますよ艦長。僕は、その為に居るんですから」  
中々頼もしい物言いだ。流石はアースラの切り札と呼ばれているだけある。

「ハラオウン艦長。私も現場に降りる許可を頂けませんか？」

「そう？ クロノの一人でも大丈夫だと思うけど」

「念には念をですよ。報告を聞く限りじゃ、魔導士は最低でも六人は居ます。ハラオウン執務官でも十分対処できる数だと思いますが、現場ではなにが起こるか分かりませんから」

「それもそうね。それじゃ、お願いできるかしら？」

「了解です」

チラリとハラオウン執務官を見ると、少しムツとなっていた。

自分一人でも大丈夫だと言いたげだが、私の方が正しい判断だと思ひ、何も言つてはこなかった。

「それはそうと、ギール元帥から聞いてはいるけど。今回の任務つて、貴方が担当している特務に少なから関わっているようね」

「はい。基本はハラオウン艦長の指揮に従いますが、任務中に特務に関係がでてきた場合は私の任務から離れます。当然、艦長の指揮から外れることになります」

「そう。分かりました。そうなった場合は一言報告をお願いね。それと、くれぐれもその特務で私達の邪魔だけはしないでちょうだいね」

やんわりと、笑顔で忠告して来るハラオウン艦長。

「了解」

表面上は協力的だけど、裏では厄介者だと思われてるようだ。

まあいい。こっちはこっちの仕事だけに専念しよう。

そんなことを思っていると、オペレータから報告がきた。

「艦長。現地でジュエルシードの発動を感知。モニターに出します」

ブリッジの大型モニターに映ったのは、恐らくジュエルシードが取り込んだ木の暴走体。それと対峙する子供の魔導士の姿が映った。

「現地では既に五名による戦闘が開始されているもようです」

「中心となっているジュエルシードは、動作不安定ですが無差別攻撃の特性を見せています」

む、魔導士の攻撃を防いだ。ほう、バリアまで張るのか。

なるほど。確かにコレならアレが欲しがるのも頷ける。

ん？　なんだアレは？

「ハラオウン執務官。アレをどう思う？」

「？　どうとは？」

突然話しかけられたハラオウン執務官は、私の質問の意味が理解できないのか不審げな顔で私を見た。

それを聞いて私は心中でため息を吐いた。

執務官と言ってもまだ若いな。

「今、暴走体と戦っている二人の少年をよく見ろ」

それを聞いて、ハラオウン執務官や他のクルーも言われた通りモニターに映る二人の少年を見る。

一人は赤い騎士服を着ていて、一人は黒いマントに赤いブローチを付けていた。

どうやらあの二人が暴走体の攻撃手段を奪う役目のようだ。しかしその攻撃方法がおかしい。

二人の少年が暴走体に攻撃する様を見ると、全員驚いた。

「気付いたか？」

「ああ。だがしかし、そんなのはありえない……」

目の前の光景を見てもなお、信じられないと言った顔でそう言うハラオウン執務官。

「ええ。そうね」

同じようにモニターの光景を見て驚き、息子の言葉に同意するハラオウン艦長。

「それは私も同感だ」

そう全員が驚くのも無理はない。

何故ならあの二人が使っている魔法。あんなのはミッドには存在しない。

「恐らく、現地の魔法技術だと思われませんが」

そう自分の考えをハラオウン艦長に伝える。

「だが、あの世界に魔法文明はないはずだ。もしそうだとしたら、

管理外世界に登録されるわけがない」

私の推論にありえないと否定するハラOWN執務官。

「でも現に、ミッド以外の魔法を使っているわ。一体どういこと？」  
困惑な表情を浮かべながら、モニターに映る二人の少年を見ながらそう呟くハラOWN艦長。

「可能性は三つあります。一つはあの世界は元々魔法が存在していた。しかしそこでは秘匿性の高いモノなのか、表には出さず裏で普及していた」

「確かに、それなら局も把握できないわね」

基本管理局は遠くから世界を監視している。

監視内容はそこに知的生命体が居るのか。

そして文明はあるのか。

あったとしてそれが魔法文明なのか。

それが、次元航行が可能な文明なのかを監視して判断する。

そして魔法文明もなく、次元航行が不可能だと判断すると、そこを管理外と登録する。

「そして二つ目は別の世界。私達も知らない未確認の世界にある独特の魔法体系を持った人物が、この管理外世界に流れ着いた」

管理局だとて万能ではない。どんなに次元世界全てを管理すると言っても、世界は多数に存在している。それこそ星の数にだ。

中には未確認の世界だってたくさんある。

「たまたま未確認の世界に魔法が存在し、たまたまその魔法を扱う人間が、たまたまあの世界に次元漂流者として流れ着いた。その可能性も絶対ないとは言いきれません」

「確かに……」

私の推測に信じられないと言った顔で頷くハラOWN執務官。

「それで、三つ目とは？」

ハラOWN艦長が最後の可能性の説明を求める。

しかし私は、

「ああ、すみません。無いです。語呂が良いのでつい三つと答えて

しまいました」

そう言って、ハラオウン艦長に頭を下げた。

「そうですか」

ハラオウン艦長は特に気にした様子もなく、モニターに視線を戻した。

するとモニターで驚くことが起きた。

ミッドの魔法を使う二人の少女の砲撃を暴走体が防いだのだ。

「あの威力の砲撃を二方向から受けてなお防ぎきるなんて……厄介だな」

あれじゃ並の砲撃は効かないと言われたようなモノだぞ。

私やハラオウン執務官ならまだ対処の方法があるが、あの二人の少女では荷が重いだろう。

これは私達が現場に行って鎮圧しなければならぬな。

「クロノ執務官にカーティネス執務官。すみ——」

ハラオウン艦長も同じ考えに至ったのか、私達の出動を命じようとすると言葉が詰まり、再びモニターを凝視した。

それはブリッジに居る全員も同じだ。勿論、私もだ。

何故なら、モニターには暴走体をどうすればいいのか困惑している四名の中で一人、黒いマントの少年が暴走体の前に立ちはだかった。

そして、右手を上げるとそこから巨大な龍の腕が出現したのだ。

黒いマントの少年は、ソレを暴走体に向けて振り下ろす。バリアで防ぐ暴走体だが、すぐにバリアは破られ、少年の攻撃で暴走体は消滅した。

「な、なんだ今の魔法？ いや、そもそもアレは本当に魔法なのか？」

そう言った同時に、我に返ったのか、頭を左右に振って意味もなくギューと拳を握り締めるハラオウン執務官。

恐怖と不安。恐らくそれらを耐えるために敢えてそうしているようだ。

それもそうだ。今まで自分が見てきた魔法とは全く違う、別の力を見せられ、しかもその威力が凄まじければ、誰だって恐怖と不安に駆られるだろう。

だかそれを、この小さな執務官は耐え、驚きながらもそれをどう対処するか思考を停止していなかった。

「……………」

これは評価を改めないといけないな。

モニターでは既にジュエルシードは封印状態になっているが、二人の少女が取り合いを始めそうな雰囲気醸し出していた。

ジュエルシードの近くで戦闘なんかされたら昨日の二の舞だ。早く現地向かわないと。

そう思い、私はハラOWN艦長に進言した。

「ハラOWN艦長、現場の出動命令の許可をください」

それを聞いてハラOWN艦長は私に頷き、先程言いかけた言葉をもう一度言った。

「それではクロノ執務官にカーティネス執務官。両者はこれより現地での戦闘行動の停止と、ジュエルシードの回収、魔導士の事情聴取をお願いします」

「了解です」

「あ、はい。了解です。艦長」

私達はそれに応え、転送ポートに向かう。

「気をつけてね」

するとハラOWN艦長が白いハンカチでひらひらと揺らしながら笑顔でそう言った。

「はい……行ってきます」

その行動のお陰で、さっきまで恐怖と不安で満たされていたブリッジの空気が少しだけ緩和されたに感じた。

ハラOWN執務官も、先程よりかはリラックスしたようである。なるほど。噂通りの人だ。

そんなこと思いながら、私は未確認の魔法を持つ少年達が居る現



地へと転送する。

「……………」

さっきは誤魔化したか、本当は三つ目の可能性はある。

しかしそれを言った所で、誰も理解できないだろ。

ソレは私と、局内でもほんのごく一部の人間しか知らされていない可能性。

そう、彼らが転生者だと言う可能性が……。

アラウン・カーティネス執務官。

噂は前から聞いていた。

凄腕の執務官で、魔導士ランクは空戦S+。殆どの捜査を一人で行なし、多くの次元犯罪を解決し、その首謀者である凶悪な次元犯罪者を全員逮捕してきた。

局員なら知らない人間は居ない有名人であり、当然、上層部も把握していた。

上層部は彼の實力を買い、彼に特務と呼ばれる選ばれた局員しか解決できない任務を多々与えた。

同じ執務官として、彼を見習うべきは所が多いし、尊敬もしている。

けど、どうしても僕には認められない所が彼にはあった。

それは、犯罪者に対しての容赦のない行動だ。

本来、魔法は非殺傷設定で使うのが規則だ。

魔法は強力だ。下手に使えば人の命など簡単に奪ってしまう

だが彼は、その魔法を殺傷設定にして平気で使う。

噂で聞いた話だと、彼が殺傷設定を使うのは状況が深刻な時しか使わないようだ。そして使ったとしても、殺さないように魔力刃で腕や足を斬り落として犯罪者を無力化にするようだ。決して砲撃は使わないらしい。

確かに腕や足を斬り落としたとしても、ミッドの医療なら元通り

に繋げることができる。

だが、一步間違えれば死んでしまう可能性だってある。

しかも、彼が請け負う特務では、ごく稀に犯罪者を殺したこともあると言う噂も聞くが、さすがにそこまで噂を鵜呑みにはしない。

しかし、彼が犯罪者に容赦がなく、平気で殺傷設定の魔法を使うことは確かだ。

この件は、何度か上層部では問題になったがその度に、彼には減俸や期間の短い謹慎と言った比較的軽い処罰で終わらせた。

本来ならば、よくて資格剥奪。悪くてクビ。酷い場合は犯罪者として罰を受けたりもするケースがある。

それがないと言うことは、上層部はそれほどにして彼の實力を保持しておきたいのだろう。

管理局は慢性的な人材不足だ。そんな状態で、彼ほどの人材を手放す人間は誰も居ない。

つまり彼は、半ば殺傷設定を認められた魔導士なのだ。

その上の判断が、僕にはどうしても理解できなかった。

そんな危険思想な持ち主ならば、その気になればいつだって次元犯罪者になる可能性だってある。

出来ることなら、彼の執務官資格を剥奪して今までの罰を受けるべきだ。

そう、僕は思う。

しかし、コレはあくまで彼の噂を聞いて、僕が勝手に想像した彼の背景だ。

実際は僕の想像と反対に位置する人物かもしれない。

だから今回の任務で、彼が同行することが決まった時、内心チャンスだと思った。

特務の内容は確かに気にはなるが、それ以上に僕は彼の人柄が気になってしょうがない。

彼が僕の想像した通りの人間か、それとも全く別に人間か。

この任務でそれを確かめてみせる。

もし彼が、僕の想像通りの人間だとしたら、その時は僕の正義で、彼を逮捕する！

そう意気込むが、僕は早速この回収任務が、普通の任務ではないと思い知らされた。

現地は魔法文明ゼロの管理外世界。

しかしそこにあったのは、ミッドでは存在しない魔法。

いや、魔法と呼べない。あんなのは僕が知っている魔法なんかではない。

僕は始めて、知らないモノに対する恐怖を覚えた。

こちらの知識にはない魔法。どう言う術式で、どう言う効果があるのか。そして僕らの魔法は彼らに通用するのか。

そんな不安が僕の心を押しつぶそうとした。

しかし心が完全に潰されることは無かった。ギリギリの所で、僕は踏ん張れることが出来たんだ。

彼が僕の前に居たから。

幾ら彼が認められないとしても、一度は憧れを抱いた人だ。

そんな彼の前で、無様な姿を晒す訳にはいかない。

必死に思考を回転させ、例の二人の魔法の対策を練る。

そんな時、彼が母さんに出動命令の許可を求めた。

驚くことに、彼は未知の魔法を見て、僕みたいに恐怖や不安に駆られず、自らを現地に行く事に許可を求めたのだ。

さすがは、凄腕の執務官。臆することなく目の前の状況を冷静に分析できるその精神力は素直に尊敬できる。

ソレを見ていると、僕に振りかかった不安はいつの間にか消えていた。

その後、母さんの命令で僕達は現地に向かった。

到着すると同時に、ミッドの魔法を使う二人の少女がジュエルシードの近くで戦闘を始めようとしたので、僕は咄嗟に間に入り、彼女達のデバイスを封じた。

黒い魔導士はS2Uで防ぎ、白い魔導士は掴んで封じた。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！」

彼女達は驚いた顔で僕を見ている。

「時空管理局執務官。クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

そう言って彼女達の戦闘を停止させ、次に事情を訊こうと尋ねると、背後に居た彼が僕に向かって言った。

「後方不注意だぞ。ハラオウン執務官」

彼の声と同時に、背後から複数の音が聞こえ、振り返るとそこには赤い騎士服の少年が多数のバインドで雁字搦めにされていた。

「っ！？」

僕は咄嗟に彼女達を封じた手を離し、その場から距離をとった。いつの間に？

全く気配を感じられなかった。

いや、そもそもいつ動いたんだ？

ここに来たと同時に赤い騎士服の位置も把握していた。

ほんの一瞬目を離れた隙に、後ろに回り込まれるなんて……！

これが、僕らの知らない未知の魔法！

「……ハラオウン執務官。いくら驚いたからと言って、敵の前でそんな顔をするな。舐められるぞ」

少し呆れた顔で僕にそう注意する彼。

「っ！　すみません」

慌てて彼に謝罪し、今度はここに居る全員に注意を置いた。特にもう一人の黒マントの少年は重点的に注意した。

「てめえ……なにもんだ？」

赤い騎士服の少年が、彼に問い詰めた。

彼は赤い騎士服の少年の前に移動し、言われた通り答えた。

「執務官のアロウン・カーティネスだ。その小さいのの仲間だよ」  
む。確かに背は小さいが、なにもそんな言い方は無いだろ。

「あっそ。で、出来ればこれを外してくれないか？」

「それは出来ない。キミは公務中の僕に、暴行未遂と公務執行妨害

をした。よってキミにはこちら指示に従い、それなりの処置を受けてもらわないといけない」

僕がそう言うと、少年ははっと鼻を鳴らして、驚くことを言い出した。

「嫌だね。どーしてオレが、てめえらの指示に従わねーといけねえんだ。そう言うのだったら直接警察に被害届でもだせばいいだろう？」

そう言って少年は僕に向かってベーと舌をだす少年。

それを見て僕のこめかみピクピクと動くが、頭を冷静にして少年に告げた。

「それは無理だ。僕達はこの世界の人間ではないのでね」

「あん？　だったらてめえら何者だよ？」

さつき名乗ったのに聞いていなかったのか？

「さつきも言ったが、時空管理局だ」

「時空管理局？　なにそれ？」

聞き覚えがないような言い方で、少年は怪しい人間を見るような顔で僕を見た。

しかし少年の疑問は当然だ。

この世界の住人か、もしくは未知の世界から来た次元漂流者かは分からないが、どちらにしたって管理局を知る術が無い。

「知らないのも無理はない。管理局の存在を知る者は管理世界の住人だけだ。管理外世界の住人が知っているわけがない」

管理外世界でそれを知っていると言うことは、管理世界の住人ってことになる。

少なくとも、ミッドの魔法を使って白い少女と黒い少女は、管理世界の住人かその関係者のはずだ。

「管理外世界？　それがココだって言うのかよ？」

確かめるように訊く少年に僕は頷いた。

「そうだ。分かったなら大人しく投降するんだ。事情を教えてくださいければ、今なら未遂で処理することもできる」

すると、少年はニヤリと笑った。まるで、推理モノで探偵が犯人を追いつめた時に浮かべる笑みに似ていた。

そして少年は、確信をもった言葉で言った。

「だったら尚更でめえらの指示には従えねえなあ」

「な、なんだと!? つ……それはどう言う意味だ?」

少年の確信めいた言葉にまたもや驚かされる僕だが、先程彼に注意されたばかりだと言うことと思ひ出し、すぐに自分を落ち着かせて、少年に問い詰めた。

「てめえさっき言ったよな? ココは管理外って。てことは、ココで起きた事件事故は全部この世界の問題になるんだろ。てめえの言う管理世界ならまだしも、ココじゃてめえらの言う罪を受けたり、事情を話す必要性なんて全くないはずだ。それ所か、ココでこうしてオレを縛ってる以上、この世界の法がてめえらを裁くぞ」

「……………っ!」

言い返せなかった。この少年の言い分が最もだったからだ。

管理局は管理外世界との干渉を禁じている。

今回の回収任務が、表向きは哨戒任務だと言うことがいい例だ。

例え、この世界でどんなことが起きようと、僕らは手を出してはいけない。

仮にこの世界の人間が、僕達の協力が必要だと言うんなら、まだ干渉することはできる。

しかし、こうして現地の人間が僕らの存在を認めた上で拒絶した。そうなる、僕らはこの世界ではどうすることも出来ない。

それでも無理に行動に移したら、今度は僕らが管理局の法に触れてしまう。

「ちなみに、この二人の内一人はココの人間で、もう一人はてめえらの世界の住人だが、オレが協力してくれて頼んでるから、少なくとも罪にはならないはずだ」

「……………っ」

「だってそうだろ? コイツはこの世界に落ちた危険物を、善意で

回収に協力してくれたんだから」

少年が黒い少女に視線を合わせながら、どんどこちらが付け込む隙を埋めて行った。

「ぐっ……、ならばどうして、そっちの白い少女と黒い少女がジュエルシードを奪い合っているんだ？」

「単に、そっちと意志の共有ができなかったただだが、なにか？」

そっちがどうかは知らないが、こっちの目的は危険物の回収。それだけだ。まあ、てめえらには関係のない話しだ」

完全に詰まされた。

例え、この少年が言った事情が全部嘘だったとしても、現地の人にここまで言われてしまったら、僕達はどうすることも出来ない。それでも頑なに介入するとなると、法を破る覚悟で行かないといけない。

「分かったならとつとココから出て行け。オレ達の世界の問題はオレ達で解決する。てめえらの出番は、この世界のどこにもありやしねえんだよ」

「ぐっ……」

仕方がない。ここは一旦アースラに戻って、今後の対策を艦長と相談しよう。

ココで、僕らの出来ることはもうそれしかないから。

「そう言う事情なら仕方ない。分かった。キミの言い分も最もだ。僕らは――」

「ふむ。確かにキミの言葉にも一理あるな」

このまま帰還すると言おうとしたら、今まで黙りこんでいた彼が割り込んで来た。

「だが、物事そう簡単には行かないんだよ」

彼の言葉を聞いて、僕は勿論。少年も驚いた顔で彼を見ていた。

彼はそんなこと気にせず、話しを続けた。

「現在キミの世界で起こっている問題の代物、ジュエルシードはとても危険な物なんだ。どれくらい危険かは、キミも自覚しているだ

ろう？ 先日も小規模だが次元震も発生したんだ」

「……それがなんだよ？ 確かにアレはやばかったが、それでも危険なのはオレ達の世界だ！ てめえらには関係ねえだろ！」

「大アリさ。それに、次元震は全次元世界規模の災害なんだ。そっちの世界がよくても、私達管理世界の人間にとっては全然良くない。特にロストログアで起きる次元震を未然に防ぐのが私達の仕事でもある。そんな危険物でしかないジュエルシードをこのまま放置しておき、尚且つそれをキミ達見たくないな子供に任せるほど、管理局は愚かな組織ではない」

え？ ……それって。

「どう言うことだ？」

「つまり、何事にも例外あるってことだ。確かに管理外世界の干渉は禁じられているが、次元災害を未然に防ぐためなら容認できるのだよ」

「な……っ！」

「ま、待って下さいカーティネス執務官！」

確かに次元災害を未然に防ぐのは僕達の仕事でもある。けど、上に許可も取らずにそれを勝手にしてしまえば、それはもう違法だ！ 執務官自身が法を破る事などあってはならない！

「それでは法を破ることになります！ 確かに例外があるかも知れませんが、それは上が判断する事です！ 干渉するにしたって、上に報告してから指示を待った方が——」

「そんな悠長なことをしてる間に、もし大規模次元震が発生したらどうする？ それでハラオウン執務官は、その次元震で失ったモノの責任をとれるのか？」

彼のきつく、厳しい言葉と視線が僕を貫く。

「そ、それは……」

無理だ。責任はとれるかも知れない。けど、失ったモノを元に戻すことなんて出来やしない。

彼が言う責任とはそう言うことだ。



そんなのを背負うことなんて、僕には出来ない。いや、誰にだって出来やしない。

「私にはできない。なら、それらを守るために法が邪魔だとしたら、そんなのはドブにでも捨てしまえ」

「……………っ!」

法を守る僕らが、法を捨てる？

コレが彼のやり方。

だとすれば、彼が犯罪者に対して容赦がないのが分かった気がする。

そうしないと守れないからだ。誰かの大事なモノを失わせないために……。

だから彼は平気で殺傷設定で魔法を使う。だから彼は執務官でありながら平気で法を犯す。

守りたいモノを守りきる為に……。

そうだ。彼も僕らと何も変わりはない。

この次元世界に生きる人々の生命と財産を守って、平和な日常を維持し続ける。

それが僕らの理想であり正義だ。

そして彼は、その為なら手段を選ばない人だ。

「……………」

彼が強い理由が分かった気がする。

法に縛られず、いつだって自分の全てを捨てる覚悟を持ってる。

これが、アロウン・カーティネスか。

「さて、その少女達。話しは聞いた通りだ。それはとても危険な物であり、キミ等のような子供に任せるには荷が重い。私達に渡してくれるか？」

彼がそう言うのと、白い少女は困惑した表情になり、黒い少女は彼を睨む。

「えっと、あのお……」

白い少女が何かを言いかける寸前、僕と彼を狙って複数の射撃魔

法が飛んできた。

「っ！」

僕は咄嗟にシールドを張ってそれを防ぐ。当然の彼もそうした。白い少女は射線外に居たようで、さっきの魔法には当たらなかったようだ。

「フェイト！ 撤退するよ！ 離れて！」

魔法が向かってきた方向から、オレンジ色の毛色をした狼が居た。状況で判断するならば、あの狼は黒い少女の使い魔だろう。主の危機を感じて動いたようだ。

「でもユウヤが！」

「そのユウヤが言ったんだよ！ いいから逃げるんだ！」

そう言ってまたさっきと同じ射撃魔法を使って僕を狙う。いや、今度は彼と白い少女にも狙っているようだ。

彼は素早くシールドを張り、僕は使い魔の咄嗟の攻撃に驚く白い少女を守るため、彼女の前に立ってシールドを張って防ぐが、如何せん数が多いせいでその場から動けない。

そんな射撃の嵐の中、黒い少女は宙に浮かんだままのジュエルシールドに手を伸ばす。

「っ！」

「こらこら。話を聞いていなかったのかい？ それは危険なモノなんだ。子供が手にしていいモノじゃない」

それを彼の射撃魔法で、黒い少女の伸ばした手とジュエルシールドの間を貫き、回収されるのを阻止した。

「くっ！」

「動くな。次は撃つ」

右手を黒い少女に向けたまま、彼は最終通告を告げた。

チェックメイトだ。この状況じゃ、もうどうにもできない。

そう思っていた。

「宝具召喚！ ゲート・オブ・バビロン 王の財宝！」

すると、バインドで雁字搦めになった少年が突然そう叫ぶと、少

年の背後の空間に歪みが生じた。

「な!？」

そこから大量の剣や槍と言った武器が現れ、彼に向かって一斉に射出した。

さすがの彼もコレには驚いたようだが、すぐに冷静になり、シールドを張ってその攻撃を防いだ。

「今だフェイト! 逃げろっ!」

まさかの少年の援護に、黒い少女は一瞬躊躇するが、すぐに決心したのかうんと頷き、その場から逃げて行く。

「っ! 逃がすか!」

S2Uを黒い少女に向け、彼女を狙って魔法を撃つ。

「だめ!」

すると驚くことに、先程まで黒い少女と争っていた白い少女が射線上に立ち、彼女を庇った。

「止めて! 撃たないで!」

白い少女の突然の行動に戸惑った隙に、黒い少女とその使い魔は転移魔法で逃走した。

よし! どうかフェイトを逃がすかとは成功したようだ。後は  
アロウン・カーティネス  
この正体不明を倒してオレも逃げるだけだ。

そう思っていたが、さっきから状況がおかしい。

宝具の一斉射出を、コイツは涼しい顔で防ぎきっていやがる。

「……………っ!」

例え男の張ったシールドがユーノクラスの強度だとしても、宝具による攻撃を全部防ぐなんて普通はありえない。

有澤や香奈枝だって、王の財宝を防御だけで防ぎきるなんて不可能だ。  
ゲート・オブ・バビロン

コイツ、本当に何者だ……?

「やれやれ、キミのせいで黒い少女が逃げたようだ。……多重転移

か。追うのは無理だな。全く、折角の手掛かりが……」

そう呟きながら男はオレを見た。

「キミも、彼女を逃がす目的を果たしたんなら、いい加減その攻撃を止めてくれないか？ 鬱陶しくて仕方ない」

「誰が！」

こっちはまだ目的の半分しか果たしてないんだ！ てめえを倒すまでは止める気はない！

「そうか。じゃあ、少し眠ってもらうか」

そう言うと同時に、首に掛けられたバインドの締め付けが急になった。

「なっ……」

まずっ、このままじゃ――

意識が飛ぶ。

そう思った瞬間、オレの意識は真っ暗な世界に飛んだ。

「両者の戦闘停止を確認」

「逃げた二名の魔導士と使い魔は、多重転移で逃走。追いきれませんね」

アレックスとランディの報告を聞きながら、私はモニターを見ながら安堵のため息を吐いた。

「どうにか、ジュエルシードの回収は出来そうね」

けど問題はある。

通常、管理外世界の干渉は禁じられているが、それでも干渉せざるにいられない状況はある。それが、ロストログアによる次元震の発生だ。

それを防ぐためなら、管理局は管理外世界の干渉を認めている。それでも、上に報告して許可を頂かないとダメなんだけどね……。

しかし、現地住民がそれを拒んだ場合、管理局は手が出せない。

その行為が幾ら危険物の回収だろうと、所有権があるのは管理外世界なのだから。それを無理に奪うようなことをしてしまうと、それはもう侵略行為と変わらない。

だから現場が管理外世界の場合、管理局は慎重になり、対応が遅れがちになってしまう。

そして今回、次元震の発生を確認し、ジュエルシードの回収を決定したが、状況は見ての通り。

管理外世界の住人である赤い少年が、私達の介入を拒んだのだ。大抵は現地住民に正体を晒さず回収するか、現地住民にロストロギアの危険性を訴え、なおかつそちらでは対処が出来ないことを説明することで、私達に回収を任せるのが定石だ。

しかし、今回みたいに稀にだが、私達の介入を拒む事態もある。例えば、そのロストロギアが管理外世界にとって重要文化財や、宗教的象徴にされていたりすると、回収が極めて困難になりその世界を長期間監視し、ロストロギアの発動を待たなくてはならなくなる。

何故なら、ロストロギアが発動さえすれば、その混乱に紛れて回収することが可能だからだ。

もしそれで、その世界の文明が崩壊したとしても、私達はそれを仕方ないことだと割り切るしかない。

全てを救う事などできやしないのだから。

しかしそれは、他世界の影響が極めて少ない場合での話し。

もしコレが全次元世界を巻き込むモノだとしたら、私達は強引な手段でそのロストロギアを回収しなくてはならない。例えばそれが、侵略行為に値してもそれで世界が救われるなら、私達はそうしなければならぬ。

救いはいつだって、犠牲の上で成り立つモノだから……。

それが、管理外世界でのロストロギアの回収だ。

しかし今回は少し違った。

その現地住民は、少なくとも発動したジュエルシードに対応して

いる。

封印はミッドの魔導士に頼っているようだが、それでも対応はできている。

私達の知らない未知の魔法を使って……。

だから、赤い少年は私達の介入を拒んだのだ。

ま、別の思惑があり、それを叶えるのに私達が邪魔で拒んだのかも知れない。

どっちにした所で、事情を教えてくださいと分からないことだから、コレは一旦保留にしよう。

実際私達の介入を拒否したのは事実。本来ならこのまま一旦離れ、監視の状況が続くはずだったが、それを少し強引だがカーティネス執務官が上手くやり、私達の介入に成功できた。

さて、クロノに彼女達をこちらに連れて来てもらおうかしら。

そう思い、現地に通信を開こうとすると、カーティネス執務官から通信が入った。

「ハラオウン艦長」

「どうしたの？」

「捕縛したこの少年を、アースラに連れて行きますがよろしいですか？」

「ええ、その子にも事情が聞きたいのでお願いしますわ」

「すみませんが、それは無理です」

「……それはどうして？」

「私の特務に、この少年が少なからず関わっている可能性があります。なので、この少年の身柄は私の一任になります」

彼らの会話は勿論把握している。その会話の中は常にこの任務に関わる話だけ。彼の特務に関わる内容はなかったはず。

……だとすると、少年が使っていた魔法が関わるのか？ 消極法だが、それしか思い浮かばないない。

「この子が？ でもこの子は現地住民よ。それを任意も無しに長期間拘束するのは問題よ」

どういう可能性なのか分からないが、それでも長期間アースラに軟禁することになるのは容易に想像できた。

私は反対の意を言外におわせるように言った。

少年はまだ子供だ。それを長期間拘束すれば、現地では誘拐又は失踪扱いになり、混乱するのは必然。

何より、その子の両親が心配する。私も子供が居るから、その子の両親の気持ちは痛いほど分かる。

「大丈夫です。そう言った事態にならないよう、ちゃんと手は打っております。それと、特務に関することは全て私の判断に任されています。ハラオウン艦長が口出しすることは認められていません。それでも思うことがあれば、直接上層部にお伝えて下さい」

それはつまり、特務に関することがあれば、何をやっても許されると言うこと？

それを、上層部が許していると言うことなの？

そんなのは滅茶苦茶だ。

それが許されるだけの内容って……一体なんなの？

「それでは、この少年をアースラに連れて帰還します。部屋を一つ使いますが、よろしいですか？」

「……わかりました。居住区で空いている部屋を好きに選んでください」

結局、私の今の地位じゃ彼を止めることは出来ない。

「分かりました」

そう言ってカーティネス執務官は通信を切った。

「……………」

こんな不条理な気持ち。……久しぶりに味わったわ。

ううん、そもそもカーティネス執務官がこの船に乗ると決まった時から、こうなることは決まっていたに違いない。

「……はあ」

いつまでも懐かしい味を舐めていても仕方がない。こっちはこっちで仕事を進めましょう。

私は現地に空間モニターを開いて、クロノに連絡した。

さて、どうしよう。

俺は今、高町と人間に戻ったユーノと俺の三人で、アースラとか呼ばれる宇宙船のようなモノの中に居た。

そしてその船のトップである艦長さんが居る部屋に俺達は居て、そこで艦長さんと小さい人が頭を下げていた。

「……………」

あれ？ なにこの状況？

さて、どうしてこなったのか説明しよう。

話しはいたって簡単だ。

例の木の化物を倒し、ジュエルシードを封印。でそれを取り合う為に高町とテストロッサが衝突……と言うところで、例の組織が登場したのだ。

念願の組織が登場したと思い、俺は安堵のため息を吐いた。と同時に、中里が何を思ったのか組織の一人である小さい人に手を出そうとして、あっさりともう一人の組織の大きい人に無様に捕まった。それを見てアホだろアイツって素で思ってしまったが、それはまあどうでもいい。

問題は無様に捕まったアホ里の言葉だ。

あの野郎、何をとち狂ったのか知らないが、折角来た組織の人に色々と難癖つけやがった。

やれ管理世界や、やれ管理外やら、やれ干渉やら言ってたが。要約すると《お前らは必要ねえ。さっさと帰れ！》なんて言いやがった。

しかも《この世界の問題はこの世界が解決する》とかも言った。

おいおい、アイツ馬鹿ですか？

なに自分の言葉が全人類の言葉ように言ってるの？

んなわけあるか。勝手に決めんな。俺達素人がそんな危険物に関



わるよりも、そう言うのは専門家<sup>プロ</sup>に任せりゃいいんだよ。

俺達が無理してジュエルシードを封印した結果、昨日みたいにへましたらどうする？ 下手したらこの世界が滅びるんだぜ？

そんなのごめんだ。

さすがにコレは黙ってらんねーなと思っていたら、なんと大きい人が、中里の言葉を無視して強引に回収することを決めたようだ。

それを聞いてほっとしたが、同時に流石にそれはどうかとも思っただ。

守りたいモノがあるのに、それを法が邪魔するなら、法なんてドブに捨ててやる？

いやいやいやいや。

確かに理解は出来るけど。けど、そう何度も法を破ったら治安とかどーなるわけ？

つーか、法ってのは秩序を守る為にあるモンだろ？ 大きい人の守りたいモノの中に秩序はないのか？

もし大きい人みたいな人が大勢居たら、下手したらその管理世界。無法地帯になるかも……。

と、そんな馬鹿みたいな妄想はどうでもいいとして、問題はその後だ。

急にあの犬が組織の人間を襲い始め、テストロッサに逃げろと言いだした。

つーかあの犬、高町に当たらなかったから良いとして、もし一つでも当ててみる。その毛を全部毛取り取って、丸裸にしてやる。

とまあそれはおいておいて、その犬の言葉に少し躊躇するテストロッサ。恐らくアホのことが気になったに違いない。

そのまま逃げればいいのに。なにを思ったのか、テストロッサはジュエルシードを手に入れようと手を伸ばしたのだ。

当然、それを阻止するのが大きい人だ。そして今度はテストロッサに狙いをつける。こりゃ終わったな。

と思っていたが、そこで中里がテストロッサを逃がす為、奴の能

力の一つであろうモノで大きい人を狙った。

その隙について逃げようとするテストロッサに、今度は小さい人が杖で狙い、まさに撃とうとした瞬間、テストロッサを守るように高町が盾になったのだ。

さすがにアレに俺も度肝を抜かれたな。

幾らなんでも盾になるか？ ま、高町らしいって言えばらしいがな。

しかし危なかったな。小さい人。

もし高町ごと撃っていたら、お前は明日の朝日を拝むことはなかったぜ。

そんなこんなで無事逃げることに成功したテストロッサと犬。

しかしまだ問題はまだ残っている。

そう中里だ。

どうやらアイツ、テストロッサを逃がすと同時に、自分に掛けられた拘束を解除する為に大きい人に攻撃を仕掛けたようだ。まあ、逆に拘束輪で頸動脈締められて落ちたけどね。

大きい人の手腕で、あっさり問題は解決された。多少強引に見えたが、相手が中里ならどうでもいい。

さて、ここから本題だ。

え？ 本題まで長いって？

そこは大目に見てくれよ。最近出番がなかったし、空気扱いされてたんだからその分のストレスを解消したって別に良いだろ？

その後、俺達は大い人と小さい人の上司っぽい人——小さい人が艦長って言ってたな——がSF映画に出て来るような空間モニターで、事情を聞きたいから組織の人の船、確かアースラとか言う名前の船に来て欲しいと頼まれたのだ。

勿論、頷いた。

そもそも俺はこの組織の人が来るのを待ちわびていたんだ。中里みたいに拒否ったりしない。

それに、さっきの大きい人の手際の良さ。

俺でさえ中里は厄介な相手なのに、大きい人はアイツを簡単に拘束して、簡単に振じ伏せたんだ。

あんなのを見て、まだ反骨精神があるなら俺は素直にソイツに尊敬の念を送ろう。

とまあ、そんなこんなで俺達は、アースラと言う組織の船に乗ることになった。

あ、そう言えば名称が時空管理局だったな。

うん。覚えた。

船に着くと、気絶中の中里は大きい人の手によりどこかに連れて行かれた。

さらば中里。キミのことは三秒で忘れるよ。

1、2、3。

あれ？ 誰か忘れているような……ま、いつか。

(ユーノ君。ココって一体……)

見知らぬ船に連れて来られた高町は不安そうな顔で、キヨロキヨロと辺りを見回しながら、前方を歩く小さい人の後を歩きながらユーノに念話で尋ねた。

(時空管理局の次元航行船の中だね)

そう言うと、高町には難しいと判断したのか、分かりやすく説明し直した。

(えっと、いくつもある次元世界を自由に移動する、その為の船)

(あんま簡単じゃないかも……)

さすが国語の成績が悪いと評判の高町さんだ。ココにバニングスカ月村が居れば、理解できるはずだろう。どっちも国語の成績はトップだからな。

え、俺？ 俺は中の中だ。平凡な生活を目指す者にとって、目立つ行為はなるべく避けたいからな。

(えっとね。なのはが暮らしてる世界の他にも、幾つもの世界があって、僕達の世界もその一つで、その狭間を渡るのがこの船。で、それぞれの世界に干渉し合うような出来事を管理しているのが、彼

ら時空管理局なの」

ユーノ先生。分かりやすい説明ありがとうございます。

(そうなんだ……)

ちゃんと分かっているのか怪しい返事だな。

すると、何か思い出したのか小さい人が振り返り、

「いつまでもその格好だと窮屈だろう。バリアジャケット防護服とデバイスバリアジャケットは解除しても平気だよ」

そう言った。

「あ、そっか。そうですね。それじゃ」

そう言っバリアジャケットて高町はレイジングハートをスタンバイモードに戻し、  
防護服も解除した。

「それじゃ俺もお言葉に甘えて……」

高町と同じように元の服装に戻る俺。マリアもいつものロザリオ  
に戻す。

「キミも、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

小さい人は目線をユーノに合わせてそう言った。

へ？ 元について？

「ああ、そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてま  
した。」

ユーノはそう言うと、突然光りだす。すると俺達と同じくらいの  
身長の子供が現れた。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

数瞬後、ユーノの変わり果てた姿に驚く高町。次いで驚きの声を  
上げる。その声がアースラ中に響くんじやないかって思うほど大き  
く、つい耳を両手で防いでしまった。

そして混乱している高町の姿を見て少し可愛いと思った俺が居る。  
やば、ムービームービー……あ、携帯持っバリアジャケットてねーや。

これは本格的に携帯の購入を考える必要があるな。それかデジガ  
メとか。

いやしかし、高町が驚くのも無理ないだろ。

今日までペット扱いしてた動物が、実は人間でしたーなんて、誰だって驚くわ。

さすがファンタジー。変化の魔法もあるとは……。

「……………」

そんなこんなで、ユーノのカミングアウトも一段落すると、俺達は小さい人の案内で艦長さんの居る部屋に辿り着いた。

「艦長、来てもらいました」

部屋に入るとそこには盆栽、お茶の道具、名前は知らないけど旅館ならどこにでもありそうな、流れる水が竹に落ちると、その重みでカコンと鳴るアレもあった。

コレはまた、中々センスのある内装だな……。

ないわーと思いつながら、中央に正座で座っている艦長さんに一礼する。

「お疲れ様。まあ三人ともどうぞどうぞ。楽にして」

言われた通り、俺と高町とユーノの順で座り、小さい人は艦長さんの隣に座った。

目の前に羊羹らしきモノと緑茶らしきモノが置かれていた。

とりあえずそれをスルーして、俺達は自分達が知っているだけの情報を話した。

「なるほど。そうですか。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

「はい。それで僕が回収しようと……」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

俺と同じこと言ってら。

そんな小さい人のきつい一言に丸くなるユーノ。

「……………」

少し弁護でもしてやるか。

「確かにユーノは無謀なことをしたかも知れませんが、そもそもそんな無謀を許したのが貴方達時空管理局じゃありませんか？」

「それは……」

俺の反論に口ごもる小さい人。痛い所を突かれたって顔だ。

「しかも俺達とそう歳も変わらない子供に、そんな危険物の先行調査の許可を与えるなんて普通はありえない」

「む……」

「確かにユーノはそっちでは優秀な魔導士かも知れないですが、一応一般人で子供です。許可を与える理由なんてどこにもないはず。どっちかと言うと、ジュエルシードみたいな危険物が管理外世界に落ちただけで、ルールがどうだがですぐに回収にこないそちらの方に責任があると俺は思いますけど」

「そうだがっ」

なにも知らない人間がこうも、時空管理局の体制に文句を言われるのが癪に障ったのか、俺の言葉に反論しかける小さい人。

それを止めたのが、黙って俺の不満を聞いていた艦長さんだ。

小さい人の反応は当然だと思う。俺だって、なにも知らない奴が横からぎゃあぎゃあ言われたらいい顔は出来ない。

だからそれが出来た艦長さんは、中々出来た大人だと俺はそう思う。

「確かに健一君の言う通りね。その事については、私達はなにも言えません。その所为で貴方達の世界を危険にさらしてしまったことを深くお詫びします」

そう言っただけで俺に向かって頭を下げる艦長さん。

それを見て、小さい人も何か思うところがあつたのか、艦長さんと同じように頭を下げた。

あれ？ なにこの状況？

いやまあ、謝ること事態はいいけど、大人が子供に頭下げる図つて、なんかシュールだよな。

「まあ、こうして来てくれましたから、こっちはこっちで助かります。だから頭を上げて下さい」

そう言うと、二人は下げた頭を元に戻す。それを見て、高町は先

程から聞きたいことがあったのか口を開いた。

「あの、ロストログアってなんなんですか？」

ああ、それは確かに俺も聞きたかったな。たぶんジュエルシード見たいなモノを総称として呼んでいると思うが、どう言ったモノなのかは知らない。

やばいモンだったのは分かってるけど、どうしてやばいのか。そもそもなんでそんなモノがあるのか。そういう知識を俺達は知らない。

「遺失世界の遺産。っても分からないわね」

そう言って、艦長さんは俺と高町に、ロストログアのことを分かりやすく教えてくれた。

「えっと、次元空間の中には幾つもの世界があるの。それぞれに生まれて育っていく世界。その中に、ごく稀に進化し過ぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらが、自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称として、ロストログアと呼ぶ。使用法は不明だが、使用しようによっては世界どころか、次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つこともある危険な技術」

「然るべき手続きを持つて、然るべき場所に保管されていなければいけない品物。貴方達が探し、回収しているロストログア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。幾つか集めて、特定の方法で機動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

「キミとあの黒い少女とぶつかった時に発生した振動と爆発。あれが次元震だ。たった一つのジュエルシードの、全威力の何万分の一の発動でも、あれだけの影響があるんだ。複数個集まって動かした時の影響ははかりしえない」

艦長さんと小さい人が交互に説明してる中、そこに自分の知っている知識があったのか、食いつくユーノ。

「訊いたことあります。旧暦の462年、次元断層が起こった時のことを」

「ああ、アレは酷いモノだった」

「隣接する平行世界が幾つも崩壊した。歴史に残る悲劇。繰り返しちゃいけないわ」

「……………」

なんか歴史の授業を聞いてるみたいだったな。

遺失世界の遺産ねえ。全く、面倒なモンを残してくれたよホント。話だけだからか、あんましイメージ浮かばないけどそれで十分だ。

あの大きい人が強引にした理由もよく分かったよ。

こんなの、俺達素人アマチュアが無暗に手をだしちゃいけないモンだ。

昨日の次元震の発生は運がよかったに過ぎない。このまま無理に俺達が続けていたら、下手すりゃ地球が無くなってしまう。

そうなれば、平凡な生活どころの話じゃなくなる。

「……………」

そう思いながら、とりあえず出されたモノは飲もうと、俺は目の前に置かれている緑茶らしきモノに手を伸ばす。

すると、突然緑茶らしきモノに角砂糖を入れる艦長さん。

「……え？」

そしてそれを平気で飲む。

ありえない光景を目の当たりにした。

「……………」

伸ばした手を戻した。

あんなのを見た後で緑茶なんて飲めるか。

なんだよ砂糖って。珈琲と一緒にすんな。

さすがはファンタジー。何時だって俺の予想の斜め上に居る存在だ。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「キミ達は今回のことを忘れて、それぞれの世界に戻って、元通り



に暮らすといい」

そんなことを思っていると、案の定プロ意識全開の言葉が出てきた。

要約。足手まといだから大人しくしとけ。

「でも、そんな……」

突然の不干渉に当然反論しようとする高町だが、それを一蹴する小さい人。

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも！」

それでも食い下がる高町。

「落ちつけよ高町。途中で投げ出したくない気持ちは分かるが、今回は仕方ない。考えても見ろ。俺達素人が無理して続けたとして、もし失敗でもしてみろ。下手すりゃこの地球が無くなっちゃうんだぞ。そんなのは、俺達が望むことじゃない。こう言うのはプロの方に任せりゃいいんだよ」

「それは……そうだけど」

納得しきれない顔で言い淀む高町。

出来ることなら、これ以上高町を危険な目に合わせたくない。そうだろう？ 高町が魔法と出会ってまだ一ヶ月。

この一ヶ月、コイツは危険な目に合いながら、素人なりに頑張った。

普通ならそれだけ賞賛に値する。高町は十分頑張った。プロが来るまでの繋ぎとしては十分過ぎる働きだ……。

最初のジュエルシード集めのままだったら、まだよかったかも知れない。

「けど、今はそれだけじゃないんだよな」

「え？」

俺の言葉に高町が驚いた顔で見る。

「それだけじゃなくて、アイツとちゃんと話がしたい。そう思って

るんだよな」

フェイト・テストロッサ。

アイツとの出会いで、高町のジュエルシード集めに、テストロッサと話がしたいってことが追加された。

それが高町の中で二つの重要なことだ。

ジュエルシードとテストロッサ。その二つはセットでなければ意味がない。

ジュエルシード集めを諦めると、もう二度とテストロッサと話すことが出来なくなる。

逆にテストロッサを諦めても、結局の所ジュエルシードを集めることは出来ず、ユーノとの約束を守れない。

もしかしたら、それが今後の高町に影響が出るかもしれない。

今日までずっと、テストロッサのことを考えていたんだ。このままにも出来なかったら、きっと高町は後悔する。

そんな友達の顔なんて、高町の後悔した顔なんて、俺は見たくない。

悲しくて苦しくて遣る瀬ない。そんな姿、俺は嫌だ。

高町は、笑った顔が一番いいはずに決まってる。

「なあ高町。お前が今やりたいことはなんだ？」

俺の問いに、高町は一瞬呆けた顔するが、その意味に気づいて「うん」と頷き、

「私は、ユーノ君との約束を守りたい。あの子と、フェイトちゃんとかちゃんと話がしたい！　お願いします。どうか私に、協力させて下さい。足手まといには絶対になりません。お願いします！」

艦長さんと小さい人に向き直り、頭を下げてお願いした。

「僕もお願いします。ジュエルシードを発掘したのは僕で、そのせいでなのはと健一の世界に危険な状態にさせているのに、僕だけのうのうと安全な場所に帰ることなんてできません。自分の責任を他人に預けたままなんて僕には出来ない！」

高町の気持ちを聞いてユーノも同じだったのか、二人にそう言っ

て頭を下げた。

「それに、僕はともかくなのは魔力は、そちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘。どちらにしても、戦力は多い方が有利です」

さり気なくアピールポイントも伝えるユーノ。なかなか頭が回るじゃないか。さっきまで落ち込んでいたのが嘘のようだな。

「……健一君は？」

「俺は正直、全部貴方達に任せたいと思います。高町やユーノ見たにジュエルシードやテストロッサにはなんの執着もありません」  
「そうなの？」

「でも、高町がこうして頭を下げて協力をお願いしているなら、友達の俺もそれに協力しないわけにはいきません」

そう言って、俺も二人に頭を下げる。

「お願いします。協力させて下さい」

「……分かりました。協力を承認しましょう」

「「っ！」」

それを聞いて、俺達は同時に頭を上げる。

「かあさ——艦長！」

咄嗟に反対の声を出そうとする小さい人。

「手伝ってもらいましょう。こちらとしても、切り札は温存したいもの。ね、クロノ執務官？」

そう言って、艦長さんはニコツと小さい人に笑いかける。

「……はい」

渋々と納得する小さい人。確かにこの船の戦力と言ったら、目の前に居る小さい人と、どこかに行った大きい人だけ。それだけでも十分だが、戦力を温存できるなら越したことはないだろう。

「条件は三つよ。三名とも身柄を一時時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守ること。それから、当分の間はこの船で活動してもらうので、親御さんにはちゃんと許可を頂くこと。よくて？」

「分かりました」

そうユーノが答える。

ん？ 当分？

「あの……」

「ん？ 何かしら？」

「すみません。その条件だと、ちょっと協力できないんで、高町とユーノだけでお願いできませんか？」

その言葉に二名の人間が驚いた。

「え？」

一人は艦長さん。そしてもう一人は……。

「健一君っ、どうして!？」

突然の協力拒否発言に驚いた高町は、不安そうな目で俺を見た。

「いや、手伝いたいのは山々なんだけど、この船で活動するってことは、ココに長い間泊まるってことだろ？ それだと家の親、絶対反対するから無理なんだよ」

うん。幾ら最近まで放任していたからって、流石に九歳の子供を長期間外出させることは許してくれないだろう。

「そうなの？ それじゃ仕方ないわね」

そう言っって残念そうな顔をする艦長さん。

「なので俺は俺で、一人で動きます」

「それじゃ意味がないだろ！ キミもさっき言ったじゃないか。素人が下手に手を出して失敗しても困るって!」

うん。小さい人の言う通りだ。それは今でも本気でそう思っている。

でも……。

「そうですが、それでもココは俺が住んでる世界なんです。正直、100%そちらを信じることはできません」

現在はそっちに高町が居るから信用度は70%ってところだ。

「キミの言い分も分かる。けど……」

「大丈夫です。ジュエルシードを見つけても、下手に触りません。」

その時は高町に連絡して、そちらに場所を伝えるだけにしますよ。それならいいでしょ？」

「……そうね。貴方の気持ちも分かりますし、それだったら許可しましょう。ですが、くれぐれも無茶な行動はしないように。守れますか？」

「はい」

俺は力強く頷く。そもそもそんな危険物を一人でどうこうする気は毛頭ない。

あ、でもそう考えると、前にジュエルシード拾って封印したことあったけど、あれはあれで結構ピンチだったのかな？

ま、すぐにテストロッサに押し付けたから無問題ってことにしよう。それにあの時はまだそんなに危険物だと理解してなかったし……。

そんなこんなで、高町の両親から許可を貰ったらこちらに連絡するようにと艦長さんが言うって、話は終わった。

俺達は小さい人に送ってもらい、元の場所まで戻ってきた。

空は既に夕焼けから色から、黒へと変わりつつあった。

「にしても、色々と大事になって来たな……」

切っ掛けは、あの温泉旅行。

そこでバニングス、月村、高町の三人と友達になり、その友達が抱えている問題を助ける為に協力することにした。

それから少ない時間ながらも一緒に鍛えて、一緒に戦った。

そしてその問題の元凶——ジュエルシード。まさか世界崩壊クラスの危機とはね……。

ココまで話が大きくなっていくとは思ひもなかった。

前の世界じゃ考えられないな……。

「健一君、無茶だけはしないでね。すぐに連絡してよ」

心配そうにそう言う高町に、俺は小さく笑いかけ、ポンっと高町の頭に手を置いた。

「ああ。でも、それは高町にも言えることだろ？ お前も、ピンチ

になったらすぐに俺を呼べよ。光の速さで飛んで来てやるから」

「にゃははは。うん、そうするよ」

俺の言葉が面白かったのか、嬉しそうに笑う高町。

(ユーノ)

高町の頭から手を離すと、傍に居る俺と同じ年頃の少年に念話で話しかける。

(ん?)

(高町のこと、頼むな。あそこで唯一信じられるのはお前しかない。だから、俺の代わりに高町を守ってくれ)

本当は最後まで一緒に協力したい。けど、俺にとって友達と同じくらいに家族も大事なんだ。

これ以上、あの人達に負担をかけたくないから。

(……うん。なのはは僕が守るよ)

頼もしい言葉だ。

「それじゃ、俺はこっちだから」

「うん。またね。健一君」

そうやって俺と高町はそれぞれ反対方向に向かって、歩いて帰った。

ふと空を見上げると、一番星を見つけた。小さくて、とても綺麗に輝いていた。

どうか、高町に怪我がありませんように……。

そう、願いを込めながら一番星を見つめていると、突然世界が変わった。

「な……!」

空が突然緑色に変わった。まるでこの辺一帯を緑の膜で覆った感じだ。

結果? けどどうして?

『この結界の術式パターンは、対転生者用!?!』

「対転生者?」

首にかけてるロザリオから聞き覚えの無い単語を俺に伝えるマリ

ア。

「そう、コレは私達イレギュラーだけを閉じ込めるための結界よ」  
マリアにどう言う効果なのかを聞こうとする前に、背後から突然  
声が聞こえた。俺は咄嗟に後ろを振りかえる。

「当然、管理局は感知できないわ。【なのは】の登場人物である限り絶対……」

そこに居たのは、恐らくこの結界を張った張本人だろう。俺より  
少し背が高く、拳法着の上にローブを羽織り、顔をフードで隠して  
いた。

「それは結界外に居るイレギュラーも同じよ。まあ、感知系が高い  
奴なら気付くと思うけど、私が把握してる限りじゃ、そんなイレギ  
ュラーは居なかったわ」

そう言って、手に持っていた抜き身の野太刀をゆっくりと俺に向  
けた。

俺がココで始めて出会った自分以外の転生者——森永香奈枝の姿  
がそこにあった。

## 無印編 七話目（後書き）

感想などはお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。。



## 無印編 八話目（前書き）

注..【なのは】のキャラクターはでてきません。

## 無印編 八話目

「久しぶりだな森永」

俺はこの対転生者用とか言う結界を張った張本人に声をかけた。理由は勿論、この状況の説明を教えてもらうためだ。

そもそも、あの運命の夜で俺と森永は対立する理由がなくなったはず。

なのに、どうして今になって俺の前に現れたのだ？

「で、今日は何の用だ？ 手短に頼むぜ。これから家に帰って飯食って風呂入って宿題して寝る予定なんだよ」

「大丈夫。そんなことしなくてもいいわ」

「どう言う意味だ？」

「簡単よ。貴方はコレから死ぬのだから！」

そう言うと同時に、森永の姿が消えた。

「っ！」

俺は咄嗟にバックステップで後方に下がる。すると、

シュン——とさっきまで俺が居た場所から空気を斬る音が聞こえた。

同時に、消えたはずの森永の姿が視認できた。

「はぁ……はぁ……」

無意識に手が首を触った。

うん。ちゃんと繋がってる。

今の斬撃、確実に俺の首を狙っていた。正直、躲せたことが信じられない。

それ程まで、森永の動きが俺では捉えられなかったのだ。

アポロの危機感知能力。それとココ最近の経験。コレらのお陰でどうにか助かったが、あんなのを何度もされたらこっちの身が持たない。

今のは奇跡だ。二度目は無いだろう。

「……………」

にしても、どうしてこうなったのか分からんが、どうやら森永の目的は俺の命のようだ。

アイツの目的は原作忠実で、介入しようとするイレギュラーを殺すことだ。

このタイミングと言い、恐らく森永はさっきの戦闘を隠れて見たのだろう。

それで、俺が原作キャラの高町と一緒に行動しているのを見て、再び殺す対象にされた。

たぶんこんなところだろ。

となると、俺と森永の対立は白紙に戻されたってことか……。

いや、高町に協力すると決めた時点で、森永との再戦は必然だったはず。だとしたら、コレはある意味決められた未来ってことになるな。

ちっ、だったらココでコイツとの因縁染みたモノに蹴りつけてやる。

しかし、森永のさっきの動き……。前に戦った時よりも強い……。いや、もしかしたらコレが本来の森永の実力なのか？

おいおい、勘弁してくれよ。前はどうか勝てたつーのに、実は本気じゃありませんでしたてか？

最悪だ。

「マリア。防護服展開。モードテッド」

『了解』

いつものように体が一瞬だけ光る。光が消えると、右腕はマリアのアームド形態である白銀の籠手が装着され、サックスブルーのブローチの付いたいつもの黒マント姿に変わる。

そしてすぐさま魔力制御と威力調整を行い、最近お馴染の呪文を唱える。

「ドラグナー・ナグル！」

唱えたと同時に俺は森永に接近する。

そっちがその気なら、こっちもそれ相応の対処はさせてもらうぞ。俺はそのまま右ストレートで森永の顔を目掛けて殴る。

「へ？」

が、森永は俺の攻撃を最小限の動きで躲かれた。

「ガッ!？」

そのまま俺は森永の膝蹴りを腹部に食らい、

「はっ」

立て続けに足蹴りで吹き飛ばされた。

「っうう」

足腰に力を入れて踏ん張ったお陰でどうにか転ばずに済んだが、森永の攻撃はそれで終わらなかった。

いや、ココから本番だ。

何故なら俺と森永との距離は、ちょうど野太刀が振り回せる距離なのだから。

つまり、森永の武器が思いっきり有効利用できるってことだ。

「ふっ」

森永は突きของ構えをとると、俺の喉元目がけて刃の切っ先が襲う。

「っ!」

第一の術でどうにか森永の太刀筋が見えるのが幸いだ。俺は咄嗟にそれを左の拳で刀身を殴り、軌道を逸らす。

結果、刀身は喉には刺さらず、どうにか躲すことに成功した。が、森永は躲した突きを引き戻さず、そのまま次の攻撃に繋がれた。

素早く持ち方を変えることで刃を横に向け、そのまま一気に横斬りする。

シュン。

「あぶ——」

それを危機感知能力で察知した俺は屈むことでギリギリ躲す。すると今度は縦斬りで俺を斬ろうとする森永。

襲いかかる刀身を俺は咄嗟に両手で受け止めた。

「——ないっの!」

俗に言う真剣白刃取りだ。

「……………っ！」

驚く森永。まさかこのタイミングで白刃取りされるとは思っていなかっただろう。

それは俺も同感だ。咄嗟にやってみたが、まさか成功するとは…。

まあいい。コレはチャンスだ。

魔力充填！

「セカン・ナグル！」

充填と制御と調整をほぼ一秒で済ませると、第二の術を唱える。今までの戦闘と高町との鍛練のお陰で、次の術への移行もスムーズになったのだ。

「おらっ！」

そのまま強化した腕力で、俺は野太刀を握った森永ごと思いつきり空に向かって放り投げた。

「ちっ」

舌打ちしながら空中で静止する森永。

よし。空中なら、地上見たいに動けないはずだ。ここで一気に畳み掛けてやる！

魔力充填！

「サーズ・ナグル！」

更に第三の術を唱え、今の俺が使える最速のスピードで森永の懷に飛び込む。

この速度ならいける！

「遅いわ」

が、俺の思いとは裏腹に、森永は余裕の表情を浮かべながら、突撃する俺に合わせて野太刀を振るう。

「っ！」

咄嗟にマリアを盾にして防ぐ。

ガキン！

金属と金属がぶつかる音が響いた。

「今を防げるんだ。だったら、コレはどうかかな？」

マリアで防いだことに驚きながら呟くと、バチバチッと音が鳴った。

「え……」

見るとそこには帯電し始める野太刀があった。

森永は素早く野太刀を振り上げ、

「雷鳴剣！」

強化された視力でもどうにか見えるくらいの速度で振り下ろした。俺はもう一度マリアで防ぐ。

バッチィィィィィン！！

が、電撃が追加されたその一撃を俺は防ぎきることが出来ず、そのまま叩き落とされた。

「がはっ！」

電撃のせいで体が麻痺し、受身も取れず地面に激突する俺。そんな絶好の隙を当然、森永は見逃さず、そのまま野太刀で突き刺す勢いで降下してくる。

「これくらい……っ！」

麻痺で体が動けなくても、こっちにはまだコレがある！

俺は降下してくる森永目掛けて、マントを伸ばして森永の体をグルグル巻きで拘束しようとする。

「……………っ！」

マントが森永に届く瞬間、マントはバラバラに斬り落とされた。

見ると左手にはあの時の魔力刃のようなモノがあった。

「二度目は通用しないよ」

それを見て俺は愕然した。

……勝てない。

三段階まで強化したテッドの術が、全く通用せず圧倒された。

コレが、森永の実力。

同じ転生者なのに、作品能力の違いでココまで力の差が出るのか？

「これで、終わりよ」

そう言って再び俺目掛けて降下してくる森永。  
終わるのか？　これで……。

死ぬのか？　また……。

ふと脳裏に両親の顔が過る。次に高町、月村、バニングスの顔が順に過り、そして最後にあの日の光景が蘇る。

俺の大事な家族。俺の大事な友達。俺がココで死ねば、大事なモノが悲しむ。

再び両親に、あの痛みを味合わせてしまう。友達に、あの痛みを味合わせてしまう。

それは、嫌だ。

俺が、痛みを与える役目になるのは……もう嫌だ！  
死んでたまるか。

少なくとも、こんな……未だにココを夢だと思っているような奴  
なんかに……殺されて、たまるかつ！

魔力充填！

次いで制御と調整を行い、俺はまだ完全に使いこなせない第四の術を発動させる。

「フォルス・ナグル！」

第四の術を唱えると、俺はすぐさま起き上がり、森永の攻撃を躲すことに成功する。

「なっ」

動けない筈の俺が動いたことに動揺する森永だが、すぐに冷静を取り戻したのか地面に着地すると同時に、俺目掛けて野太刀を振り上げて接近してきた。

シュン——と鋭い斬撃の音が鳴るが、俺はソレを右手で掴む。

「っ！？」

「確かに、お前の動きは速し、攻撃も鋭い。けどな……」

フォルスの力なら、その速度も見切れる程度の速度になる。それに……。

「……こうして武器を捕まえれば、お前の動きなんて簡単に封じることが出来るんだよ」

「確かにそうだけど、もう忘れたの？」

するとバチバチつと野太刀が帯電し始める。

「例え斬れなくても、貴方に電撃を与えることくらいはできる！」

雷鳴剣！」

先程と同様の電撃が俺を襲い、痛みが体全体を駆け巡る。

「……え？」

しかし、森永の口から信じられないと言った小さな驚きの言葉が零れでた。

これまで森永は俺の動きに驚いてきたが、今回はソレとは比べ物にならない驚きのはずに違いない。

何故なら電撃が直撃したにも関わらず、俺は余裕の表情で野太刀を掴んだままでのだったのだから。

「残念だな。フォルスの強化はこの程度の電撃なんて効かねーんだよ」

「っ！」

痛みはある。けど、麻痺するくらいのダメージではない。

「さっきのお返しだ」

俺は左の拳を全力で握り締め、思いっきり振りかぶりながら、左足を軸にして右足で踏み込む。

「歯を食いしばれ……！」

ドガンッ——！

そして、全力で森永の顔面を殴り付けた。

「ガッ……！」

フォルスの力で殴った結果、森永はその衝撃を耐えきることが出来ず、武器から手を離させる程の勢いで後ろに吹っ飛んでいった。

「……………っ！」

しかし流石と言うか、当たる直前に自分から体を後ろに下がって威力を軽減させるとは。



それでも十分威力のある一撃だぞ。それを倒れもせずに、すぐに受け身をとるなんて。

フォルスになっても森永との実力の差は埋まらないのか？

こりゃ、ファイフスも視野にいれとかないとな。

「……女の顔を殴るなんて、アンタ最低ね」

殴られた頬を擦りながら、森永は非難の目で俺を見た。

「知るか。殺人鬼に最低呼ばわりされたくねーよ」

殺人鬼と言うワードに反応したのか、ギロリと俺を睨む森永。

「誰が殺人鬼よ。勝手に人を、快樂殺人者にしないでくれる？」

「違うのか？ あれほど殺す殺すと連呼してれば、誰だってそう思うぞ」

十人訊けば十人とも頷くぞ。

「勘違いしないで！ 私が殺すのはアンタ達イレギュラーだけよ！」

「その時点で十分殺人鬼だろうが。俺の他に何人転生者が居ると思っただ」

あのKYの話だと、たぶん十人以上は居ると考えていいだろう。

「さあ。明確な数は分からないけど、原作に登場してないキャラが居たりしたら、とりあえずイレギュラーの候補にはなるわね。それから、ソイツらがイレギュラーだと判断したら、次は直接原作に介入するかどうかを聞いて、答え次第で殺す。そんなとこよ」

原作……ね。

いい加減イライラしてくんだよなあ。そのワード。

「……一つ訊いていいか？」

「なに？」

「お前にとって、この世界はなんだ？」

俺の質問に森永はキョトンとした顔になった。それほど、コイツにとって俺の質問は当たり前前で、今更なに言ってるんだと思ってるに違いない。

それでも、俺は質問せずにはいられなかった。森永がこの世界を、未だにどう見てるのか知りたいからだ。

「そんなの、決まってるでしょう」

森永はさも当然と言った口調で回答する。

いや、しやがった。

「作品世界。それだけよ」

十分だ。

「……はっ」

十分過ぎるほどのクソみたいな回答をどうもありがとう。

「森永香奈枝。お前がいつまでも夢を見てるのは構わねー」

俺は奪った野太刀を捨て、今度は利き手である右の拳を全力で握り締め、

「けどな——」

大きく振りかぶりながら、森永に確実に当たるよう狙いをつけ、

「——現実を生きてる人間の邪魔をすんじゃねえよ!!!!」

現状で出せる、最速のスピードで接近する為に、俺は全身のバネを縮めるように身を低く沈め、森永目がけて全力で駆ける。

「いい加減、現実見やがれ！」

そう叫びながら、俺は一番当てやすい森永の腹を目がけて拳を打ちこむ。

「アンタ……馬鹿？」

が、俺の全力の一撃は森永に当たる寸前、見えない何かに防がれた。

「なっ……」

コンクリの壁さえ破壊できる威力の一撃を防いだ？ いや、それ

よりさっきはちゃんと当たったのに、どうして!?

「さっきのは近すぎたから防げなかっただけ。距離があって、尚且つ狙いがばればれなら、前方に盾を展開すれば簡単に防げるわよ。

……それに」

左右の拳を握り締め、素早い動きで俺の懐に潜り込む森永。

「っ！」

「……はあっ！」

咄嗟に逃げようとしたが、森永がそれを許すわけもなく、素早く尚且つ重い一撃を俺の体に叩き込んだ。

「現実を見る？ それはこっちの台詞よ。アンタこそ今の現実をちゃんと見なさいよ。なす術もなく私に嬲り殺される現実を……！」  
そのまま俺は、物凄い速度による拳の連携技を叩き込まれた。格闘技はそこまで詳しくないが、なんとなく森永の動きが拳法のようなモノだと思った。

ガードしようにも、寸前に軌道を変えたりして、文字通り手も足も出せない状況だ。

これじゃ幾ら感覚が強化されていようが為す術がない。

「グッ……ッ……ギ……ハ……ッ！」

「これで今度こそ終わりよ。解放！」

呪文のようなモノを唱えると同時に、突如無数のレーザー見たいなモノが現れ、それが全部森永の右拳に収束されていき、

「桜花崩拳！」

俺の腹目がけて撃ちこんできやがった。

「ゴブア……！！！」

ドン——！！

と轟音が響かせながら、俺はまともに防御も出来ずに強力な一撃を体に打ちこまれた。

「グ……ッウウ……」

その反動で、俺はその場から五メートルは軽く超える距離までふっ飛ばされ、無様に地面に倒れた。

それでもどうにか起き上がり、自分が受けたダメージの確認をする。

両腕両足は……うん、ちゃんと動く。体は……肋骨が何本かは罅が入ってるな。いや、下手したら折れてるかも。

バリアジャケット  
それも防護服とフォルスのおかげだな。ソレがなかったら今頃は人体破裂でもして、そこら辺に血肉が飛び散ってるだろう。

「っ……」

にしてもなんだ……今の？

あの二つならギガノ級の威力くらいは耐えられるはずだ。

なのに、俺をふっ飛ばせる程の一撃だとすると、さっきのはギガノ級以上ってことになるな。

クソッ、フォルスでも森永との差は埋まらないってことか。どれだけ強いんだよ……。

「正直、驚いたわ」

俺が立ちあがるのを見て、目を見開きながら森永はそう言った。

「今の一撃、確実に殺す気で打ったのに、まだ生きてるなんて……。アンタの言った通り、そのフォルスって言う奴の強化は半端ないよ  
うね」

そう言って、ゆっくりと歩きながら俺が捨てた野太刀を拾い、「夕風、モードリリース」そう言って野太刀から指輪のようなモノに変わる。

恐らくアレが森永のデバイスだろう。ソレを左手の人差し指に嵌めると、森永は唐突に空を見上げた。

「そろそろ夜ね……」

その言葉に釣られ、俺も空を見上げた。確かに日は完全に落ち、辺りは薄暗かった。

このままだと数十分後には完全に暗くなるだろう。けどどうして森永は夜を気にしたのだんだ？

「アイツと違って、アンタには不死もなければ驚異的な再生力もないみたいね。なのに、私と戦ってまだ生きているってことは、アンタは紛れもなく強いわ。勿論、耐久力の意味だけど」

いや、褒めてるつもりだろうが、それ、全然褒めてないから。逆に悲しくなる！

すると森永は突然ローブだけ解除して、拳法着だけの姿になった。  
バリアシジャケット  
防護服の一部を脱いだってことは、自分から防御を薄くしたのか？  
なんの真似だ？

「だから、アンタのその耐久力に敬意を表して、奥の手の一つを見

せてあげるわ」

「……………っ!」

奥の手? やっぱりさっきまでの本気じゃなかったてことかよ。  
しかも今、一つって言ったぞ。となると、あと二つか三つはある  
ってことか?

やばい、やばいぞコレ。

アレ以上の攻撃を食らったら、本気で殺される!

どうする。フィスを使うか? いや、肉体強化だけじゃ森永に  
は通じない。それにこのダメージじゃ、強化したところで自由に動  
けない。

まずはこのダメージをどうにかしないと。

「夕風、吸血鬼の真祖をお願い」  
ハイ・デライトウォーカー

『わかった』

デバイスが了承すると同時に、先程までの森永の気配が全く別モノ  
に変質した。

「……………っ!」

なんだ……………あれは?

外見はなんにも変わっていない。けど中身が全く違う。

感知が苦手な俺でも分かる。

圧倒的なまでの威圧感。

対峙するだけで戦慄が全身を駆け巡り、今すぐ逃げろと本能が警  
鐘を鳴らし続ける。

人間なんかじゃない。

アレは森永香奈枝と言う名の化物だ。

「あ……………ああ……………っ」

絶対に届かない。

コレが、森永の本気の一部? コレ以外にもまだ、奥の手がある  
のか?

いくら作品能力だからって限度があるだろう。

こんな……………人間を捨ててまで、化物になってまで、原作通りにし

たいのか？

馬鹿げてる。

コレが、この世界を夢だと思い込んでる奴のなれの果てなのかよ？  
アレがなかったら、俺もコイツみたいになってたのか？

ありえる可能性だ。

……よかった。

だからこそ俺は安堵した。

あんなおぞましい化物にならず、人間のままでいられることに、  
俺は心底安堵した。

「……………」

それと同時に、俺は森永に対して新しい感情が芽生えた。

一度目は無関心。二度目は苛立ち。三度目は恐怖。そして四度目  
は、

「可哀そうに……」

哀れみだ。

今回の上位種達が行っている実験で、もし被害があるとすれば、  
間違いなく一番の被害者は森永香奈枝に違いない。

人間として二度目の生を手にしたはずなのに、ココを夢だと信じ、  
現実だと認めず一つの目的の為に力を求め、森永は化物になる  
ことを選んだ。

しかもその目的が、原作通りと言うくだらんモノだ。

そんな、なんの意味もない目的の為に、森永は人間を捨てた  
のだ。

哀れみ以外になんの感情を抱けと言うんだ？

「アンタ今、なんて言った？」

俺の予想外の発言に、森永は理解できないと言った顔を浮かべな  
がら、もう一度訊き直した。

「可哀そうだって、言ったんだ」

ちゃんと森永に聞こえるようにはっきりと伝える。

「可哀そう？ 私？ ……ふざけるなっ！」

怒気を含んだ叫び声。それだけで全身に鳥肌が立ち、汗が異常なまでに噴き出て、無意識に体が震えだした。

それくらい俺はコイツに恐怖するが、それ以上に助けてあげたいと思った。

俺と同じか少し上くらいの変わらない年代で、しかも女の子だ。それなのに、意味のない目的なんかの為に人間を捨てた森永を、夢だと思っているこの世界を、ちゃんとした一つの現実だと認めさないといけない。

このまま放っておけば、最終的に森永は破滅する。

全ての転生者を殺したあとで、ソレになんの意味がないと気付くはずだ。

そうなれば、森永は意味のない殺人をした罪に押し潰される。結果、心が死に、次第に狂い始め、最後は正真正銘の化物に変わってしまうかもしれない。

そうなる前に、ココがちゃんと前世と同じ現実だと森永に認めさせないといけない。

自業自得だと言えばそれまでだけど。それでも、そうなるって分かっているながらココで見捨てたら、あんまりにも可哀そうじゃないか……！

「……ん？」

そこで俺は、俺自身に違和感を覚えた。

「どうして俺……森永相手に、こんなに真剣になってんだ？」

赤の他人なんかの為に……。関係で言えば敵対関係なんだぞ？  
なのに、どうしてだろ……。

どうしてこんなにも、清々しい気分なんだろう。

「……ハハ……ハハハハ……アツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

「なにが……なにが可笑しいっ！」

「ハハハ——いや違う。お前のことを笑ったわけじゃないよ」

そう。森永じゃなく俺が、俺自身の変わりようが可笑しいんだ。

「？」

俺の意味不明な発言に首を傾げる森永。

（『マスター、さっきから様子がおかしいようですが、一体どうしたんですか？』）

唐突にマリアが念話で俺の様子を聞いてきた。

（お前もそう思うか？ 実は俺もだ）

（『はい？』）

（なあに、ちょっとした心境の変化って奴だよ。なんでか知らねーが、俺は今、無性に森永を助けたくて仕方ねえんだよ）

（『それはまた……突然ですね。先程の一撃で、頭に深刻なダメージでも負いましたか？』）

酷い言われようだが、今回は素直に賛同しよう。

（確かにそうだな。普段の俺だったら、他人がどうなろうとどうでもいいはず。なのに、なんでだろう。今はアイツをそう言う対象に見ることができねーんだよ）

平凡な生活をただ求めるだけの俺が、自分の為だけにしか行動しないこの俺が、始めて自分以外の全くどうでもいい他人なんかの為に行動しようとしてるんだから。

（らしくない。らしくない筈なのになんでだろう。悪くない気分だ）  
その事実が可笑しくて、そして悪くないと思っている自分自身の変わりよう。

コレが笑わずにいられるか？

もしかしてコレ、高町の影響か？

他人の為にひたすら頑張るあの姿を目の当たりにして、俺の心にも少なからず影響を与えたのか？

全く、さすがは主人公様だ。この俺にまで影響を与えるんだから。たまにはこういうのも、悪くないな。

（と言うことで、俺はこれからアイツを助ける）

（『助けるのはマスターの自由ですので私からは何も言いません。ですが、今の森永香奈枝は人間ではありません。恐らく、作品能力



の一つかと思われませんが、概要は不明です』)

(……お前は思う?)

(『恐らくは、人間では使えない力を使える為に、体そのモノを変質させたのだと思います。マスターで言うなら、術を完全に使える為に体を魔物に変えた。そんな感じだと思われます』)

(なるほどね。ま、それもこうして対峙すれば嫌でも分かるさ。今のアイツは人間じゃない。文字通りの化物。それでOKだろ?)

(『はい』)

(だからこそ俺は、アイツを助けたいんだ。化物から人間に戻る為にな)

このまま放っておくことなんて、どうやら今の俺にはできそうにないからな。

(『……分かりました。ですが無茶はしないで下さい。今のマスターと森永香奈枝との実力差は隕石と太陽くらいの差です』)

つまり、近づいたら即死亡って意味か?

(分かった。心に留めておくよ)

そうマリアに言うのと、俺は森永に確認のため、もう一度尋ねた。

「なあ、森永。もう一回訊いて良いか?」

「……なに?」

「お前にとって、この世界はなんだ?」

「はあ? まさかアンタ、さっきの一撃で頭がどうにかなったの?」  
マリアと同じこと言ってるよ。案外似た者同士かも知れないな。

「否定はしないよ。俺自身、自分でも可笑しいって思ってるくらいなんだから」

「わけ分かんない。……はあ、もう良いわよ。どうせ死んじゃうし、特別にもう一回答えてあげるわ」

「悪いな」

「……私にとってこの世界は、ただの作品世界よ。それ以上もそれ以下もない。それが事実であり真実よ」

淡々と、自分の中にあるありのままの事実を語る森永。

「そうか」

ソレを聞いて、俺もありのままの真実を話す。

「けど、一つ言っとくぞ」

「？」

「この世界は夢じゃない。現実だ」

夢見がちな少女に、存在しないと言う残酷な真実を、俺は突き付けた。

「どれだけお前が夢だと言い張ろうが、コレが真実だ」

例えソレがお前にとっての大事なモノだとしても、俺はソレを壊す。

「だから森永、お前のやろうとしてることは無意味なんだよ」

自分勝手に、だたの自己満足かも知れない。それでも俺は、どうしようもないくらいコイツを——人間に戻したいんだ。

「は？ なによそれ。意味がない？ ふざけたこと言わないでよ！」

自分の大事な目的を否定され、激怒する森永。

それでも俺は森永の夢を否定する。

「ふざけてなんかいない。確かにこの世界は【なのは】を基にして作られた世界かもしれない。けどそれだけだ。ココは前世となにも変わらない世界なんだ。原作通り？ そんなのはただの夢だ。そもそも、お前の知ってる【なのは】に、俺達転生者が居たか？」

「それは……」

「居ねーだろ。その時点で、お前の目的は破綻してるんだ」

そうだ。俺や森永が生まれた時点で、この世界は【なのは】であって【なのは】じゃなくなった。

森永が最も嫌う原作破壊は、既に完了してるんだ。

「だけど！ 現にこの世界は原作の修正力が働いてる！なのははちゃんと魔法少女になったし、ジュエルシードの暴走で次元震も発生した。そして管理局もこの世界にやってきた！つまりそれは、世界は原作通りになるように動いてる何よりの証拠よ！」

「そうかもしれない。でもな、それでこの先物語どおり進む保証な

んてもんはどこにもないんだ。小さな切っ掛け一つで未来は変わるんだよ。修正力？ そんな不確定なモノを信じてんじゃねーよ。ココは現実だ。無数の未来が枝分かれしてるんだ。例えばお前が俺達全員を殺そうが、それは全ての転生者を殺した未来になるだけで、決して、お前の望む未来にはならない」

「……………れ」

か細い声で何かを呟きながら、否定するように首を横に振る森永。それでも俺は言う。

「認めるよ。ココは現実で、お前の望む夢なんかじゃないってことを」

「……………まれ」

両手で耳を押さえ、俺の言葉が聞こえないようにする。

だから俺は、耳を押さえても聞こえるくらい大きな声で言う。

「だからもう止めろ！ 意味のない目的なんかの為に、人を——」

「黙れええええ——っ！！」

俺の大声を掻き消す勢いで叫びながら、森永は物凄い速度で俺に突進してきた。

そのまま拳を握り締める森永。ソレを俺の体を目掛けて叩き込んだ。

「ガ——ッ！？」

フォルスの視力を持ってしても森永の動きは捉えきれず、俺は躲すことも防御することも出来ず、十メートルは軽く超える距離までふっ飛ばされ、さっきと同じように体を地面に叩きつけられた。

「現実現実ってうるさいのよっ！ この世界が現実？ ふざけないでよっ！ 私は認めない。この世界が現実なんて、絶対に認めない！！」

森永の必死な否定の声が耳に突き刺さる。

「だって、そうでしょう！？ やっと手に入れた私の、私だけの家族が、どうしてすぐになくなっちゃうのよ！？ どうして前と同じように私だけ独りぼっちにならないといけないのよ！？ そんなの

って……悲し過ぎるじゃないっ!! だからココは現実なんかじゃない。ただの夢で、私の大好きな【なのは】の世界なの! だから私は、私の大好きなこの世界を壊そうとするアンタ達転生者が憎い!」

俺は殴られた場所を左手で抑えながらどうにか立ちあがり、自分が受けたダメージを確認する。

とりあえず、今の一撃で確実に肋骨は折れたな。たぶん、内蔵にもダメージはあるだろう。尋常じゃない痛みがそれを教えてくれる。そんな状態で、よく立ち上がったなと自分でも思う。

でも、倒れたままではいけない。殺されていいわけにはいかない。

何故なら……。

「はぁ……はぁ……っ……うう」

荒い呼吸をしながら痛みを耐え、俺は十メートル先に居る森永を見る。

さっき殴られる寸前に見えた森永の目。

それがとても……辛そうに見えたんだ。

思えば、始めて会った時からアイツは迷っていたんだ。人を殺すことを。

幾ら夢だと思いつても、どこかで人を殺したくないと思っている森永も居るはずだ。

あの日の夜と今、俺が殺されてないのが何よりの証拠だ。

森永香奈枝は人を殺すのを躊躇っている。

でも、それ以上にこの世界が好きなんだろう。夢だと思いついてるこの世界が……。

それを守る為に、森永はここまで強くなり、化物になることを選んだんだ。

確かにコイツの目的は無意味で、やり方は最悪だ。けど、気持ちだけは本物なんだ。

ただ、その本物が間違った方に進んでるだけなんだ。

だったら、進んでいる方向を元に戻せばいいだけの話だ。それだけで、コイツの強行は止められる。

問題は、どうやって元に戻すかだ。

言葉での説得は逆効果だ。力尽くは、實力不足で無理。

……だったら、一瞬だけでも森永との実力に追いつく方法をとるまでだ。

ドラグノン・ディオナグル……。

テッドの最大の術で、使えばその反動で俺自身も瀕死になる術。

掛け値なしの、命を張った勝負だ。

森永の攻撃を敢えて食らい、俺を殺したと思わせた隙に、この一撃を叩き込む。

チャンスは一度きりだ。二度目はない。それでも、アイツを止められる唯一の方法はコレしかない。

方針を決め、覚悟も決め、俺は森永を見る。

相変わらず、辛そうな目で俺を睨む森永。

にしても、この俺が同情で他人を助けようとするとはね……。

しかも最初がコレだぜ？ 助けようとしている相手にボッコボコにされるんだ。人助けって本当、割にあわねえよな。

だから、俺が他人を助けるのはコレが最初で最後。

だからこそ、この一度目はなにがなんでも絶対に成功させてやる！

俺は乱れた呼吸を静かに整える。

「だから殺す！ 壊そうと思ってる奴も、壊そうと思ってる奴も全部ひっくるめて、【なのは】に関わろうとする転生者は全員、私が殺す。私が、この世界を守る！」

ギロリ、と辛そうな目をしながら立ち上がる俺を睨みつけ、そう宣言すると、森永は右手を俺に向ける。そして、小さな声で懇願するように言った。

「だから……もう死んで」

俺にそう言うと、森永は呪文を唱え始めた。

「プラクテ・ピギ・ナル！ 来たれ氷精、闇の精！！」

聞き覚えのある呪文だ。恐らくあの時の魔法だ。たぶん威力はあの時とは比べ物じゃないだろう。きつと、ディオガ級以上の威力に違いない。今の俺のダメージだと、アレを食らえば確実に死ぬ。

『マスター！ 退避を！』

目の前で発動しようとしている必殺の魔法を見て、マリアが叫ぶようにそう言った。

「悪いなマリア。こっからはかなり無茶するぞ！」

『な……っ』

それにもう、アイツの魔法から逃げ切る体力はない。

「闇を従え吹けよ常世の氷雪——」

けど心配するな。死ぬ気なんて毛頭ない！ 魔力充填！

「闇の吹雪——！」

「フィフス・ナグル！」

第五の術を唱えると同時に、強力な氷と暗闇が合わさった螺旋状の塊が俺に向かってくる。

「……っ！」

俺はすぐさま前方に体全体を覆うくらいの大きさまでマントを伸ばす。そして円形状の形にして、森永の必殺の魔法を受け止める。

「グッ……アアアアアアアアアアアアアア——」

が、嵐のような一撃を受け止めた瞬間、マントの盾は二秒で消し飛び、そのまま俺に直撃する。

まるで全身を粉微塵にする勢いで、体が削られて行く気分だ。

でも、

「——アアアアアアアアアアアアアアアアアア——！」

倒れない。

俺は両足に力を入れて、全力で踏ん張る。

そして、この一撃が過ぎるのをただ待つ。

待った先には、森永が居るから。

だから耐えて、耐えて、耐え抜いて、終わるのを待つ。

倒れるのは、アイツに俺の言葉を伝えて、この一撃を叩き込んだ

後だ。

それまでは絶対に倒れない！

「あ――」

フィフスを発動させ、全力で耐えぬいた結果、どうにか森永の必殺の魔法で死なずにすんだようだ。

「……はっ……ああ……は……」

しかし体はボロボロだ。傷は無数にあり、そこから血が溢れ出ていた。

だが意識はちゃんとある。

周囲を確認すると、辺りは魔法の余波で砂埃が舞い、視界が閉ざされていた。

今がチャンスだ！

俺は全身を襲う痛みを我慢しながら全力で駆けだす。

森永の姿を見つけると、俺は素早く左手を伸ばし、森永を逃がさないように腕を掴み、魔力の充填を始める。

「なっ！？ アンタ……っ！」

突然のことに驚く森永。俺がまだ生きていることを確認するとまた、さっきと同じように睨んだ。

「アレを食らってまだ生きてるなんて、ほんとアンタの耐久力には驚かせるわね」

「……………」

俺はなにも言わず、黙って魔力の充填だけに集中する。

「で、アンタは私を捕まえてどうするわけ？ そんな体じゃ、ろくに動かすことも出来ないはずよ。いい加減諦めて――」

「ハハハ」

森永の言葉を最後まで聞かずに、俺はつい笑ってしまった。

「なにが可笑しいの？」

「いや」

魔力の充填は終わった。後はトリガーを引くだけだ。けどそれはまだだ。まだ、森永に伝ええないといけない言葉がある。

「この後に及んで……まだ、俺に話しかけるなんて、な……。そんなんだから……お前の覚悟は薄いんだ」

「な……に？」

喋る度に痛みが走り、言葉が途切れ途切れになってしまふ。それでも、痛みを我慢しながら必死に酸素を吸って、言葉を紡ぐ。

「確かに……お前の殺意は本物だ。けど、な、ソレを行動に移せるほど……お前は、殺人を許容してない」

「そんな——」

「そんなわけが、ない……か？　自分を騙すのも大概にしろ……。お前は、そこまで非情になんか……なれない。前にも言った、はずだ。人を殺すなら……覚悟しろ……って」

「っ……覚悟ならちゃんとした！　アンタに言われたあの日から……っ！」

「俺の言った……覚悟は……そう意味、じゃねえ……」

「……え？」

「誰かを、殺すって事は……ソイツの全てを、お前が背負うって……ことだ。ソイツが手に入れる、幸福も絶望も全部……ひっくり返して……だ。ソレを背負う、覚悟もない奴が……人を殺せば、大概是……罪の意識で、自爆する……」

俺はそれを知っている。現に俺がそうだったからな。

あの日、俺の後を追いかけて来るあの人から逃げきるため、俺は道路を横切った。そしてあの人は……。

「だから——」

周りは事故だと言う。でも、俺があんな方法をとらなかったら、あの人は道路を横切らなかつた。だから殺したのは俺だ。

あの人が手に入れるはずだった全てを、俺が奪ってしまったのだ。だから、

「——そんな覚悟もない奴が、人を殺すなんて言ってるじゃねえよ……！」

それが人だったら、常人なら間違いなく罪の意識で押し潰されて



しまう。

そして、目の前に居るコイツは間違いなく押し潰される。

「アンタに……」

ポツリと森永が言葉を零す。

「アンタに私のなにが分かるって言うのよ!? 知ったような口を

……叩くなっ!!」

辛そうな目をしながら、それでも殺意を込めて、俺を睨みながらそう言った。

「ああ、そう……だな。お前の言う通り、俺は、なににも知らない……。お前がどんな……理由で……そんな、……ふざけた目的を掲げたのかも……。けどな」

右手を握り締めながら、体中の痛みに耐えながら、俺ははっきりと言った。

「覚悟も持っていないような奴なんかに殺されるほど、俺はお人よしじゃねえ!!」

右足を軸にして、左足で踏み込みながら、必死に呼吸する。

「頭冷やして、もう一度よく考えろ! ココが夢か、現実か、きちんと理解して、お前の敵がなんなのかを、ちゃんと……決めろ!そして……」

俺は大きく息を吸って、森永に伝える。

「化物から人間に戻れ」

「っ!？」

「コレは、その為の切っ掛けだ。迷惑ついでに……受け取りやがれ!!」

大きく右手を振りかぶり、最大の一撃を森永にぶつける為のトリガーを唱える。

「ドラグノン・ディオナグル!!!!」

唱えたと同時に、俺は最大強化された一撃を森永の顔面に叩きこんだ。

ドゴン——!!!!

と言う激突音が響き、次にメキメキと鈍い音も聞こえた。

「ガッ————ハッ!!??」

最大の一撃を食らい、豪快に吹っ飛ぶ森永。

今度は受け身もせずに、そのまま地面に激突した。

「……………」

立ち上がる気配は……ないな。

『倒した……んですか？ あの森永奈枝を……』

立ち上がらない森永を見ながら、マリアは目の前の現状に驚きながらそう言った。

『……っ、マスター、どうやら結界が解除されたようです』

マリアの報告を聞き、俺は確かめるように空を見上げる。

すると、俺を閉じ込めていた結界が消え、暗い夜空が目映った。たぶん、森永を倒したから消えたと思う。

「——————ッ!!!!!!」

それを確認すると同時に体が悲鳴を上げた。全身を駆け巡る尋常じゃない激痛。パリパリと皮膚は裂け、そこから血が溢れ出た。

ただでさえ血塗れなのに、これ以上血を流したら、待っているのは……。

『マ、マスター!?!』

マリアの驚く声が聞こえるが、今はそれに答える余裕はない。

「っううう!!」

酷い激痛のせいで、立つことも出来ずにそのまま地面に膝をつく。

「……ゲホッ、ゴホッ、ガハッ!!」

今度は咳がでた。あまりにも酷い咳のせいか、口から何かを吐きだす。

咳が止まり、地面を見ると、そこには大量の血が付着していた。

え？ これってまさかのDEATH END?

そう思ったと同時にぼやけていた視界が暗くなり、意識が朦朧もろろろし始めた。

あ、こりゃあ死ぬわ。

昔、独りきりの女の子が居ました。

両親は、女の子は物心がつく前に事故で死にました。まだ小さな女の子を残して。

その後、女の子は親戚中を盥回しにされました。最終的には女の子が小学生になる前に、赤の他人と言っていいほど遠く離れた親戚の家に引き取られることになりました。

幸い、その親戚の家庭はとても裕福であり、子供も一人しかいなかったのも、女の子一人を養えるくらいの余裕がありました。これで、女の子の衣食住は保障されました。

ですがそれだけです。

ここからが、女の子にとってもっとも辛い人生の始まりだからです。

この家に始めてきた日、この家の主人は女の子に四つのプレゼントを渡しました。

小さな部屋と最低限の服と勉強道具。そして、数字の零がたくさん書かれた紙を渡さしました。

家の主人は女の子にこう言いました。

「お前はこの家の子ではない。あくまでお前が大人になるまで預かるだけの関係だ。だが、ただでお前を育てるほど俺は善人じゃない。その紙は、お前を育てる為に最低限必要な金額だ。お前の為に使ったその金を、大人になって働き、全額俺に返せ。いいな」

まだ幼い女の子は、家の主人が言ったことを完全に理解できませんでした。

それでも一つだけ理解したことがあります。

ココは、自分の居場所ではないことを……。

与えられたのは、小さな部屋と最低限の服と勉強道具と自分が大人になるまでに必要な金額が記された紙。

そして、自分の立ち位置を。

この家の中では女の子はただの異物。

最初の日にはソレを思い知らされた女の子は、その事実には絶望し、自分の両親を恨みました。

どうして自分がこんな目にあわないといけないのかと。

それでその事実が消えることは無く、ほどなくして女の子は自分の運命を受け入れることにしました。

それから女の子は必死になって勉強しました。

この運命から逃れ、自由になるために、この十六年間に勉強に捧げました。

同年代の子が外で楽しそうに遊んでいる時も、青春を謳歌している時も、恋を楽しんでいる時も、女の子の大事な時間は全て勉強に費やされました。

その必死の努力が報われ、女の子は有名国立大学に現役で合格できました。

後はこの学校を首席で卒業し、大きな会社に就職して、お金をたくさん稼いであの家に全額返せば、自分の長年の目的が達成できる。目的達成まであともう少し。

ところが、それを全て覆す出来事が、唐突に女の子を襲いました。あの家の人間が、海外旅行で起こった爆破テロに巻き込まれ、三人とも死んでしまったのです。

突然の出来事に女の子は驚きながらも、この機会を逃しませんでした。

この家では確かに女の子は遺物です。ですが、戸籍では女の子はこの家の子供になっています。

女の子はそれを最大限利用して、凄腕の弁護士を雇い、この家が残した莫大な遺産の全て自分の物にしました。

勿論、邪魔はありました。

しかし女の子は群がる親族達を知略の限りを尽くし、全て蹴散らしたのです。

結果、女の子は長年欲していた自由と莫大なお金を手に入れました。

た。

女の子は喜びました。

自分の人生がこれからようやく始まることに。

それから女の子はすぐに大学を辞めました。

これからの自分の人生に、勉強や就職なんてなんの意味もないからです。

あの家が残した莫大な遺産は、人間一人なら余裕で遊んで暮らせてしまう額だからです。

女の子はそのお金を使って、今まで出来なかったことをたくさんしました。

美味しい食べ物をたくさん食べ、綺麗で可愛い洋服をたくさん着て、高価な宝石をたくさん身に付け、今まで見たくても見れなかったり出来なかった映画やドラマやアニメ、小説や漫画やゲームを無尽蔵に買いあさりました。

今まで我慢してきたこと反動が一気に爆発したのです。

自由。

なんて素晴らしいモノなんだと、女の子は喜びを噛み締めながら享受します。

ですが、そんな日々も長くは続きません。

ある日女の子は気付いてしまいました。

欲しい物は全て手に入れてきた女の子。それでも、心のどこかで満足してない部分があることを。

それがなんなのか、いくら考えても分からない女の子は、心がいちやもやしてきました。

女の子は考えても仕方ないと割り切り、気分を変える為に買い物に出かけました。

欲しい物をあらかた買いましたが、それでも女の子は満足できませんでした。

自分は一体どうしてしまったのだらうと、女の子は不思議に思います。

そんな時、ふいに女の子の視界に×××××を捉えました。

それを見て女の子は、ようやく自分が満足できない理由が分かりました。

女の子は、「そっか」と呟きくと小さく笑いながら独り、あの家に帰りました。

その後、女の子は独りあの家で首を吊っている姿を警察に発見されました。

警察はこの状況から自殺か他殺かで悩みました。理由は遺書が見つかからないからです。

捜査の結果、警察は自殺だと決定しましたが、未だに理由が分かりません。

たくさんの人が、女の子の自殺の理由を推測しますが、それが本当かどうかは誰にも分かりません。

結局、理由を知っているのは女の子だけ。

そして、その女の子はもう居ない。

嫌な夢を見た。

前世の自分。意味のない人生の記憶。

今でも自分で首を吊った感覚を覚えてる。今でも自分の命が消える瞬間を覚えてる。

それを夢でまた体験してしまった。

本当に、嫌な夢だ。

「つ……ううう」

目を覚ますと、顔からじんじんと鈍い痛みを感じるので、私は目を覚ましてつい手で顔を押さえた。

にしてもどうして私はこんな所で寝てるんだろ？

「一体なに……あ」

記憶を思い出すとすぐにその理由が分かった。

「……私、負けたのか」

ポツリそう零すと、私はすぐにアイツの姿を探した。

「居ない……」

けどアイツの姿はどこにもなく、あったのはアイツが居たであろう場所に、たくさんの血が付着していただけだった。

「っ……」

近づいてみると、その多さに驚いた。

素人目から見ても、この量はやばい。普通の人間なら死んでいてもおかしくない状況だ。

それなのに、この場にアイツが居ないってことは、生きてるってことになる。

なんて奴だ……。

本当、アイツの耐久力は化物そのモノだ。

《化物から人間に戻れ》

ふいに、アイツの言った言葉が思い出した。

「……化物、ね」

アイツから見たら、私の方が化物ってことよね。

殴られた顔を触れて見ると、痛みはもうない。

あれ程の威力を防御なしに食らったのだ。例え魔力で身体強化をしていても、致命傷になる一撃のはず。

そして、普通の人間なら即死だ。

そんな一撃を、モロに喰らっても死なない自分。すぐに再生される体。

「確かにこれじゃ、化物って言われてもしようがないか……」

私は力を求めた。それこそ、【ネギま！】に出て来る技、魔法、道具。全て習得した。

全ては転生者を殺す為だけに……。

「けど……」

それをアイツは否定した。

私の行動にはなんの意味もないと。いい加減現実を見ると。ふざけるな！

ガリッ——と両手の皮膚が破ける音が聞こえた。両手を握り締めすぎたようだ。見ると少量だが血も流れてきた。

じんじんと痛みを感じる。

『大丈夫か？』

すると待機モードの夕凧が私に声をかけてきた。

「平気よ。すぐに治る」

既に痛みはない。

『違う。体じゃなくて心の方だ』

「……どう言う意味よ」

『お前、あの時、あのことを思い出したろ？』

「……………っ！」

夕凧が言うあの時とは、おそらくアイツが私に現実を見ろと言われたことだろう。

確かにそれで私はアレを思い出して、少々感情が高ぶった。

『アレからだよな。お前がココを現実じゃなくて、作品世界だと思うようになったのは』

「それがなに？　ココが作品世界なのは変わらないでしょ？　あの上位種も言ってた。ココはアイツらが創ったって。だったらココは夢の世界。現実じゃない」

『……………』

そうだ。ココは夢。前世で見ていた【なのは】の世界に私は居るんだ。

決して、現実であってはいけないんだ。

そうだったら認めないといけなくなる。

だから私は……。

「ん？　ちょ、ちょっと夕凧！？」

滅多に人型にならない夕凧が、突然人型へと姿を変えると、私の顔をジッと睨みつけるように見た。

一体どうしたの？

「なによ……」



「なあ香奈枝。いい加減、自分の心に素直になれよ」

「はあ？」

いきなり人型になって、なにを言いだすかと思えば素直になれ？  
意味が分からない。

しかし夕風の言葉はまだ続く。

「お前のフラフラした行動はそろそろ目に余る」

「どう言う意味よ」

「言葉通り。お前の行動には一貫性がまるで見えない」

「なっ！」

私は思わず夕風の胸倉を掴む。

「ふざけたこと言ってんじゃないわよ。私の目的はいつだってイレギュラーを殺すことで頭一杯よ」

そう。それは偽りない私自身の目的だ。それは夕風だって分かっているはず。

なのにどうして、アンタまでアイツみたいなこと言うのよ！

「自分で気付いていない時点で重傷だぞ」

それでも夕風は態度を変えることはなかった。

「じゃあ言ってみなさいよ。一貫性のない私の行動をつ！」

そう怒鳴ると、夕風はわざとらしくため息を吐いて私に言った。

「そうだな。まず、始めて黒マントと戦闘した時だ。あの時お前は明らかに殺すことを躊躇った。そしてその隙を突かれて返り討ちにあった。実力はお前の方が上なはずなのにな」

「……っ」

確かにそれは認める。あの日、私は始めて行う殺人に躊躇った。

けどそれは、まだ心をちゃんと制御してなかったからだ。

今は違う。ちゃんと心を制御できてる。

「次に、中里裕也との戦闘だ。あの時、お前は始めて人を殺した。そこまではいい。問題はその後だ。確かにアイツが殺しても死ななかったことはおれも驚いた。けどそれだけだ。例えば死ななくても、何回も殺せばいずれ死ぬ可能性だってあるし、それが無理でも身動

きを奪う方法だってあった。なのにお前は、それ以降上手く戦えなかった。何故だと思う？ それはお前が殺すことを躊躇ったからだ」

「ち、違う！ 躊躇ってなんかない！ 私は本気で……」

そりゃ、殺しても死ななかったことには驚いたわよ。それでも殺そうと、私は……。

「本気？ アレでか？ ハイ・デライトウォーカー 吸血鬼の真祖を使ったのに、お前は中里裕

也に追いつめられた。奥の手を使ったのに、お前はアイツから逃げだした。それはどうしてだ？」

「……うう」

そうだ。夕風の言い分ももつともだ。

あの時、私は中里裕也を殺しきるために、ハイ・デライトウォーカー 吸血鬼の真祖を使った。なのに、逃走と言う最悪の結果を残した。

アイツが強いとかそう言う問題ではなく、アレを使った時点で私はアイツを殺しきるはずだった。

「そして極め付けがこの状況だ。格下の相手が、得意な接近戦で挑んで来た。なのにお前はアイツを殺すことができなかった。どうしてだと思う？」

「そ、それは、アイツの耐久力が想像以上で——」

「確かにアイツの耐久力は想像以上だ。それでも、お前が押していたのは間違いない。なのにお前は負けた」

「……………」

私はなにも言えず、夕風の胸倉を掴んでいる手を離した。

「アイツとの再戦で、お前は油断と同時に躊躇したはず。相手は自分より弱い。そして、殺さなくていい相手だったのに、結局殺さないといけない事実。その油断と躊躇を突かれて、アイツの起死回生の一撃を食らって負けた。結局、殺す一歩手前で、お前自身の心が邪魔をする。これがお前の行動に一貫性のない理由だ」

「……………」

夕風の言う通り。

結局私はなにも出来なかった。

殺す殺すと威勢はいいのに。いざ殺ろうとすれば、心が拒否反応を起こす。

アイツの言う通りだ。

《確かに……お前の殺意は本物だ。けど、な、ソレを行動に移せるほど……お前は、殺人を許容してない》

私は自分を騙してる。

そりゃそうよね……。前世の私は誰かを殺したことなんてない。

殺人はダメだと頭も心もちゃんと理解していた。

どんなにあの家が憎くても、それだけは考えもしなかった。

なのにココに来て誰かを殺そうと思っても、無理な話。私は殺人を許容できない。

もしあの時、中里裕也があのまま死んでいたらどうなっていた？  
アイツの言う通り、殺人と言う重くて消せない罪に押し潰されて自爆するだろう。

だったら……。

「この殺意は、どうすればいいの……？」

例えば殺人を許容できなくても、イレギュラーに対するこの気持ち  
は本物だ。

私は【なのは】に関わる全ての転生者が憎い。

一体どうすれば……。

「……………」

夕凧はなにも言わない。

私が漏らした言葉が聞えているはずなのに、この相棒はなにも言  
わない。

いつだってそうだ。

私がなにかを決める時、コイツは黙って私の答えを待つ。

いつものことだけど、今はそれが、辛い。

一言で良い。なにか言って。

そう願っても、夕凧はなにも言わない。

期待した分、それが報われないことに対してつい落ち込んでしま

う。

はぁ。どうして私はこんなに心が弱いんだろ。  
心が強ければ、こんなことにはならないのに……。

いつそのこと………ん？ 待てよ。

「……………そうだ」

この手があった！

私は自分を褒めたい衝動に駆られそうになる。

それ程、このアイデアは素晴らしいと思う。

これなら、今抱えてる問題は全部解消だ！

「決めたわ夕風」

「ん？」

「アンタの言う通り。どうやら私って、自分が思っていた以上に心が弱いみたい。だから今までイレギュラーを殺せなかったと思う」

「だな。それで、どうするんだ？」

「簡単よ。心が人を殺すことを躊躇うなら、いつそのこと心なんて消せばいいのよ」

「な、に……？」

私の決定に、今までそうかと頷く夕風が、始めて驚いた反応を示した。

それが新鮮で、私はくすくすと小さく微笑んだ。

「アンタがそうやって驚くなんて始めてね。まあいいわ。それよりも、問題はどうかやって心を消すかね。確か、【ネギま！】には惚れ薬って言うのがあったわね。アレって人の心を操る道具のはずだから、その応用で心を消せることも可能かな？ まあ、無理だったら吸血鬼の力で私自身に暗示でもかければいいか……ってどうしたの夕風？」

見ると、夕風は今まで私に見せたことがない顔を浮かべていた。怒ったり、笑ったり、からかったり、心配したり、ほっとしたりと色んな顔の夕風を見てきたけど、この顔は始めて見た。

この表情……つい最近どこかで見た顔に似ている。

確か……。

《可哀そうに……》

ハイ・デイトウオーカー

そうだ。私が吸血鬼の真祖になった時の、アイツにそっくりなんだ。

でもどうして？ どうして夕風がアイツと同じ顔をするの？

「香奈枝」

ひとしきり夕風が私を見るとポツリ私の名前を呼んだ。

「ん、なに？」

まあいいわ。どうせ私をからかう為の伏線かなにかでしょう。

コイツはそう言う奴だ。

「おれは」

だから信じられなかった。

夕風が、私の一番の味方が、

「もう、お前と戦えない」

私を捨ててるなんて。

失敗だ。

大きな失敗だ。

まさか、管理局に捕まるなんて……。

オレは今、おそらくアースラの一室に居た。

目を覚ましたオレはすぐに状況を思い出し、ココから脱出しようとしたが、当然のごとくナイトは没収されていた。

それでも宝具は召喚できる。

ただ、召喚するのにかなり複雑な魔力制御が必要で、ナイトのサポートがなければ上手く召喚が出来ないのが難点だ。だから戦闘ではナイト無しでは召喚する暇はない。

だが、今は戦闘時じゃないから集中して魔力を制御することができる。

オレは久しぶりの宝具召喚に全神経を集中して魔力を制御した。

そして召喚は成功した。

「宝具召喚！ 王の財宝！」  
ゲート・オブ・パレロン

オレの背後から空間が歪み、そこから適当な宝具を一つ選んでドアに向かって射出する。

が、

「なっ！」

宝具がぶつかったにも関わらず、ドアには傷一つ付かなかった。どうということだ？

宝具の一撃で傷がつかないなんておかしい。そう言えばあの時もアイツに向かって宝具を射出させたのに、アイツは涼しい顔でそれを全部防ぎった。

しかもミッドの防御魔法で……。

「クソが！」

オレは思わずドアを蹴る。

ガン、ガンガンガンガン——！！

宝具の一撃でビクともしないドアが、子供の蹴りでどうにかなるわけがない。そんなことは分かっているが、蹴りたい衝動は止められなかった。

クソッ、どうしてこうなったんだ！

本当だったらオレの口先で管理局を追い払う予定だったのに。

オレの言葉は的外れじゃなかったはずだ。クロノがオレの言葉で動揺したのがいい例だ。

あのままいけばオレの思い通りに事が進むはずだった。

それをあの、正体不明の執務官が邪魔しやがった。

おそらくココに連れてきたのもアイツだ。

ちくしょうが！

そう思いながら何度もドアを蹴り続けると、突然ドアが横にスライドした。オレは蹴るはずのモノがなくなったことで、そのままバランスを崩して前に倒れる。

「おっと、元気いいなあ。この分だと大丈夫のようだ」

それを受け止めてくれたのが、オレをココに閉じ込めた張本人。

「アロウン・カーティネス……！」

怒りを込めて、オレはソイツの名前を口にした。

「ま、元気がいいのは歓迎だが、ドアを蹴るのは頂けないな」

「はっ、どうせ壊れないんだ。別にいいだろ」

オレはアロウンが受け止めた手を払いのけ、一步下がる。

「ふう、前言撤回だ。元氣過ぎるのもあまり歓迎できないな」

「だったら、家に帰してくれよ」

「それは出来ない。キミには聞きたいことがあるし、それが終わってもキミを解放するわけにはいかない」

「はあ？ なに、管理局っていつから誘拐組織に鞍替えしたわけ？」  
嫌味な感じで言ってみるが、アロウンは涼しい顔で笑った。

「ハハハ。誘拐組織か。なかなかユニークな言い方をする、な……」

ドッ——！

笑いながらアロウンは、その右足を使っていきなりオレを蹴り飛ばした。

突然のことに混乱するオレ。そのまま床に転がった。

「て、めえ！ いきなりなにすんだコラ！？」

「なについて、私とキミとの上下関係の把握さ。部活とかで習わなかったか？ 転生者」

「……………っ！」

コイツ、やっぱりオレと同類か……！

「あいにく、こちらら万年帰宅部だったんでね」

「そう？ それは悪かった」

ガン——！

「……………っ！？」

立ち上がろうとすると、今度は頭を踏まれた。

「んじゃあ、コレが初体験だな。運動部の上下関係が分かりやすくなる方法」

「ちっ……そんな方法、知りたくもなかったよ」

小声でそう呟く。

「で、分かってくれたかな？ 私とキミ。どちら上か」

この状況じゃ、どう見たっててめえが上だろ。

それにナイトがない状況で、コイツと戦っても勝ち目がない。ここは大人しく従うか。

そう思いながらもオレは首を縦に振って意思表示する。

「よろしい」

そう言ってアロウンはオレの頭から足をどけた。

オレは頭を手で払いながら、「いつか虐待で訴えてやる」と呟きながら、さっきまで寝ていたベッドに腰掛ける。

「で、執務官殿はこんな小僧になにが訊きたいんだ？ 生憎、オレが知っていることはほとんどないぞ」

フェイトのことを聞きたいなら、拷問されても口を割らないつもりだからな。

「それじゃ幾つか質問する。まず、キミの名前を教えてください」

「……中里裕也」

「中里ね。それじゃ中里君。キミは地球生まれか？」

「ああ」

「今まで会った転生者は？」

「……二人。黒マンツの馬鹿と、もう一人はローブと拳法着の女の子だ」

「ふうん。なるほど」

なにがなるほどなんだ？ それにどうしてフェイトのことを聞いてこない。

いや、待てよ。もしコイツが原作を知ってるなら、PT事件の内容も知ってるはず。

だったらオレからフェイトのことを聞く必要もない。

ならどうしてオレを拘束した？

なにか別の理由があるのか？



「おい、こっちからも質問いいか？」

「なんだ？」

「アンタもオレと同じ転生者か？」

「そうだ。生まれはミッドだ」

「それじゃ、原作も知ってんのか？」

「いや。生憎アニメとかには興味がなかったからな。上位種とかに会うまでは、存在すら知らなかった」

「……そうか」

原作知らない？ だったらどうしてフェイトのことを聞かないんだ？

今の管理局はフェイトの情報が最優先のはず。

なのにどうしてコイツは、転生者のことを聞くんだ？

「ハハハ、不思議そうな顔をするな」

「あ？」

「知りたいか？ どうして私があの子より転生者のことを聞くのか」

ちょっと待て、今コイツ、聞き捨てならねえこと言いやがったぞ。

「……フェイトを犯罪者扱いすんな」

「犯罪者以外にどんな扱いをすればいいんだ？ ロストロギアの強奪及び不正所持。更に公務執行妨害。これだけあれば十分だ」

「フェイトはまだ子供だ。子供のしたことくらい多めに見れないのかよ管理局」

「子供だからだ。悪いことは悪いとちゃんと教えないといけない。

それが大人の役目だ糞ガキ」

「フェイトはちゃんと悪いことをしてる自覚はあるぞ」

「それなら、尚更性質が悪いな」

コイツ……。

「理由も知らない癖に、勝手に決め付けんなよ……っ！」

「なら教えろ。こっちはキミと違ってなにも知らないんだ。理由が理由なら罪も軽くなるだろう」

「無罪にならないのかよ」

「ならない」

アロウンはハッキリとそう言った。裁判官が判決を下すように。

「ふざけんなてめえ!!」

頭にきた。

オレはなにも考えず、アロウンの胸倉を掴む。

フェイトがどんな想いでジュエルシードを集めてると思ってやがる!

ただプレシアの愛情が欲しいだけなんだ!

そんな、子供なら誰もが求める理由を、コイツは一言で切り捨てた。

ふざけんな!

「その程度の理由でも無罪にならないってんなら、そんな法、オレがぶっ潰してやる!!」

ドス——とオレが胸倉を掴んでいる状態で、アロウンが右手でオレの首を掴み、そのままベッドに押し付けた。

「自分の考えで物事を測るな。どんな理由があつたとしても罪は消えない。例え社会が無罪だと決めても、罪を許しても、それで罪を犯したと言う事実を消えやしない。この先あの子供がどれだけ善行をつもうが一生消えない。一生だ」

一生だと? それがどうした!

「それこそ、てめえの考えで測んな! 誰だって、生きてりゃ罪の一つや二つくらいはある。それで許されるならいいだろ!! 問題はその後犯罪を繰り返すかどうか、それが重要だろうが!! 少なくともフェイトは犯罪を繰り返さない! 絶対に!」

そうだ。フェイトは絶対に繰り返さない。原作を知ってるからとかそういう問題じゃない。

フェイトと接して、オレはそれを確信した。

フェイト・テストロッサと言う人間は、犯罪を繰り返さない人間だ。

「は？ なにを言ってる。そんなの当たり前だろう」

オレがそう言い切ると、アロウンはキョトンした顔でオレにそう言った。

「私が言ってるのは罪が消えないってことだけだ。勘違いするな」

「な、てめえがそうさせたんだろうがっ！」

あんな言い方されたら誰だって勘違いするだろ！

「ハハハ、面白い奴だ。キミのその正義。気にいったよ」

「はっ、正義なんて曖昧なものを持った覚えはねえよ」

「いいや。キミの今の言葉で確信したよ。キミはキミなりの正義を持ってる」

「勝手に決めつけんな」

正義なんて、人によって解釈が違うようなモンを持っても邪魔なだけだ。

「所で、そろそろその腕を離してくれないか？」

「それはこっちの台詞だ。お前から離せ」

「ん？ もう上下関係を忘れたのか？」

「……………」

オレは言われた通り、アロウンの胸倉から手を離した。それを確認すると、アロウンもオレの首から手を離した。

押さえつけているモノが無くなったことで、オレは体を起す。するとアロウンがオレに言う。

「あ、そうだ。キミ、さっき言ったな」

「あ？」

「もしキミが法を潰すって言うなら、私は全力でキミ排除するよ」

涼しげな顔で、アロウンは何事もなかったかのようにそう言った。その言葉が冗談じゃないことを、オレは肌で感じ取った。

それを聞いてふいに思った。

アロウン・カーティネスはどんな正義を持っているのかを。

「さて、それじゃ本題に戻ろうか」

オレはなにも言わずにアロウンの言葉を待つ。

アロウンは懷からデバイスを取り出し、そこから一つの写真を空間モニターに映してオレに見せた。

「……………っ!？」

それを見た途端、正直吐きそうになった。

モニターに映っているのはどこかひらけた場所だろ。

しかし問題はそれじゃない。

その場所の全てが無数の血の池と肉の塊で埋まっていた。

両手両足と思われる物があちらこちらに散らばり、上半身と下

半身と思われる物は分断。大抵の肉の塊がソレだ。

おそらくソレらは、元は人間だったに違いない。

そしてその中央に付近、血と肉以外に人の形をした物体が居た。

しかも最悪な状況で、その姿を撮られていた。

ソイツが人間の頭と体を引きちぎる瞬間だ。

首と体。それがちぎれそうになる瞬間など、そう滅多には見れな

いだろ。

気分は最悪だ。

コイツはこんなのをオレに見せて、どうしたいんだ？

「んだよ、コレ？」

オレは手で口を押さえながら、アロウンを睨みつけながら訊く。

するとアロウンはこんなグロい写真でも、涼しい顔で答えた。

「中里君。キミは、【エンド】と言う組織を知っているか？」

## 無印編 八話目（後書き）

感想などはお好きなようにお書きください。  
誤字、脱字などありましたら報告お願いします……。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2983n/>

---

魔法少女リリカルなのは ～転生者達の戦い～

2011年3月9日02時40分発行